南台遺跡

茨城県筑西市

南台（なんだい）遺跡

― 都市計画道路一本松・茂田線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

二〇一一

2011

茨城県筑西市
筑西市教育委員会
株式会社東京航業研究所

茨城県筑西市

南台（なんだい）遺跡

― 都市計画道路一本松・茂田線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2011

茨城県筑西市
筑西市教育委員会
株式会社東京航業研究所

遺跡全景

７号周溝内埋葬遺物出土状況（南東より）

７号周溝内埋葬「朱」検出状況（北西より）

例　言

1．本書は、茨城県筑西市大塚46番地2ほかに所在する南台遺跡に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本調査は、都市計画道路一本松・茂田線整備事業に伴うもので、筑西市から調査委託を受けた株式会社東京航業研究所が行った。
3．調査については、筑西市教育委員会の指導を受けて実施した。
4．本調査地点における試掘調査は、平成21年（2009）10月28日～同年11月4日まで、本調査は平成22年（2010）8月11日～同年11月29日まで実施した。整理作業および報告書作成作業は、株式会社東京航業研究所において平成22年（2010）11月30日から翌23年（2011）3月25日まで実施した。
5．報告書の編集作業は渡辺久生（株式会社東京航業研究所）が行った。執筆は渡辺が行い、その他の執筆者は各項の文末に記した。
6．本遺跡で確認された遺構の実測は空中写真測量を主とし、トータルステーションを併用して行った。遺構写真撮影は折原覚（株式会社東京航業研究所）と渡辺が行い、遺物写真撮影は株式会社東京航業研究所が行った。
7．出土遺物は、整理作業が完了後に筑西市教育委員会に保管する。
8．本調査から報告書作成に至る過程において、多くの方々に御指導・御教示を頂いたことに深く感謝申し上げます。

調査体制

事　業　主　筑西市
調 査 機 関　株式会社東京航業研究所
調　査　員　渡辺久生（株式会社東京航業研究所）
調査補助員　小野麻人　折原　覚（株式会社東京航業研究所）
発掘調査参加者
北原　隆　藤田理子　高田幸江　佐藤武志　小野崎文男　野村由美子　小林法子　木幡　光
五十嵐隆　鈴木正弘　関美代子　仙波由美子　堀川　清　下条和一　吉田　豊　富田たか　松崎初江
谷中　浩　熊倉　勉　坂入辰一郎　関口利子　渡辺フク　中山元男　西田邦雄　松本和枝　柴　久江
佐藤としえ　小野崎いつ子　山崎正光
整理作業参加者
林　邦雄　立川栄二　平場京子　岡冨美江　會田歳子　吉田真由美　三森好子　姉崎慎一　山中慶太
柳沢雅裕　林　なつ江　宮本カツヨ

凡　例

1．本遺跡名の略号は「NAD」とし、出土遺物の注記等にもこれを用いた。
2．遺構実測図の方位は真北を示す。
3．本報告書に記載されている標高値はT．P点（東京湾平均海水面）を基準とし、座標数値は世界測地系を基準とする。
4．本報告書に掲載した図版の縮尺は、原則として次のとおりである。

全体図 1/500、住居跡 1/60・1/80、周溝（平面図・断面図）1/80・1/160、土坑 1/60
土器・土製品・石製品実測図 1/1・1/2・1/3・1/6

5．16・24 号土坑は欠番である。16 号土坑は 5 号住居跡の貯蔵穴とした。

6．遺物写真図版の縮尺は原則として遺物実測図と一致する。

7．遺物番号は本文、挿図番号、写真図版と一致する。

8．遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色帳（2008 年版）』を基準とした。

9．遺物観察表における法量の（ ）内数字は残存値であり、「 」内数字は推定値である。

10. 図版のマークは、●＝土器・★＝炭化材・△＝石製品・×＝朱を表す。

11. 挿図に使用したスクリーントーンの用例は、下記のとおりである。

須恵器 陶質土器

目次

例言　凡例　目次
第１章　序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第３節　遺跡の歴史的・地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第４節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第２章　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第２節　旧石器時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第３節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第４節　弥生時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　第５節　古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第６節　奈良・平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
　第７節　中・ 近世の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
　第８節　その他の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
　第９節　試掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第３章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
　第１節　土壌分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
　第２節　種実分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第４章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
　第１節　住居跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
　第２節　周溝について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
引用・参考文献　写真図版　報告書抄録

挿図・表目次

第1図　遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・3
第2図　南台遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・・・5
第3図　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・6
第4図　遺跡全体図・・・・・・・・・・・・7・8
第5図　旧石器時代の出土遺物・・・・・・・・10
第6図　26号土坑　・・・・・・・・・・・・・10
第7図　縄文時代の出土遺物・・・・・・・・・11
第8図　8・20号住居跡　・・・・・・・・・・13
第9図　8号住居跡出土遺物・・・・・・・・・14
第10図　1号住居跡　・・・・・・・・・・・・15
第11図　2号住居跡　・・・・・・・・・・・・17
第12図　2号住居跡出土遺物　・・・・・・・・18
第13図　3号住居跡　・・・・・・・・・・・・19
第14図　3号住居跡出土遺物　・・・・・・・・20
第15図　4号住居跡　・・・・・・・・・・・・22
第16図　4号住居跡炉跡　・・・・・・・・・・23
第17図　4号住居跡出土遺物　・・・・・・・・23
第18図　5号住居跡　・・・・・・・・・・・・25
第19図　5号住居跡出土遺物　・・・・・・・・26
第20図　6号住居跡　・・・・・・・・・・・・27
第21図　6号住居跡出土遺物　・・・・・・・・28
第22図　7号住居跡　・・・・・・・・・・・・30
第23図　7号住居跡出土遺物（1）・・・・・・31
第24図　7号住居跡出土遺物（2）・・・・・・32
第25図　7号住居跡出土遺物（3）・・・・・・33
第26図　9号住居跡　・・・・・・・・・・・・35
第27図　10号住居跡・・・・・・・・・・・・36
第28図　10号住居跡出土遺物（1）　・・・・37
第29図　10号住居跡出土遺物（2）　・・・・38
第30図　11号住居跡・・・・・・・・・・・・40
第31図　12号住居跡及び出土遺物・・・・・・41
第32図　13号住居跡及び出土遺物・・・・・・42
第33図　14号住居跡・・・・・・・・・・・・44
第34図　14号住居跡出土遺物・・・・・・・・45
第35図　15号住居跡及び出土遺物・・・・・・46
第36図　16号住居跡及び出土遺物・・・・・・47
第37図　17・19号住居跡・・・・・・・・・・48
第38図　18号住居跡・・・・・・・・・・・・49
第39図　1号周溝　・・・・・・・・・・・・・50
第40図　2号周溝　・・・・・・・・・・・・・52
第41図　2号周溝出土遺物　・・・・・・・・・53
第42図　3号周溝　・・・・・・・・・・・・・54
第43図　4号周溝及び出土遺物　・・・・・・・54
第44図　5号周溝　・・・・・・・・・・・・・55
第45図　6号周溝　・・・・・・・・・・・・・55
第46図　6号周溝出土遺物　・・・・・・・・・56
第47図　7号周溝　・・・・・・・・・・・・・57
第48図　7号周溝出土遺物　・・・・・・・・・58
第49図　8号周溝　・・・・・・・・・・・・・60
第50図　8号周溝出土遺物　・・・・・・・・・61
第51図　9号周溝　・・・・・・・・・・・・・62
第52図　9号周溝出土遺物　・・・・・・・・・63
第53図　10号周溝・・・・・・・・・・・・・64
第54図　10号周溝出土遺物・・・・・・・・・65
第55図　11号周溝及び出土遺物・・・・・・・66
第56図　12号周溝・・・・・・・・・・・・・67
第57図　13号周溝及び出土遺物・・・・・・・68
第58図　14号周溝・・・・・・・・・・・・・69
第59図　1号土坑及び出土遺物　・・・・・・・70
第60図　7・36号土坑・・・・・・・・・・・71
第61図　7・36号土坑出土遺物・・・・・・・72
第62図　3・4号溝　・・・・・・・・・・・・72
第63図　5号溝　・・・・・・・・・・・・・・73
第64図　性格不明遺構1及び出土遺物　・・・74
第65図　8号土坑及び出土遺物　・・・・・・75
第66図　2号土坑　・・・・・・・・・・・・・76
第67図　3号土坑及び出土遺物　・・・・・・76
第68図　1・2号溝　・・・・・・・・・・・・78
第69図　15・32号土坑出土遺物・・・・・・・80
第70図　その他の出土遺物　・・・・・・・・・81
第71図　試掘調査トレンチ配置図　・・・・・83
第72図　試掘調査出土遺物　・・・・・・・・84
第73図　プレス試料および元素
　　マッピング図・・・・・・・・・・・89
第74図　南台遺跡から出土した炭化種実　・・89
第1表　周辺の遺跡一覧・・・・・・・・・・・6
第2表　旧石器時代の遺物観察表・・・・・・10
第3表　縄文時代の遺物観察表・・・・・・・11

第4表　8号住居跡ピット観察表・・・・・・ 12
第5表　8号住居跡遺物観察表・・・・・・・ 14
第6表　2号住居跡ピット観察表・・・・・・ 16
第7表　3号住居跡ピット観察表・・・・・・ 16
第8表　2号住居跡遺物観察表・・・・・・・ 18
第9表　3号住居跡遺物観察表・・・・・・・ 20
第10表　4号住居跡ピット観察表・・・・・ 23
第11表　4号住居跡遺物観察表 ・・・・・・ 24
第12表　5号住居跡ピット観察表 ・・・・・ 24
第13表　5号住居跡遺物観察表 ・・・・・・ 26
第14表　6号住居跡ピット観察表 ・・・・・ 28
第15表　6号住居跡遺物観察表 ・・・・・・ 29
第16表　7号住居跡ピット観察表 ・・・・・ 29
第17表　7号住居跡遺物観察表 ・・・・・・ 33
第18表　9号住居跡ピット観察表 ・・・・・ 34
第19表　10号住居跡ピット観察表・・・・・ 35
第20表　10号住居跡遺物観察表・・・・・・ 38
第21表　11号住居跡ピット観察表・・・・・ 40
第22表　12号住居跡ピット観察表・・・・・ 40
第23表　12号住居跡遺物観察表・・・・・・ 41
第24表　13号住居跡ピット観察表・・・・・ 41
第25表　13号住居跡遺物観察表・・・・・・ 42
第26表　14号住居跡ピット観察表・・・・・ 43
第27表　15号住居跡ピット観察表・・・・・ 43
第28表　14号住居跡遺物観察表・・・・・・ 45
第29表　15号住居跡遺物観察表・・・・・・ 47
第30表　16号住居跡遺物観察表・・・・・・ 47
第31表　18号住居跡ピット観察表・・・・・ 48
第32表　2号周溝遺物観察表 ・・・・・・・ 53
第33表　4号周溝遺物観察表 ・・・・・・・ 55
第34表　6号周溝遺物観察表 ・・・・・・・ 56
第35表　7号周溝遺物観察表 ・・・・・・・ 58
第36表　8号周溝遺物観察表 ・・・・・・・ 61
第37表　9号周溝遺物観察表 ・・・・・・・ 63
第38表　10号周溝遺物観察表・・・・・・・ 65
第39表　11号周溝遺物観察表・・・・・・・ 66
第40表　13号周溝遺物観察表・・・・・・・ 69
第41表　1号土坑遺物観察表 ・・・・・・・ 71
第42表　7号土坑遺物観察表 ・・・・・・・ 72
第43表　36号土坑遺物観察表・・・・・・・ 72
第44表　性格不明遺構1ピット観察表 ・・・ 74
第45表　性格不明遺構1遺物観察表 ・・・・ 74
第46表　8号土坑遺物観察表 ・・・・・・・ 75
第47表　3号土坑遺物観察表 ・・・・・・・ 76
第48表　土坑一覧 ・・・・・・・・・・・・ 79
第49表　ピット一覧 ・・・・・・・・・・・ 80
第50表　15号土坑遺物観察表・・・・・・・ 80
第51表　32号土坑遺物観察表・・・・・・・ 80
第52表　その他の出土遺物観察表 ・・・・・ 82
第53表　試掘調査遺物観察表 ・・・・・・・ 84
第54表　分析試料 ・・・・・・・・・・・・ 85
第55表　半定量分析結果 ・・・・・・・・・ 86

写真図版目次

図版1　1・2・3・4号住居跡
図版2　4・5・6・7号住居跡
図版3　7・8・9・10号住居跡
図版4　10・11・12・13・14号住居跡
図版5　14・15・16・17・18・20号住居跡、1号周溝
図版6　1・2・3・4・5号周溝
図版7　6・7号周溝
図版8　8・9号周溝
図版9　10・11・12・13・14号周溝、1号土坑
図版10　2・3・8号土坑、2・3・4・5・6区完了
図版11　旧石器時代出土遺物、縄文時代26号土坑出土遺物、弥生時代8号土坑出土遺物
図版12　古墳時代2号住居跡出土遺物、3号住居跡出土遺物（1）

図版 13　3 号住居跡出土遺物（2）、4・5 号住居跡出土遺物
図版 14　6 号住居跡出土遺物
図版 15　7 号住居跡出土遺物（1）
図版 16　7 号住居跡出土遺物（2）、10 号住居跡出土遺物（1）
図版 17　10 号住居跡出土遺物（2）、12・13 号住居跡出土遺物
図版 18　14・15・16 号住居跡出土遺物、2・4・6 号周溝出土遺物
図版 19　7・8 号周溝出土遺物
図版 20　9・10・11・13 号周溝出土遺物、1・35 号土坑出土遺物、性格不明遺構出土遺物
図版 21　3・8・15・32 号土坑出土遺物、その他出土遺物（1）
図版 22　その他出土遺物（2）、試掘調査出土遺物

第1章　序　章

第1節　調査に至る経緯と経過

1　調査に至る経緯

平成21年2月18日、筑土木第114号にて筑西市長（担当：市土木部土木課、以下「市土木課」）から、都市計画道路一本松・茂田線（B区間）整備事業に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」が提出された。事業予定地には、南台遺跡が所在しており筑西市教育委員会（以下「市教委」）が同年10月に試掘調査を実施した。

調査の結果、遺跡から遺構と遺物の所在が確認されたため、市土木課は、市教委と今後の遺跡の取扱いについて協議を行ったが、工事の計画変更は困難であることから文化財保護法第94条の規定に基づき、平成21年11月9日付け筑土木第95号にて、茨城県教育委員会教育長（以下「県教育長」）あて「埋蔵文化財発掘の通知について」を提出した。その後、同年12月21日付け文第1629号にて、県教育長より工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があり、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

これを受けて市土木課は、市教委と発掘調査の実施に向けて調整を図り、調査を株式会社東京航業研究所に委託することとした。調査に際しては、市土木課、市教委、株式会社東京航業研究所の三者により発掘調査に関する協定書を締結するとともに、株式会社東京航業研究所より文化財保護法第92条の規定に基づき、平成22年7月5日付け県教育長あて「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が提出された。調査は、市土木課が経費を負担し市教委の指導のもとに、平成22年8月から11月にかけて現地調査、同年11月から翌23年3月まで整理作業・報告書作成が行われた。（筑西市教育委員会）

2　調査の経過

発掘調査は平成22年8月11日から同年11月29日までの約3ヶ月に亘り実施した。整理作業は同年11月30日から平成23年3月25日まで行った。

（発掘調査）

8月 5日　発掘調査機材の搬入、仮設事務所等の設置作業を行った。

8月11日　調査区内を走る市道の安全施設の設置および重機を用いて表土掘削作業を開始した。表土掘削作業は、調査区の広さを考慮し、調査区1・2区を先ず行い、3～6区は調査の進捗状況を考慮して後日行うこととした。表土は比較的浅く、15～40cmの深さで遺構確認面に達している。

8月17日　本日から調査区2区の発掘調査に着手した。遺構の確認作業を行い、住居跡や周溝・溝等を確認し、調査区東部から西部に向かい順次遺構調査を行った。良好な天候に恵まれ、表土の乾燥が激しく動力噴霧器を使用して散水を行いながらの調査であった。調査区2区の遺構は、住居跡7軒、周溝4基、溝1条を確認した。

8月25日　調査区1区の表土掘削作業が完了し、遺構確認作業を着手した。周溝5基（内1基は2区と同一）住居跡1軒・溝3条・土坑数基を検出する。

9月 1日　調査区2区の調査を行った。2号周溝は覆土が予想外に深く、焼土や炭化材を多く検出した。2区の遺構からは想定外に多くの遺物が出土している。

9月15日　9月に入り天候不順のためやや遅れていた調査の期間を取り戻すために、土曜日にも作業を行うこととした。

9月29日　調査区2区の調査も終了に向かい一段落したので、調査区1区の調査に着手し、1・2区の調査を同時に行うこととした。
10月 6日　調査区3・4区の表土掘削に着手した。3・4区の調査を行った。
10月 9日　調査区5・6区の表土掘削を行い、12日に全ての調査区の表土掘削は完了する。5・6区の調査に着手した。
10月14日　調査区3区の周溝と住居跡の調査に着手する。8号周溝では周溝覆土上層から、中世の陶磁器や土器等が集中して出土している。
10月21日　1回目のラジコンによる空中写真測量を行った。
10月29日　調査区3・4区の調査は完了した。
10月30日　予定していた現場説明会は、台風による悪天候のため中止となった。
11月16日　現地調査は完了し、ラジコンによる2回目の空中写真撮を行った。
11月17日　筑西市土木課および筑西市教育委員会による終了確認を受ける。筑西市教育委員会から遺構の範囲確認のため、調査区を拡張して欲しいとの要請があり、19・20日に拡張作業を行った。
11月19日　市道の安全確保のために設置していたフェンスを撤去した。
11月20日　埋め戻し作業に着手し、天候の影響もあり11月27日に完了する。
11月29日　筑西市土木課による埋め戻しの確認を受けた。現地作業を完了する。
（整理作業）
整理作業は平成22年11月30日から平成23年3月25日まで行った。遺物の水洗・接合は整理期間が短いため、現地作業と一部並行して行っている。実測は平成22年11月から平成23年2月まで行い、平成23年1月から2月には遺物整理と並行して、写真の整理・写真測量をした遺構等の図化作業をＳＴＰ（デジタル図化解析機）を用いて行った。
2～3月には遺構図の修正及びトレース、遺物写真撮影、図版作成、原稿執筆などの作業を行い、3月に報告書編集作業を行い、報告書を刊行した。（渡辺）

第2節　調査の目的と方法

1　調査の目的

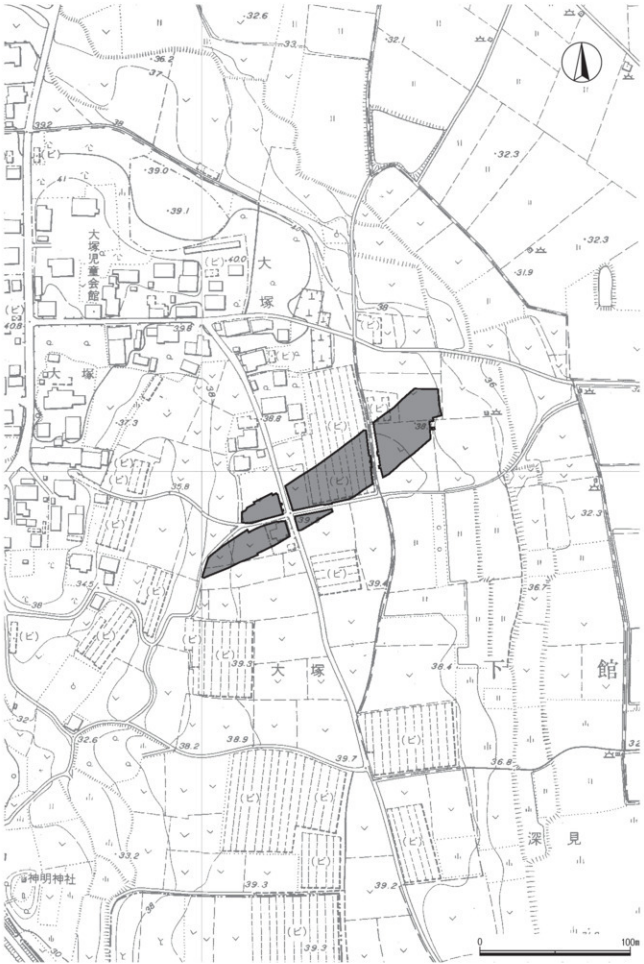
本調査は都市計画道路一本松・茂田線整備事業に先立ち、当該地に所在する埋蔵文化財（南台遺跡）の記録保存を目的とする。発掘調査・整理作業を通じて遺構や遺物の質・量の実態を記録し、発掘調査報告書を刊行するなど、公開することによって地域の古代史研究の一助となることを期待する。

2　調査の方法

発掘調査範囲の面積は5,188㎡を測る。調査範囲を市道や生活道路が縦横断していること、残土の置き場が限定されていることから、調査範囲を1～6区に区分して調査を実施した。調査区の表土掘削も1・2区と3～6区の2回に分けて行った。表土は約20cm～60cmの厚さである。表土掘削は重機を使用して行い、遺構確認作業は人力によって行った。

調査区全域を網羅するように4mのグリッドを設定し、北から南にＡ・Ｂ・Ｃ‥‥、東から西に1・2・3‥‥を付した。グリッドの基準となる座標は公共座標（世界測地系）を基準とした。

遺構番号は調査した順に付し、住居跡（SI01‥‥）・周溝（SM01‥‥）・土坑（SK01‥‥）・溝（SD01



第1図　遺跡の位置（1：2,500）

……）・小穴（P01……）とそれぞれ呼称した。

調査は、住居跡には十字に土層観察用ベルトを設定し、重複関係が想定される住居跡は必要なベルトを設定した。周溝には基本的に東西・南北方向に土層観察用ベルトを設定し、必要に応じてベルトを追加設定した。土坑・ピットについては必要に応じ半截した。遺構平面図は空中写真測量を利用し、土層等の実測は現地にての手実測で処理した。

遺構平面図の縮尺は、住居跡1：60、1：80・住居の炉跡1：40・周溝1：80、1：160・土坑1：60・その他の遺構は原則として1：60で掲載した。遺構出土遺物は必要に応じてトータルステーションにて3次元測量・写真測量を行い採取した。（渡辺）

第3節　遺跡の歴史的・地理的環境

1　歴史的環境

南台遺跡（第2図23）は、小貝川の左岸に形成された沖積地を西に望む台地上に位置する。南台遺跡が所在する台地には、古墳時代を中心とする遺跡が多数所在する。

南台遺跡が所在する台地縁部には、台畑古墳・灯火山古墳の大型前方後円墳を始めとする古墳群が形成され、南台遺跡の西方の沖積地には、大型の前方後円墳である葦間山古墳が所在する。

灯火山古墳（第2図02）は、平成2年（1990）に、確認調査が行われ、前方部を南西に向けた前方後円墳であることが確認された。古墳の規模は全長約70m、後円部径46m・高さ約8m、前方部幅約22m・高さ約2.5mを測る大型の前方後円墳である。調査時の出土遺物は縄文土器・弥生土器・石製品・古式土師器であり、総数40点である。出土遺物から古墳の構築時期は、古墳時代前期であると思われる。

台畑古墳（第2図01）は、平成3年（1991）筑波大学が測量調査を行っている。前方部を南東に向けた前方後円墳で、規模は全長72m、後円部径36m、前方部長36m、前方部幅28m、高さは後円部約6.5m、前方部3.5～4.5mと推定される。

葦間山古墳（第2図12）は、昭和28年（1953）に、明治大学が測量調査を行っている。古墳は前方部を南東に向けている。古墳の規模は、現在長約90ｍ（前方部が削られている）、後円部径約50m・高さ13m、前方部の現在長40m・高さ約11mを測り、推定の全長は100ｍを超えると推定される。

南台遺跡の北には、新田前古墳群（第2図08）・宮端古墳群（第2図09）が所在するが、墳丘はすでに削平されている。南台古墳群（第2図07）もすでに墳丘は削平され、土中に古墳周溝が観られるだけである。

本遺跡が所在する台地上には広く遺跡が分布し、遺跡が営まれた時代を観ると、中根十三塚遺跡、中妻（倉持）遺跡から旧石器時代の石器が出土していることや今回の調査でも旧石器時代の遺物が検出されていることから、旧石器時代には人間の生活が営まれていたようである。縄文時代や弥生時代・古墳時代と遺跡が連綿と続いている。

2　地理的環境

南台遺跡は、筑西市大塚46番地2ほかに所在する。筑西市は平成17年（2005）3月に、下館市・真壁郡関城町・明野町・協和町と合併して筑西市となった。筑西市は茨城県の北西部に位置し、市の北部で栃木県真岡市（旧二宮町）と隣接する。

筑西市は、関東平野を一望する筑波山の西に所在する。筑西市は東を小貝川、西を鬼怒川に挟まれた標高20～60ｍの比較的平坦な地形である。

第２図　南台遺跡と周辺の遺跡（国土地理院発行１：25,000『下館』『真壁』に加筆）

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代・時期						備考	番号	遺跡名	時代・時期						備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世以降				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世以降	
7	南台古墳群				○			◆	22	村東遺跡				○	○		※
8	新田前古墳群				○			◆	23	吉田金井遺跡				○	○		※
9	宮端古墳群				○			◆	24	吉田新田前遺跡				○	○		※
10	北茂田古墳群				○			◆	27	内淀西遺跡				○	○	○	※
12	徳持（草間山）古墳				○			◆	29	北明遺跡				○	○		※
13	島古墳				○			◆	30	西明遺跡				○	○		※
22	宮端遺跡		○		○			◆	31	屋敷付西遺跡				○	○		※
23	南台遺跡		○	○	○	○		◆	32	屋敷付南遺跡						○	※
26	赤城前遺跡		○					◆	56	稲荷前遺跡				○	○	○	※
67	北原遺跡					○		◆	57	石倉西遺跡				○	○		※
1	台畑古墳				○			※	59	中根遺跡				○	○	○	※
2	灯火山古墳				○			※	132	原遺跡				○	○	○	※
3	えんなみ台遺跡		○		○	○		※	54	申合遺跡				○	○		☆
20	三所宮北遺跡				○	○	○	※	55	行人山遺跡				○	○	○	☆
21	三所宮南遺跡				○	○	○	※	59	境ノ町遺跡				○	○		☆

◆旧下館市　※旧明野町　☆旧協和町

遺跡は西方を南流する小貝川と五行川の合流点から東に約1.5Kmの地点に位置し、２本の河川が形成した沖積地に面し、比高差は約11.5mを測る。遺跡の東は小貝川から派生した小支谷に面し、比高差は約7.5mである。遺跡が展開する台地は、東西に約450mと狭く、筑西市大塚地区が北端となり、南は倉持地区へと続き細長く形成され、標高約40mを測り、多少の起伏が見られるが概して平坦である。（渡辺）

第４節　基本土層

基本土層の観察は、調査区２区の中央部に２×２ｍのテストピットを設定して土層の観察を行った。Ⅰ層は耕作土であり、Ⅱ層上面が遺構の確認面である。Ⅲ層はハードローム層、Ⅳ層は黒色帯である。Ⅴ層は粘性の強いロームである。Ⅵ層は鹿沼土層である。

テストピット内からは旧石器時代の遺構・遺物は検出されていない。

Ⅰ層　10YR3/2 黒褐色土層　耕作土　締まりなし　粘性なし

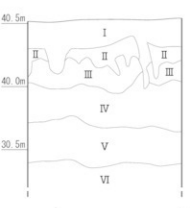
Ⅱ層　10YR5/8 黄褐色土層　ローム粒・ロームブロックからなる層　締まりなし　粘性普通

Ⅲ層　10YR3/4 暗褐色土層　ローム小ブロックを少量含む　締まり強い　粘性強い

Ⅳ層　10YR3/3 暗褐色土層　締まり強い　粘性強い

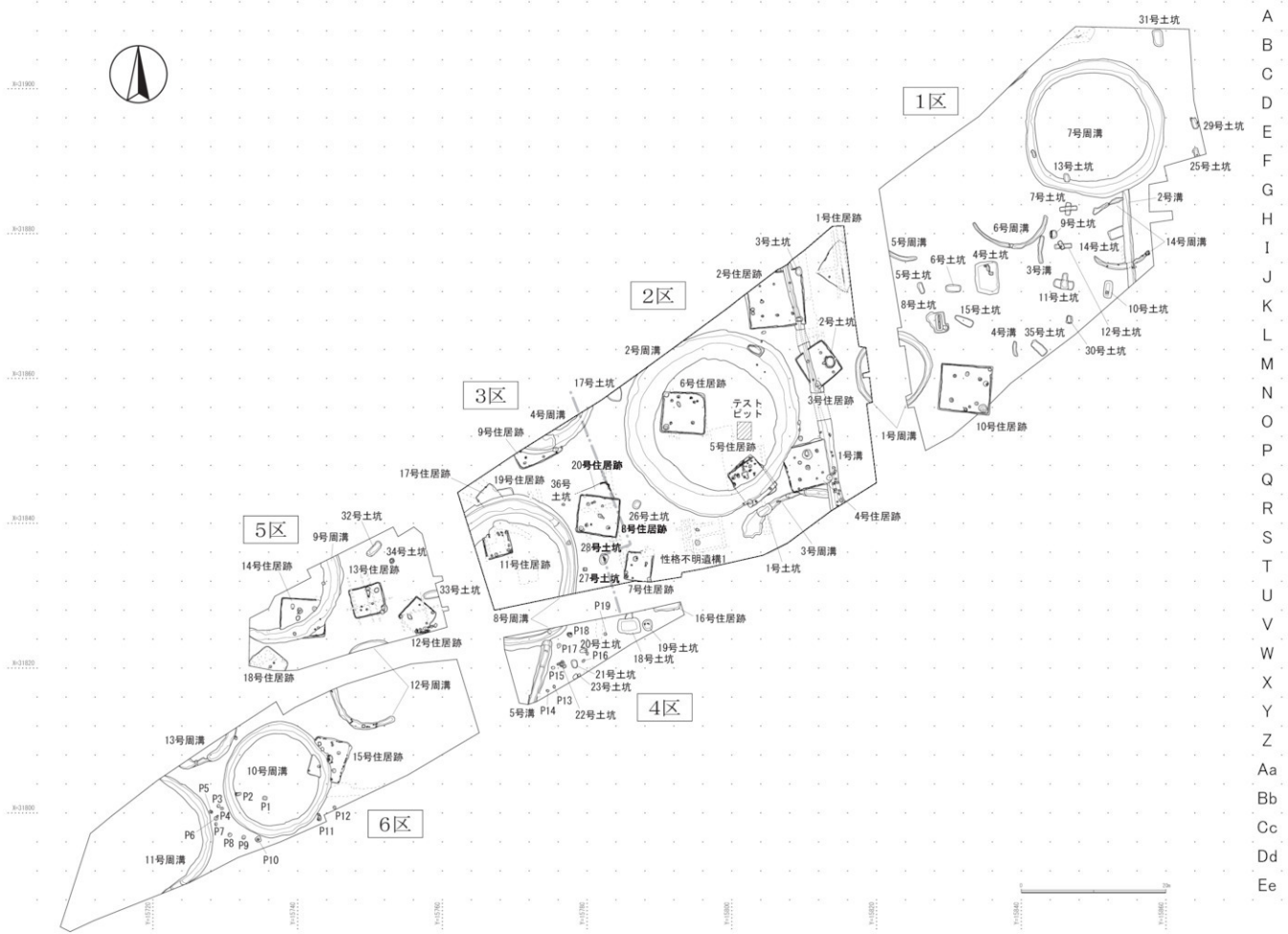
Ⅴ層　10YR6/8 明黄褐色土層　締まり強い　粘性強い

Ⅵ層　10YR5/8 黄褐色土層　鹿沼土層　締まりなし　粘性なし



第３図　基本土層（１：30）

（渡辺）



第４図　遺跡全体図（１：500）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

検出された遺構は、住居跡 20 軒、周溝 14 基、土坑 34 基、溝５条、ピット 19 基である。

住居跡の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期に営まれたものである。弥生時代後期に属する住居跡は２軒、古墳時代前期に属するものは 15 軒である。また、時期不明の住居跡３軒が所在する。時期を推定できない住居跡は、すでに表土掘削時には住居の床面が確認できる状態で検出されたため、住居に伴う遺物は少なく、時期を確定できる遺物は出土していないことによる。しかし、精査する中で住居跡の形状などから古墳時代前期の範疇に入るものとして判断した。

検出した 14 基の周溝は、周溝の形状や規模が異なる２種類（Ａ類とＢ類）のタイプに分けることができる。Ａ類は１・３・５・６・12 ～ 14 号の周溝、Ｂ類は２・４・７・８ ～ 11 号の周溝である。

Ａ類の周溝は、直径 10m 前後、溝幅 0.5 ～ 1.0m、深さ 0.5m 前後を測る。溝の断面形状は「箱形」か「Ｕ」字形を呈する。溝の時期は遺物等が少なく、時期不明の溝が多くみられるが、五領式土器や和泉式土器を出土する溝もある。これらの溝は弥生時代の周溝墓の系譜を引く溝である。

Ｂ類の周溝は直径 15.2 ～ 24.7m、幅 1.0 ～ 5.0m、深さ１m前後を測り、溝の断面形状は外壁がほぼ直立し、内壁は墳丘中央部に向かい緩やかな傾斜を有する。古墳の周溝に観られる形状を示している。出土遺物は鬼高式土器を伴うものの、埴輪は伴わない。

出土遺物は、旧石器時代から中・近世まで出土している。その数量は、旧石器時代 20 点・重量 291g、縄文土器 302 点・重量 6,250g、石器 23 点・重量 5,156g、弥生土器 612 点・重量 8,318g、古墳時代土師器 9,781 点・重量 129,501g、須恵器 479 点・重量 23,146g、埴輪５点・重量 136g、土製品 69 点・重量 4,629g、中・近世遺物 286 点・重量 2,446g、中・近世石器５点・重量 158g、細片 1,565 点・重量 2,232g、鉄製品 55 点・重量 387g、銭貨６枚・重量 14g、石 111 点・重量 8,919.5g である。

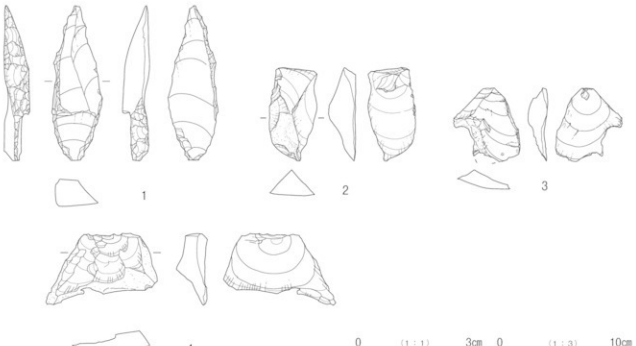
出土遺物の総量は 13,319 点・重量 191,583.5g を量る。遺物の材質別の数量比、旧石器 0.15%、縄文土器 2.27%、縄文石器 0.17%、弥生土器 4.59%、土師器 73.44%、須恵器 3.60%、埴輪 0.04%、土製品 0.52%、中・近世遺物 2.18%、細片 11.75%、鉄製品 0.41%、銭貨 0.05%、石 0.83% である。重量比は旧石器 0.15%、縄文土器 3.27%、石器 2.69%、弥生土器 4.34%、土師器 67.60%、須恵器 12.08%、埴輪 0.07%、土製品 2.42%、中・近世遺物 1.36%、細片 1.17%、鉄製品 0.20%、銭貨 0.01%、石 4.66% の割合である。

遺構外出土の遺物は、旧石器４点・重量 51g、縄文土器 40 点・重量 351g、石器５点・重量 563g、弥生土器 31 点・重量 195g、土師器 555 点・重量 3361g、須恵器 14 点・重量 216g、土製品（埴輪片３点）８点・重量 102g、中・近世遺物 124 点・重量 979g、鉄製品 20 点（内１点が鉄鏃）・重量 120g、細片 134 点・重量 210g、石４点・重量 101g を量る。遺物の組成は、古墳時代の遺物（土師器）を主体とする構成である。

（渡辺）

第２節　旧石器時代の遺物（第５図　図版 11）

旧石器時代の遺物は少なく、総数で 20 点である。第５図１はナイフ形石器で、二側縁調製品（茂呂形ナイフ）、２は加工痕剥離片であり、二次加工痕が散在する。１・２の材質は頁岩である。３は剥離片であり、材質はメノウである。１は表採、２・３は２号周溝覆土から出土し、遺構には伴わない。　（渡辺）



第５図　旧石器時代の出土遺物

第２表　旧石器時代の遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1		石器	ナイフ形石器	－	－	幅 1.3	－	全長 4.1	二側縁調製品（茂呂形ナイフ）　万潰し加工は深形で表裏からなされる　剥片素材の末端側を刃部とし、刃部には微細剥離痕残す				頁岩
2		石器	加工痕剥離片	－	－	幅 3.8	－	長さ 7.4	節理面主体の複剥離打面　自然面残　腹面側右側縁に二次加工痕跡在				頁岩
3		石器	剥片	－	－	幅 5.2	－	長さ 5.8	単打面・不整形　末端一部折れ　背面・剥離痕中大きな節理あり				メノウ
4		石器	剥片	－	－	幅 3.0 高さ 1.9	－	－	剥離打面　頭部調整痕　背面・剥離痕状の風化面				黒曜石

第３節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代に属する遺構は、土坑１基である。土坑からの出土遺物はなく、覆土の状態から推測したものである。

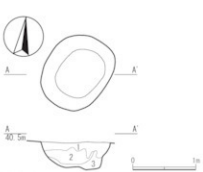
26 号土坑（第６図　図版 11）

位置・重複　調査区２区（R－21 グリッド）に位置する。他の遺構等との重複はない。

形状・規模　土坑の平面形は楕円形を呈し、断面形は鍋底形である。土坑の規模は長径 1.26m、短径 1.00m、深さ 49.2cm を測る。

出土遺物　土坑に伴う遺物等は出土していない。

時期　土坑の時期は、土坑の覆土（褐色土）から縄文時代であると推定している。

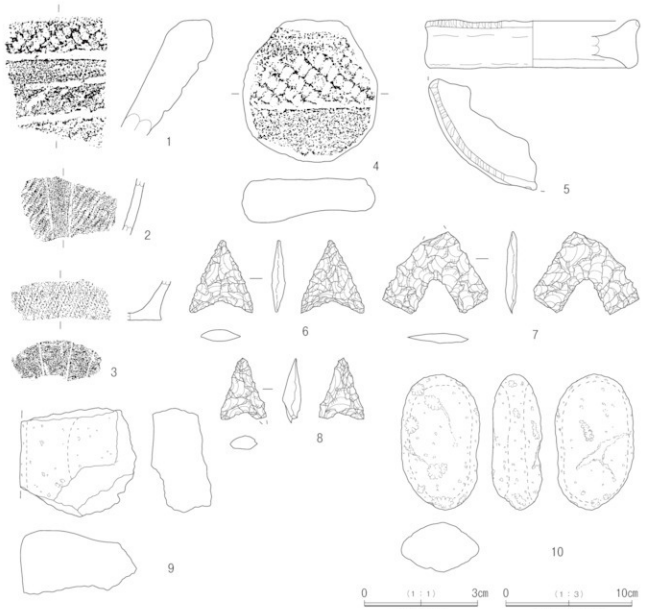


26号土坑
1　10YR4/3　鈍い黄褐色土　（耕作土の一部）　締まりなし　粘性なし
2　10YR3/3　暗褐色土　鈍いローム を混入　締まりなし　粘性普通
3　10YR4/4　褐色土　鈍いローム を多く含む　締まりあり　粘性あり

第６図　26 号土坑（１：60）

今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、総数325点である。図示した遺物は土器片３点、土製品２点、石器５点である。いずれも遺構覆土や表採遺物であり、遺構に伴うものではない。第７図１～３は縄文時代後期に比定される。４・５は土製品であり、４は土器の口縁部を利用した円盤形土製品である。５は耳飾りの1/4破片であり、上面に刻文が施されている。

石器は、石鏃（黒曜石）３点、石皿（安山岩）１点、磨石（安山岩）１点である。（渡辺）



第７図　縄文時代の出土遺物

第３表　縄文時代の遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文後期	縄文	深鉢	口縁部	10.0	不明	不明	(3.4)	内・横位ミガキ　外・無節斜縄文→横位平行沈線　３条	石英・チャート少量	良	内・外面 7.5YR3/2 黒褐色	
2	縄文後期称名寺	縄文	深鉢	胴部	10.0	不明	不明	(1.7)	内・ナデ　外・単節縄文→櫛位の平行沈線	石英中量	良	内・7.5YR6/8 橙色 外・7.5YR7/8 橙色	

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
3	縄文後期堀之内	縄文	深鉢	底部	5.0	不明	不明	(1.1)	内・ミガキ　外・無節撚糸文 底部木葉痕	石英中量	良	内・7.5YR5/8 明褐色土 外・7.5YR5/6 明褐色土	
4	縄文後期	縄文	深鉢	口縁部	10.0	3.6	－	3.8	内・ミガキ　口唇部打ち欠く 外・単節RL	石英・砂中量	良	内・外面 7.5YR3/2 黒褐色	円形土製品
5		縄文土製品	耳飾り	－	25.0	5.6	－	1.3	全体にナデ　上面に刻文有	砂中量	良	上面 5YR6/6 橙色 裏面 5YR4/1 褐灰色	
6		石器	石鏃	－	10.0	幅 1.7	－	長さ 1.9	凹基無茎鏃　各辺の長さはほぼ等しい　両面全面調整				チャート
7		石器	石鏃	－	9.5.0	幅 2.8	－	長さ 2.1	尖端部欠　凹基無茎鏃　脚部の底辺を鏃で択りかなり深い　実端部は広角				黒曜石
8		石器	石鏃	－	10.0	幅 1.3	－	長さ 1.6	凹基無茎鏃　片脚欠				黒曜石
9		石器	石皿	－	10.0	－	－	長さ (8.2)	側面・研磨有　中央部は深く凹む				安山岩
10		石器	磨石	－	10.0.0	幅 6.2	－	長さ 10.8	全面に弱い磨痕　部分的に敲打痕も見られることから敲打器としても使用したと思われる				安山岩

第４節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、住居跡２軒である。

８号住居跡（第８・９図　図版３）

位置・重複　住居跡は調査区３区（R・S－22・23 グリッド）に位置する。20 号住居跡と北側で重複する。20 号住居跡の床を８号住居跡が切っている。

形状・規模　平面形は N－84°－W 長軸方向を示す方形を呈する。住居跡の規模は長軸 5.80m、短軸 5.43m、確認面（40.323m）からの深さ 31.1cm を測る。床面から炭化材や焼土が検出されており焼失住居であると思われる。床面は平坦であり、遺存状態は良好な貼り床である。壁は直立し、壁に沿って壁周溝が、幅 19 ～ 23cm、深さ４～ 10cm の規模で住居跡を一周する。

柱穴・炉　柱穴は P1 ～ P4 の４箇所と推定される。柱穴の規模は長径 27 ～ 52cm、短径 26 ～ 48cm、深さ 26 ～ 51.2cm を測る（第４表「ピット観察表」）。柱穴の規模に差異があるが、ピットの位置から推定した。貯蔵穴（P5）は、南西コーナー部に位置し、規模は長径 58cm、短径 56cm、深さ 41.2cm を測り、平面形は方形を呈している。

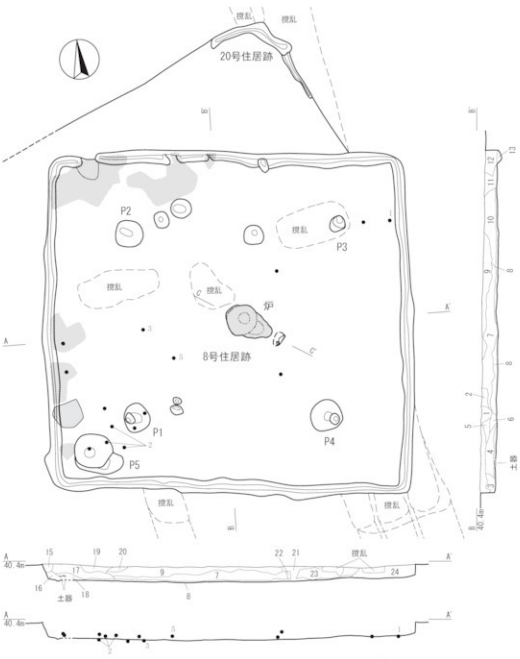
炉跡は住居跡のほぼ中央部に位置し、長径 74cm、短径 50cm を測る。炉の平面形は楕円形を呈する。炉跡は良好な状態であるが、炉跡の北西部と南東側に掘乱と思われるピットがある。南東側のピット上には、被熱していない２個の礫を検出した。

出土遺物　弥生時代の遺物は多くはないが、弥生時代後期末に比定する前野町式土器が、住居跡床面直上から出土している（第９図-1・2）。出土している土師器に関しても五領式土器の古いタイプが多く観られる。

住居跡からの出土遺物の総量は 427 点・重量 5,821g を量り、内訳は縄文土器１点・重量 35g、縄文石器１点・重量１g、弥生土器 13 点・重量 1,156g、土師器 319 点・重量 2,851g、土製品２点・重量 49g、中・近世遺物１点・重量 14g、鉄製品３点・重量 116g、細片 32 点・重量 29g、石２点・重量 1,200g である。出土遺物の多くは土師器が占め、数量比は 72.60% であり、弥

第４表　８号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	円形	円錐形	45	41	26	柱穴
P2	円形	円錐形	43	41	33.9	柱穴
P3	円形	円錐形	27	26	28.3	柱穴
P4	円形	円錐形	52	48	51.2	柱穴
P5	隅丸方形	袋状形	58	56	41.2	貯蔵穴

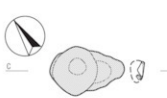


8号住居跡　SPA～SPA'

15　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック(2mm)を含む　締まり普通　粘性普通
16　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロック(1mm)を少量含む　締まりなし　粘性なし
17　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物を含む　締まり普通　粘性普通
18　10YR4/3　鈍い黄褐色土　ローム粒を多量に含む　締まりあり　粘性普通
19　10YR3/2　黒褐色土　締まりなし　粘性なし
20　10YR5/6　黄褐色土　ローム土体　締まり普通　粘性普通
21　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を個入　締まりなし　粘性なし
22　10YR4/4　褐色土　ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
23　10YR4/3　鈍い黄褐色土　ローム粒多く、炭化物を少量含む　締まり普通　粘性普通
24　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　焼土を少量含む　締まりなし　粘性なし

8号住居跡　SPB～SPB'

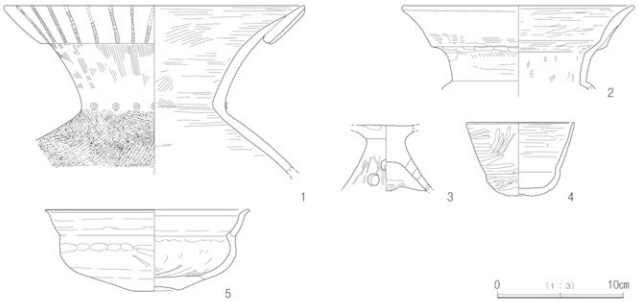
1　10YR2/3　黒褐色土　黒褐色土層を多く、ローム粒を含む　締まりなし　粘性普通
2　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR4/4　褐色土　暗褐色土層をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒多く含む　締まり普通　粘性普通
5　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
6　10YR4/4　褐色土　ロームブロック(1mm)を多く含む　締まり普通　粘性普通
7　10YR4/4　褐色土　ロームブロック(3～5mm)・ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
8　10YR3/3　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性あり
9　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
10　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
11　10YR2/2　黒褐色土　締まりなし　粘性なし
12　10YR4/3　鈍い黄褐色土　焼土粒・炭化物を個入する　締まりなし　粘性なし
13　10YR4/6　褐色土　鈍いローム　締まり普通　粘性あり



8号住居跡炉跡

1　7.5YR4/6　赤褐色土　焼土　締まりあり　粘性なし
2　10YR5/8　黄褐色土　生地けのローム　締まりあり　粘性なし
3　10YR6/4　鈍い黄褐色土　灰も多量に含む　締まりなし　粘性なし
4　10YR2/1　黒色土　炭化物を主体とする　締まりなし　粘性なし
5　10YR2/3　黒褐色土

第8図　8・20号住居跡（1：60、1：40）



第９図　８号住居跡出土遺物

第５表　８号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	前野町	弥生式土器	甕	口縁部	30.0	24.0	－	（13.4）	内・横位クシ状工具による整形→ヘラミガキ　外・縦位クシ状工具による整形→ヘラミガキ　縄文（LR　単節）　浮線文（4本）	小石中量 石英微量	良	内・2.5YR4/8赤褐色 外・5YR5/4にぶい赤褐色	口縁部内外面に赤色塗彩
2	前野町	弥生式土器	壺	口縁部	30.0	18.6	－	（6.6）	内・　ヘラミガキ　外面　縦位ミガキ　頸部ミガキ	白色粒・砂中量	良	内・5YR5/8明赤褐色 外・5YR5/8明赤褐色	頸部赤色塗彩
3	五領式	土師器	高坏	脚部	30.0	－	－	（5.7）	内・ヘラ削り　外・縦位ヘラミガキ　脚部孔　脚部径 1cmの孔あり	石英・小石中量	良	内・外面5YR5/6明赤褐色	
4	五領式	土師器	壺	－	100.0	8.6	1.6	5.9	内・横位ヘラミガキ　外・ヘラミガキ	雲母微量・小石中量	良	内外面 5YR4/6赤褐色	内面身部表面剥離有
5	五領式	土師器	坏	口縁部	70.0	「16.4」	3.8	6.2	内・　ヨコナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキ	石英・砂混入	良	内外面2.5YR4/6赤褐色	底部凹凸有　外面一部スス付着

生土器は17.56%を占める。調査したなかで、最も多くの弥生土器を出土した住居跡である。

時期　住居跡の時期は、土師器片が多く出土しているが、床面から弥生土器の口縁部が出土していることを考慮し、弥生時代後期に属する住居跡と推定している。

20号住居跡（第８図　図版５）

位置・重複　住居跡は調査区３区（Q－22グリッド）に位置する。住居南部では８号住居跡に切られている。表土掘削時に東部の床面を確認した住居跡である。住居跡の西部はすでに床面を削除され、東部では撹乱を受けている。

形状・規模　住居跡の形状は、残存した僅かな東部の床面と壁の立ち上がりから、平面形は方形を呈すると考えられるが規模は不明である。

柱穴・炉　柱穴・炉ともに検出されていない。

出土遺物　住居跡からは土師器が４点・重量9gが出土している。

時期　住居跡の出土遺物と８号住居跡との関係から弥生時代後期頃と推定される。（渡辺）

第５節　古墳時代の遺構と遺物

１．住居跡

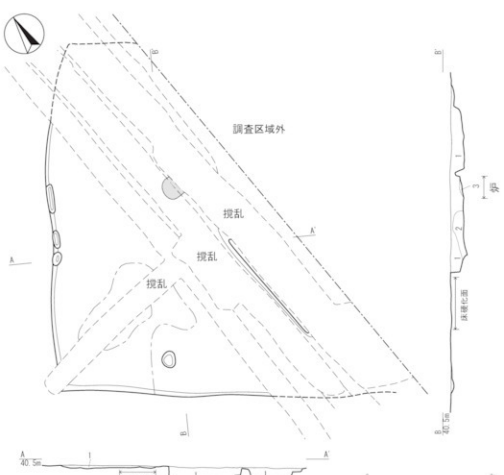
古墳時代の住居跡は時期が明らかなものは15軒であり、いずれも古墳時代前期に属するものである。時期が不明な住居跡３軒も、住居跡の形状から古墳時代前期の範疇に入るものと推定される。

１号住居跡（第10図　図版１）

位置・重複　住居跡は調査区２区（Ｉ・Ｊ-14グリッド）に位置し、住居跡の東部約1/2が調査区外に広がる。住居の大半が耕作による撹乱を受け、撹乱は住居の床面直上まで達しており、覆土はほとんど観察されない。他の遺構との重複は観られない。

形状・規模　平面形は方形を呈し、長軸方向はN-27°-Wでる。調査可能な規模は長軸（5.52m）、短軸（1.60m）を測る。確認できた床面は平坦であり、遺存状態が良好な貼り床である。貼り床の一部に焼土の痕跡が観られる。壁周溝は一部が検出され、幅10～15cm、深さ５～８cmを測る。

柱穴・炉　柱穴は確認できなかった。炉跡は住居跡のほぼ中央部に位置するが、撹乱の溝と溝の間に僅かに



第10図　１号住居跡（１：60）

痕跡を残すのみである。

出土遺物　本住居跡から出土した遺物の多くが破片であり、実測できる資料は皆無である。したがって住居の時期は、出土した土師器片から推定した。土師器片は五領式土器が多くを占めている。

遺構からの出土遺物の総数は36点・重量197gを量り、その内訳は縄文土器1点・重量3g、弥生土器7点・重量18g、土師器24点・重量125g、須恵器1点・重量2g、陶器1点・重量1g、瓦質土器1点・重量10g、礫1点・重量38gである。住居跡に伴う遺物は、土師器8点・重量35gである。数量比で土師器が全体の66.67%を占める。

時期　出土遺物や炉を設置していることなどから古墳時代前期の住居跡であると推定される。

2号住居跡（第11・12図　図版1・12）

位置・重複　住居跡は調査区2区（J・K-15・16・17グリッド）に位置し、住居跡北西コーナー部は調査区外に広がる。住居跡東部は中・近世の1号溝が南北に縦断し、また北東コーナー部には中世の3号土坑が掘り込まれている。

形状・規模　平面形はN-9°-Wを長軸方向とした方形である。規模は長軸7.78m、短軸7.72m、確認面（40.441m）からの深さ53.7cmを測る。住居跡の壁は直立する。壁周溝は幅10～24cm、床面からの深さ7cmの規模で、住居をほぼ一周している。

床面は褐色土を平坦に敷いた貼り床であるが、全体にやや軟弱である。床面上部から炭化材や焼土が多く検出された。

柱穴・炉　柱穴はP2～P8の7箇所で検出した。規模は長径22～48cm、短径21～33cm、深さ42.8～66.1cmを測る。西側に出入り口の施設と推定されるピットが2箇所（P9・10）所在する。P1は貯蔵穴と推定され、住居跡南東部で検出されている。P1から遺物は出土していない（第6表「ピット観察表」）。

炉跡は住居の中央部東側に位置し、南北に走る1号溝によって大半が消失し、僅かに炉の西側が残存している。現存する炉跡の大きさは、長径24cm、短径20cmを測る。

出土遺物　住居跡からの出土遺物は、和泉式土器を主体としている。本住居跡からは、小型丸底壺形土器・甕形土器・坏形土器、土玉が出土している。

住居跡からの遺物の出土量は、総量649点・重量9,244gであり、その内訳は。縄文土器31点・重量383g、弥生土器26点・重量245g、土師器329点・重量5,414g、須恵器9点・重量36g、土製品2点・重量22g、中・近世遺物4点・重量21g、細片221点・重量385g、石26点・重量2,734g、鉄製品1点・重量4gである。土師器が出土遺物の大半を占め、数量比は50.62%を占める。

時期　出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

第6表　2号住居跡ピット観察表

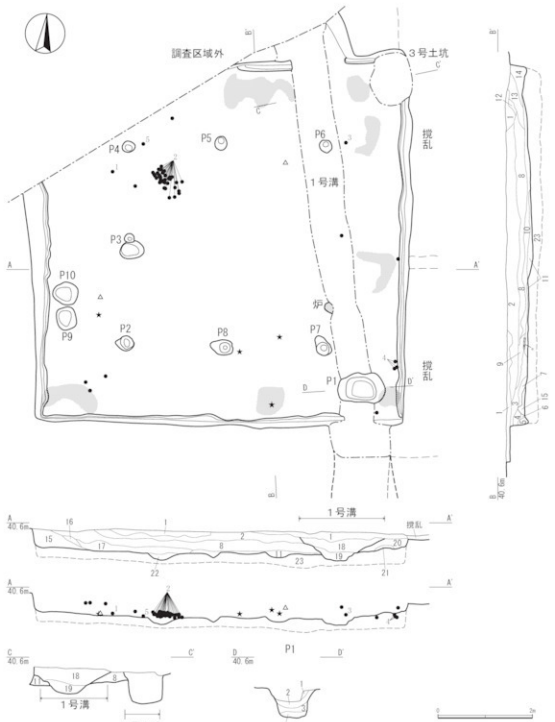
ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	方形	隅丸形	101	62	61.6	貯蔵穴
P2	円形	円錐形	28	22	58.8	柱穴
P3	円形	円錐形	22	21	42.8	柱穴
P4	円形	円錐形	28	26	57.1	柱穴
P5	円形	円錐形	28	25	65.9	柱穴
P6	円形	円錐形	27	27	60.9	柱穴
P7	円形	円錐形	44	28	66.1	柱穴
P8	楕円形	円錐形	48	33	43.1	柱穴
P9	方形	隅丸形	48	41	59.3	出入口
P10	楕円形	隅丸形	48	47	17.1	出入口

3号住居跡（第13・14図　図版1・12・13）

位置・重複　住居跡は調査区2区（M-14・15グリッド）に位置する。住居跡の北西部では1号溝に、東部は円形に凸帯

第7表　3号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	楕円形	円錐形	40	38	88.5	柱穴
P2	円形	円錐形	33	32	77.7	柱穴
P3	円形	円錐形	33	32	30.0	柱穴
P4	円形	円錐形	29	27	39.7	柱穴
P5	楕円形	円錐形	50	44	27.1	貯蔵穴



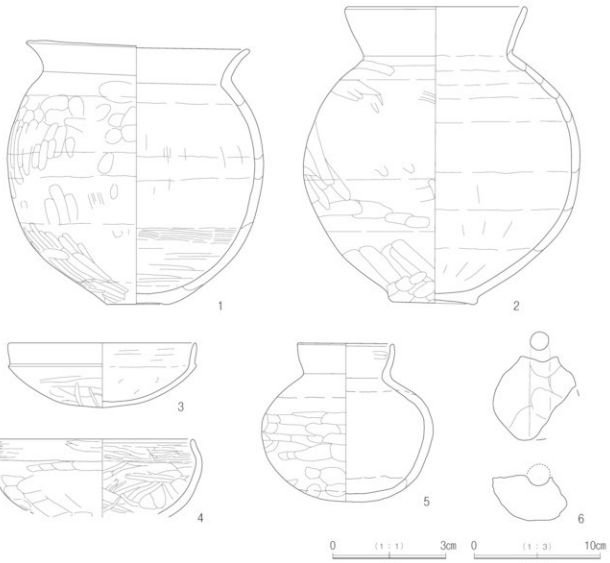
2号住居跡・1号溝

1	10YR3/4	黒い褐色土	耕作土　締まりなし　粘性なし
2	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性なし
3	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を含む　締まり普通　粘性なし
4	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック(1～3cm)を含む　締まりやや有り　粘性普通
5	10YR4/4	褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まりややあり　粘性やあり
6	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒・炭化物を含む　締まりなし　粘性なし
7	10YR3/4	暗褐色土	地土粒が多く、炭化物を含む　締まり普通　粘性なし
8	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
9	10YR3/4	暗褐色土	地土粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
10	10YR4/4	褐色土	固いローム土塊を多く含む　締まり普通　粘性普通
11	10YR4/6	褐色土	締まりあり　粘性あり
12	10YR3/4	暗褐色土	固いローム粒をやや多く含む　締まりあり　粘性あり
13	10YR3/2	暗褐色土	ローム粒・炭化物を多く含む　締まりなし　粘性なし
14	10YR4/3	黒い黄褐色土	ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
15	10YR4/4	褐色土	ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
16	10YR4/4	褐色土	炭化粒・ローム粒を含む　締まりなし　粘性なし
17	10YR4/3	黒い黄褐色土	ローム粒を多く、炭化物を含む　締まり普通　粘性普通
18	10YR3/2	黒褐色土	非常に固い　締まり強い　粘性普通
19	10YR3/2	黒褐色土	固いローム粒を少量含む　締まり強い　粘性普通
20	10YR4/3	黒い黄褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
21	10YR4/3	黒い黄褐色土	地土を多く含む　締まり普通　粘性普通
22	10YR4/3	黒い黄褐色土	ロームを多く含む　締まり普通　粘性あり
23	10YR5/8	黄褐色土	ロームを先端する(掘り方)　締まりあり　粘性あり

P 1

1	10YR3/3	暗褐色土	締まり普通　粘性普通
2	10YR3/3	暗褐色土	炭化物・地土ブロック(1～3cm)を含む　締まり普通　粘性なし
3	10YR3/3	暗褐色土	固いローム、ローム粒を固入　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まりややあり　粘性あり

第11図　2号住居跡（1：80）

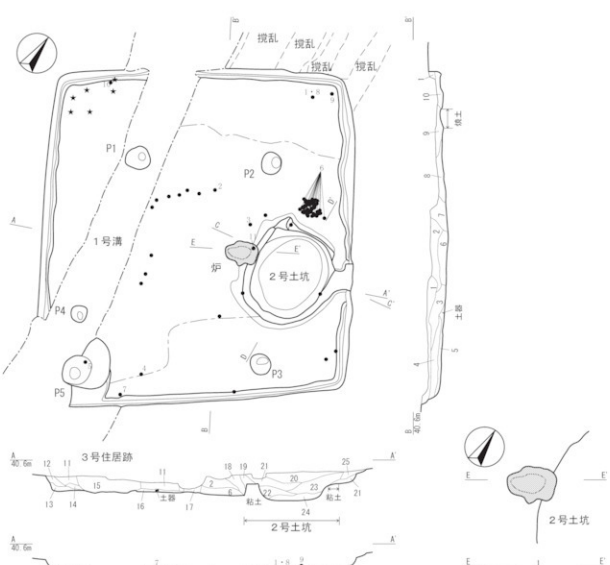


第 12 図　2号住居跡出土遺物

第 8 表　2号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	和泉式	土師器	甕	－	100.0	17.2 胴部最大径 20.4	5.5	21.0	内・ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部縦位ヘラミガキ	石英・砂多量	良	内・5YR5/8 明赤褐色 外・5YR3/6 暗赤褐色	胴部下半で輪積痕から剥離する
2	和泉式	土師器	甕	口縁部 4/5 欠損	80.0	「14.6」 胴部最大径 21.8	6.6	23.4	内・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキ	砂中量	良	内・5YR5/6 明赤褐色 外・5YR5/8 明赤褐色	内・口縁部外・胴部に少量の赤色塗彩痕有
3	和泉式	土師器	坏	口縁～身 1/2	50.0	「14.8」	－	5.1	内・口縁部ヨコナデ（ハケリが多く不明）外・口縁～身部ナデ	砂少量	良	内・外面 5YR4/8 赤褐色	外面にスス付着
4	和泉式	土師器	坏	口縁部	70.0	15.7 頭部径 16.7	－	(6.2)	内・口縁部横位のミガキ　身部ナデ　外・口縁部ミガキ　身部ミガキ	小石・石英・雲母を中量	良	内・7.5YR3/3 暗褐色 身部・5YR4/8 赤褐色 外・5YR3/6 暗赤褐色	外面にスス付着
5	和泉式	土師器	小型丸底壺	－	100.0	7.6 胴部最大径 13.6	－	12.5	内・ナデ　外・胴部中段ヘラミガキ　他の部はナデ	砂・石英を中量	良	内・2.5YR4/8 赤褐色 外・2.5YR4/6 赤褐色	口縁外面胴部中段にスス付着　口縁内面赤色塗彩
6		土製品	土玉	－	50.0	径 2.3	孔径 0.7	長径 2.2		石英微量 砂少量	良	5YR4/8 赤褐色	



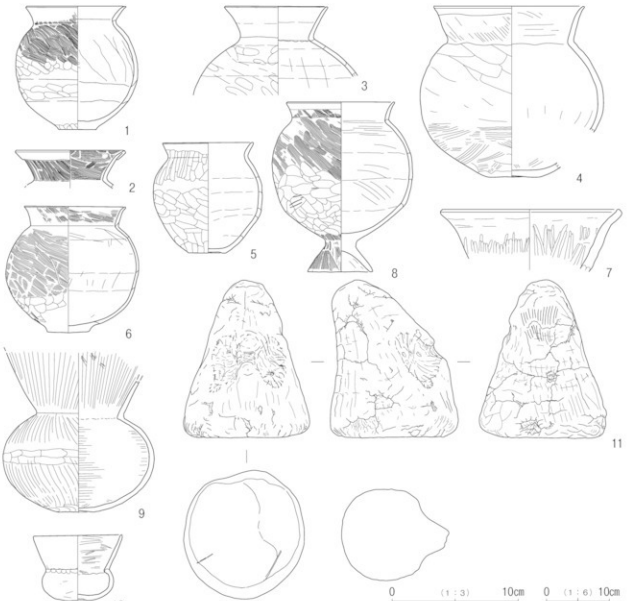
3号住居跡

1	10YR2/3	黒褐色土	締まり普通　粘性普通
2	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
3	10YR3/4	暗褐色土	黄いローム小ブロックを含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック(30mm)を含む　締まりやや弱い　粘性やや弱い
5	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
6	7.5YR2/3	極暗褐色土	黄いローム土塊を少量含む　締まり普通　粘性普通
7	7.5YR3/4	暗褐色土	黄いローム土塊をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
8	7.5YR3/3	暗褐色土	締まりややあり　粘性普通
9	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を含む　締まり普通　粘性普通
10	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒を極少量含む　締まり普通　粘性普通
11	10YR4/6	褐色土	黄いローム土主体　締まり普通　粘性普通
12	10YR4/3	黄いい褐色土	黒褐色土塊を混入　締まり普通　粘性普通
13	10YR2/3	黒褐色土	炭化物・ローム粒を混入　締まりなし　粘性なし
14	10YR4/3	黄いい褐色土	黄いローム・ロームブロックを含む　締まり普通　粘性普通
15	10YR3/3	暗褐色土	耕作等による撹乱　締まりあり　粘性あり
16	10YR3/2	黒褐色土	炭化粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
17	10YR4/4	褐色土	耕作等による撹乱　締まりややあり　粘性ややあり
18	10YR3/4	暗褐色土	黄いローム土塊を少量含む　締まりやあり　粘性ややあり
19	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒をやや多く含む　締まりなし　粘性なし
20	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり強い　粘性強い
21	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり強い　粘性普通
22	7.5YR3/2	黒褐色土	ローム粒を含む　締まりあり　粘性なし
23	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を極少量含む　締まりあり　粘性あり
24	10YR4/2	灰黄褐色土	ローム粒・粘土粒を含む　締まりあり　粘性あり
25	10YR3/4	暗褐色土	締まりなし　粘性なし
26	10YR4/3	黄いい褐色土	粘土を少量含む　締まりなし　粘性普通

2号土坑

1	10YR8/2	灰白色土	粘土質　締まりあり　粘性強い
2	10YR2/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性なし
3	10YR4/3	黄いい黄褐色土	焼土ブロック(1cm)・ローム粒・粘土粒を含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/4	暗褐色土塊	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
5	10YR4/4	褐色土	黄いローム土塊を多く含む　締まりやや弱い　粘性やや弱い
6	10YR3/3	暗褐色土	締まりあり　粘性あり
7	10YR4/3	黄いい黄褐色土	ローム粒が多く、粒土粒を多く含む　締まりやや弱い　粘性やや弱い
8	10YR4/4	褐色土	黄いローム粒を含む　締まりあり　粘性あり

第13図　3号住居跡（1：60、1：40）



第14図　3号住居跡出土遺物

第9表　3号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	甕	－	100.0	16.1 胴部最大径 19.4	6.0	19.5	内・口縁部クシ　胴部ナデ　外・口縁部～胴部上半クシ　胴部下半クシ→ナデ	砂・小石を多量	やや良	内・5YR4/8 赤褐色 外・5YR4/8 赤褐色	胴部スス付着
2	五領式	土師器	甕	口縁部	30.0	17.6	－	（6.1）	内・口縁部クシ状工具による横位整形　外・クシ状工具による縦位整形　口縁部は折り返し口縁	石英・砂を多量	良	内・7.5YR5/9 明褐色 外・5YR4/6 赤褐色	
3	五領式	土師器	甕	口縁部	30.0	16.0	－	（14.1）	内・口縁部ヨコナデ　胴部雑な整形→ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り＋ナデ	石英中量	良	内・5YR5/6 明赤褐色 外・7.5YR5/4 にぶい黄褐色	胴部内面には凸凹が見られる
4	五領式	土師器	甕	－	95.0	11.9 胴部最大径 14.6	4.2	11.4	内・口縁部ハケ整形→ヨコナデ　胴部縦位ヘラ→ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部縦位ハケ整形　表面磨耗する	石英少量 10YR4/8 赤色	やや良	内・外面とも 10YR3/6 暗赤色	
5	五領式	土師器	甕	口縁部～底部	50.0	14.4 胴部最大径「17.3」	6.1	17.5	内・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ　外・口縁部ナデ　胴部ヘラ削り	石英・小石中量 胎土の一部が赤色に変化	やや良	内・5YR5/8 明赤褐色 外・2.5YR3/6 暗赤褐色	火を受け表面風化

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
6	五領式	土師器	甕	口縁部 胴部	90.0	16.2 胴部最大径 21.1	6.6	18.1	内・口縁部横位ハケ　胴部ナデ 外・口縁部斜位ハケ　胴部斜位ハケ　底部ヘラ削り	石英・小石中量	良	内・2.5YR2/1 赤黒色 外・2.5YR3/4 暗赤褐色	口縁部内・外面と胴部外面の一部赤色塗彩痕跡
7	五領式	土師器	甕	口縁	20.0	14.5	不明	(4.7)	内・口唇部ヨコナデ　口縁部ミガキ　外・口唇部ヨコナデ　口縁部縦位のヘラミガキ	砂をやや多量 5YR4/8 赤褐色	良	内・10YR3/2 黒褐色 外・10YR4/2 褐灰色	口唇部鋭角な緑どり
8	五領式	土師器	台付甕	－	10.0	17.3 胴部最大径 23.3	9.7	27.1	内・口縁部クシ　胴部ナデ　外・全体にタテ一部ヘラ削り	小石を多量に含む	やや良	内・5YR3/1 黒褐色 外・5YR4/3 にぶい赤褐色	土器内土に種子検出
9	五領式	土師器	壺	口縁部欠損	90.0	胴部最大径 12.0	3.0	(13.5)	内・外面とも縦位のヘラミガキ	砂微量	良	内・外面とも 2.5YR5/8 明赤褐色	
10	五領式	土師器	小型壺	口縁部～底部 1/2	50.0	7.1 胴部最大径 8.7	1.6	5.3	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部ナデ　外・口縁部縦位ヘラミガキ　身部ナデ	砂中量 10YR2/1 黒色	良	内・10YR2/1 黒色 外・7.5YR4/6 褐色	口縁部外面赤色塗彩痕有　底部に煤み
11		土製品	五徳	－	100.0	1.8	縦・9.6 横・9.8	12.3	全体にナデ　正面・指頭痕あり 先端部内側丸く抉る　形状三角錐形	小石・砂多量	やや良	10YR6/6 黄橙色	半乾きの状態で炉に据えたものと思われる

を巡らした時期不明の２号土坑に切られている。

形状・規模　平面形は N－35°－E を長軸方向とした方形である。規模は長軸 5.24m、短軸 4.86m、確認面（40.37㎡）からの深さは 26.5cm を測る。

床面は貼り床であり、遺存状態は良好である。床面から炭化材や焼土が検出されていることから、本住居跡も焼失住居と考えられる。壁は直立し、壁周溝は幅 10 ～ 15cm、深さ７～ 10cm の規模で住居跡を一周する。

柱穴・炉　柱穴は P１～ P４の４箇所で検出され、大きさは長径 29 ～ 40cm、短径 27 ～ 38cm、深さ 30.0 ～ 88.5cm を測る。南西コーナー部で貯蔵穴（P5）を検出する。貯蔵穴は１号溝と重複し、切られている（第７表「ピット観察表」）。貯蔵穴から土師器（古墳時代前期・第 14 図３）が出土している。

炉跡は住居跡東寄りに設置され、２号土坑の影響を受け炉跡の東部は一部欠損している。炉跡の大きさは長径 52cm、短径 40cm の楕円形に近い形状を呈する。炉跡付近からは「五徳」と思われる土製品が２点出土している。

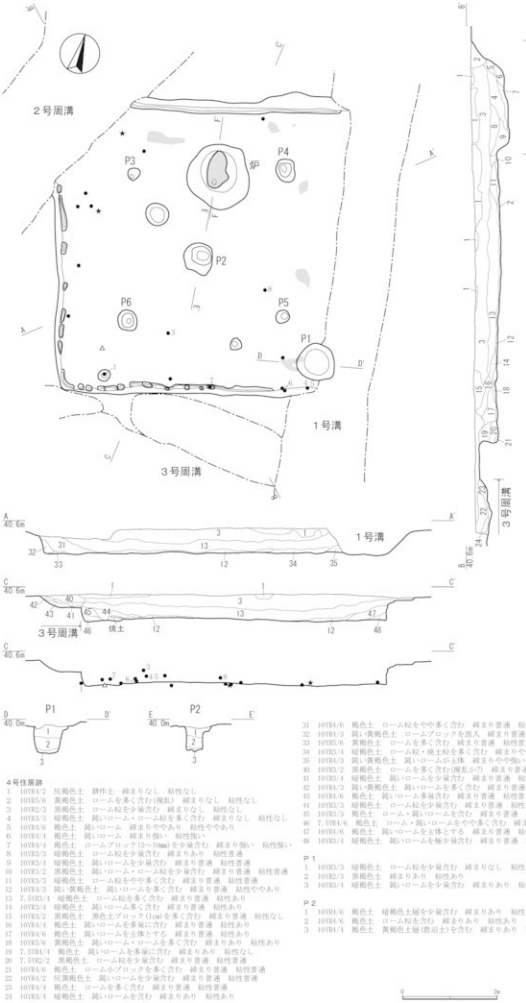
出土遺物　土師器の台付甕形土器・甕形土器・小型坩形土器や破片ではあるが坏形土器等が出土している。「五徳」が炉跡の周辺から２点出土している。五徳は粘土塊を三角錐形に成形して半乾きの状態で炉に設置されたものと思われる。出土遺物は土師器が主体であり、時期としては古墳時代前期に属するものが多数を占める。図示した土器は五領式土器の範疇に入るものである。台付甕内の種子を分析した結果、炭化米が多数検出された（科学分析参照）。

住居跡からの出土遺物の総量は、356 点・重量 8,255g を量る。内訳は縄文土器１点・重量 39g、弥生土器５点・重量 249 g , 土師器 282 点・重量 6,378g、須恵器５点・重量 48g、土製品２点・重量 1,180 g 、中・近世遺物３点・重量 63g、細片 54 点・重量 73g、石４点・重量 224g を量る。土師器の数量比は 77.26% である。

時期　出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

４号住居跡（第 15 ～ 17 図　図版１・２・13）

位置・重複　住居跡は調査区２区（P・Q－14・15 グリッド）に位置する。住居跡は東部で１号溝、北西側



4号住居跡

1	10YR4/2	灰褐色土	耕作土　締まりなし　粘性なし
2	10YR5/6	黄褐色土	ロームを多く含む(縦乱)　締まりなし　粘性なし
3	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
4	10YR3/3	暗褐色土	鈍いローム・ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
5	10YR4/6	褐色土	鈍いローム　締まりややあり　粘性ややあり
6	10YR4/4	褐色土	鈍いローム　締まり強い　粘性強い
7	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(5~10mm)を少量含む　締まり強い　粘性強い
8	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性普通
9	10YR3/4	暗褐色土	鈍いロームを少量含む　締まり普通　粘性普通
10	10YR3/2	黒褐色土	鈍いローム・ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
11	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
12	10YR4/3	鈍い黄褐色土	鈍いロームを多く含む　締まり普通　粘性ややあり
13	7.5YR3/4	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性あり
14	10YR3/4	暗褐色土	鈍いローム多く含む　締まり普通　粘性あり
15	10YR3/2	黒褐色土	黒色土ブロック(1cm)を多く含む　締まり普通　粘性なし
16	10YR4/4	褐色土	鈍いロームを多量に含む　締まり普通　粘性あり
17	10YR4/6	褐色土	鈍いロームを主体とする　締まり普通　粘性あり
18	10YR5/6	黄褐色土	鈍いローム・ロームを多く含む　締まりあり　粘性あり
19	7.5YR4/4	褐色土	鈍いロームを多量に含む　締まりあり　粘性なし
20	7.5YR2/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
21	10YR4/6	褐色土	ロームのブロックを多く含む　締まり普通　粘性普通
22	10YR4/2	灰黄褐色土	鈍いロームを少量含む　締まり普通　粘性普通
23	10YR4/4	褐色土	ロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
24	10YR3/4	暗褐色土	鈍いロームを含む　締まりあり　粘性あり
31	10YR4/6	褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
32	10YR4/3	鈍い黄褐色土	ロームブロックを加入　締まり普通　粘性普通
33	10YR5/6	黄褐色土	ロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
34	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を多く含む　締まりやや強い　粘性普通
35	10YR4/3	鈍い黄褐色土	鈍いロームが主体　締まりやや強い　粘性普通
40	10YR3/2	黒褐色土	ロームを多く含む(縦乱か?)　締まり普通　粘性普通
41	10YR3/4	暗褐色土	鈍いロームを少量含む　締まり普通　粘性普通
42	10YR4/3	鈍い黄褐色土	鈍いロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
43	10YR4/6	褐色土	鈍いローム多量含む　締まり普通　粘性普通
44	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
45	10YR3/3	褐色土	ローム・鈍いロームを含む　締まり普通　粘性普通
46	7.5YR4/6	褐色土	ローム・鈍いロームをやや多く含む　締まり普通　粘性普通
47	10YR4/6	褐色土	鈍いロームを主体とする　締まり普通　粘性あり
48	10YR3/4	暗褐色土	鈍いロームを極少量含む　締まり普通　粘性あり

P 1

1	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
2	10YR2/3	黒褐色土	締まりあり　粘性あり
3	10YR3/4	暗褐色土	鈍いロームを少量含む　締まりあり　粘性あり

P 2

1	10YR4/6	褐色土	暗褐色土層を少量含む　締まりあり　粘性あり
2	10YR4/6	褐色土	ローム粒を含む　締まりあり　粘性あり
3	10YR4/4	褐色土	黄褐色土層(流出土)を含む　締まりあり　粘性普通

第15図　4号住居跡（1：80）

で２号周溝に切られ、南西側で３号周溝を切っている。

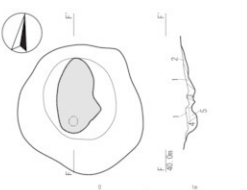
形状・規模　平面形は、N－13°－Wを長軸方向とする方形である。住居跡の規模は、長軸6.10m、短軸「6.06m」、確認面（40.247m）からの深さ37.6cmを測る。床面には多少の凹凸が観られるが、遺存状態が良好な貼り床である。床面から炭化材や焼土が検出されることから、本住居跡も焼失住居と推定される。壁は直立し、壁に沿って小規模な壁柱穴列が検出されている。

柱穴・炉　柱穴はP3～6までの４箇所で検出されている。柱穴の大きさは長径27～50cm、短径26～38cm、深さ40.3～73.0cmを測る。住居跡南東コーナー部に貯蔵穴が検出されている（P1）。貯蔵穴の大きさは長径84cm、短径76cm、深さ58.8cmである。住居跡の中央部に長径71cm、短径60cm、深さ51.7cmのピットが確認されているが、住居に伴うピットか不明である（第10表「ピット観察表」）。

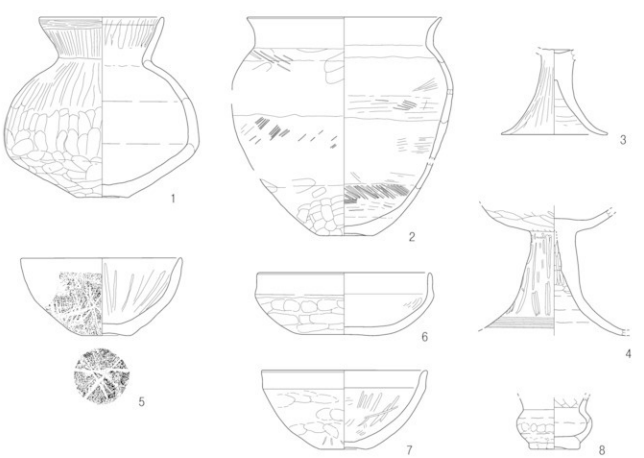
炉跡は住居跡の北部に位置し、規模は長径138cm、短径

第10表　４号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状 平面形	形状 断面形	規模（cm） 長径	規模（cm） 短径	規模（cm） 深さ	備考
P1	楕円形	円錐形	84	76	58.8	貯蔵穴
P2	不整円形	円錐形	71	60	51.7	－
P3	不整円形	円錐形	27	26	48.2	柱穴
P4	楕円形	円錐形	50	38	73.0	柱穴
P5	円形	円錐形	29	29	66.1	柱穴
P6	円形	円錐形	46	38	40.3	柱穴



第16図　４号住居跡炉跡（１：40）



第17図　４号住居跡出土遺物

第 11 表　4号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	甕	100	100.0	9.9 胴部最大径 15.3	4.2	14.3	内・口縁部緩位ヘラミガキ　胴部ナデ　外・口縁部緩位ヘラミガキ　胴部上半緩位のヘラミガキ　胴部下半　ヘラ削り	石英・黒色粒を含む 10YR6/6 明黄褐色	良	内外面 7.5YR6/6 橙色	胴部下半が波縄的になる
2	五領式	土師器	甕	口縁部～底部	40.0	15.5 胴部最大径 17.6	9.0	17.4	内・口縁部ヨコナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ　胴部上半にミガキ	砂微量	不良	内外面 7.5YR7/8 黄橙色	外面にススが付着　胴部黒色部有
3	和泉式	土師器	高坏	脚部	50.0	－	8.4	(6.7)	内・ヨコナデ　外・緩位ヘラミガキ　裾部ナデ	白色粒・石英・小石を微量	良	内・10YR3/1 黒褐色 外・7.5YR4/6 褐色	脚部一部に赤色塗彩
4	五領式	土師器	高坏	坏部下部～脚部	60.0	不明	不明	(5.7)	内・坏部ナデ　脚部ヘラ削り→ヘラミガキ・ナデ　外・坏部～脚部ナデ→ヘラミガキ　袖部ハケ	砂を微量	良	内・外面とも 5YR6/8 橙色	
5	和泉式	土師器	鉢	胴部	50.0	[6.4]	4.2	6.2	内・ヨコナデ→緩位ヘラミガキ　外・口縁部ナデ　胴部ヘラ削り	小石・雲母・石英を中量含む 7.5YR4/6 褐色	やや良	内・外面 7.5YR4/6 褐色	内面　ススが付着　外面　縦横に走る幅 1 mm 長さ 4～5 cm程の溝有
6	和泉式	土師器	坏	口縁部～身部	80.0	13.8	6.0	4.9	内・口縁部ヨコナデ　身部ナデ　外・口縁部　胴部ヘラ削り	砂を多く含む 5YR5/8 明赤褐色	良	5YR4/8 赤褐色	底部ヘラ切り　黒色斑有　底部が平坦
7	五領式	土師器	坏	口縁部～身部	50.0	13.2	3.7	6.2	内・口縁ヨコナデ　身部ヘラミガキ　外・口縁ヨコナデ　胴部ヘラミガキ	白色粒・石英・砂を少量 10YR6/6 明黄褐色	良	内外面 7.5YR6/8 橙色	底部肉厚　整形やや雑　底部が窪む
8	五領式	土師器	壺	胴部	50.0	－	4.0	(4.3)	内・口縁部ミガキ　胴部ナデ　外・ナデ　座部は低い高台状をなす	石英・雲母を中量	良	内・外面 10YR4/3 にぶい黄褐色	底部が僅かに高台となる

131cm を測り、平面形は円形である。炉跡の遺存状態は良好である。

出土遺物　本住居跡からの出土遺物は、土師器の甕形土器・高坏形土器・坏形土器等が出土し、古墳時代前期（五領式土器から和泉式土器）に比定される遺物が多くを占めている。

住居跡からの出土遺物は総量で 1,754 点・重量 14,976g、内訳は縄文土器 21 点・重量 398g、縄文石器 2 点・重量 688g、弥生土器 69 点・重量 514g、土師器 1,287 点・重量 12,269 g、須恵器 11 点・重量 116g、土製品 1 点・重量 43g、中・近世遺物 10 点・重量 171g、細片 339 点・重量 498 g、鉄製品 12 点・重量 45 g、石 2 点・重量 234g である。出土遺物は土師器が多数を占め、数量比は 73.46% である。

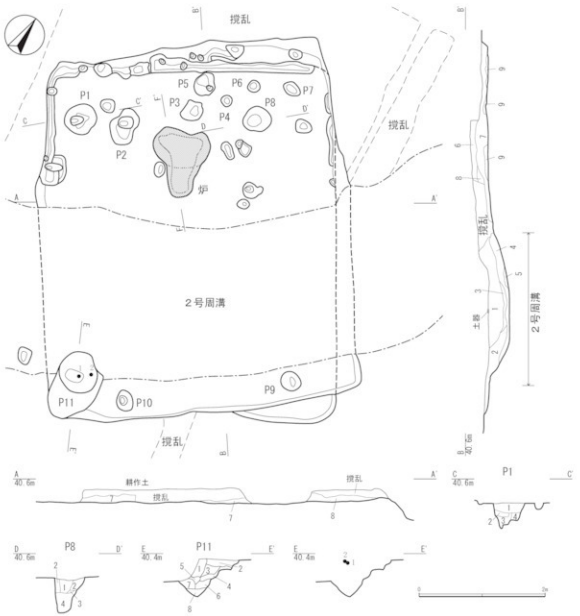
時期　出土遺物等から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

5号住居跡（第 18・19 図　図版 2・13）

位置・重複　住居跡は調査区 2 区（Q－17 グリッド）に位置する。住居跡は南部で 2 号周溝と重複し、これに切られている。本住居跡は、炉跡の焼土が 2 層にわたり確認されたことや、焼土の上層から住居床面の一部が検出されていることから、2 軒の住居が構築位置をほとんど変えることなく重複しており、建て替えが行われていると推定される。住居跡の重複が数 cm と極めて薄く、明確に新旧関係を把握することは不可能であった。

第 12 表　5号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状 平面形	形状 断面形	規模（cm） 長径	規模（cm） 短径	規模（cm） 深さ	備考
P1	円形	鍋底形	48	50	28.6	柱穴？
P2	不整形	鍋底形	61	40	26.7	柱穴？
P3	不整形	鍋底形	39	29	10.2	－
P4	円形	円錐形	19	18	8.8	－
P5	不整形	鍋底形	39	33	10.9	－
P6	円形	円錐形	20	19	13.2	柱穴？
P7	楕円形	円錐形	30	20	11.6	－
P8	円形	鍋底形	46	39	32.8	柱穴？
P9	円形	円錐形	33	32	17.2	柱穴？
P10	楕円形	円錐形	35	28	20.4	柱穴？
P11	円形	鍋底形	111	72	27.1	貯蔵穴



5号住居跡・2号周溝

1	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒を極少量含む　締まり普通　粘性普通
2	10YR4/3	鈍い黄褐色土	鈍いローム土をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
3	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
5	10YR4/6	褐色土	ロームをやや多く含む　締まり普通　粘性普通
6	10YR3/2	黒褐色土	ローム小ブロック(1～3mm)を少量含む　締まりなし　粘性なし
7	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
8	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
9	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まりあり　粘性普通

P1

1	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量に含む　締まり普通　粘性普通
2	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
3	10YR4/3	鈍い黄褐色土	締まり普通　粘性普通
4	10YR4/4	褐色土	ローム・ローム粒を混入　締まり普通　粘性普通

P8

1	10YR2/3	黒褐色土	締まり普通　粘性普通
2	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
3	10YR4/4	褐色土	ロームブロック　締まりあり　粘性あり
4	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通

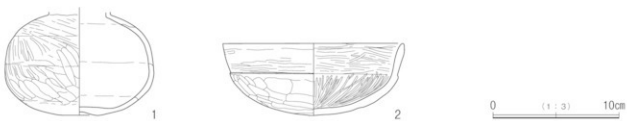
P11

1	10YR3/3	暗褐色土	締まりなし　粘性なし
2	10YR3/4	暗褐色土	締まり普通　粘性普通
3	10YR4/4	褐色土	鈍いロームを含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR5/6	黄褐色土	鈍いロームを土体　締まりあり　粘性あり
5	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
6	10YR4/6	褐色土	鈍いロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
7	10YR5/4	鈍い黄褐色土	締まり普通　粘性普通
8	10YR5/6	黄褐色土	締まりあり　粘性あり

5号住居跡炉跡

1	2.5YR3/8	明赤褐色土	(焼土)
2	10YR4/6	褐色土	(新しい住居の床)　締まりあり　粘性あり
3	10YR3/3	暗褐色土	焼土を少量含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/3	暗褐色土	焼土を多く含む　締まり普通　粘性普通
5	10YR4/4	褐色土	焼土を多く含む　締まりあり　粘性あり
6	2.5YR4/8	赤褐色土	(焼土)　締まりあり　粘性なし
7	10YR5/8	黄褐色土	生地ローム　締まりあり　粘性なし

第18図　5号住居跡（1：60、1：40）



第 19 図　5号住居跡出土遺物

第 13 表　5号住居跡遺物観察表

（ ）内残存値、「 」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式 和泉式	土師器	壺	胴部	60.0	頸部径 5.1 胴部最大径 11.8	3.2	(8.2)	内・ナデ　外・ナデ　一部ヘラミガキ	砂・石英をやや多く含む	良	内・7.5YR5/4 にぶい褐色 外・5YR4/6 赤褐色	底部は高台状になる
2	和泉式	土師器	坏	－	100.0	14.4	－	5.7	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部横位のヘラミガキ　外・口縁部ミガキ　口縁部下部クシ状工具による整形　身部ヘラ削り	白色粒少量	良	内・外面 2.5YR4/8 赤褐色	全体に赤色塗彩　口縁下部に煤痕をもつ

形状・規模　重複する 2 軒の住居跡の 1 軒は N－35°－W、他の 1 軒は N－38°－W の長軸方向を示し、長軸方向に多少の差が見られる。平面形は南北に長軸をもつ長方形を呈する。重複する 2 軒の住居跡は、長軸 5.62m、短軸 4.60m と長軸 5.74m、短軸 4.86m であり、確認面（40.171 m）からの深さ 9.7cm を測る。床面から炭化材や焼土が検出されていることから、本住居跡は焼失住居と推定される。床面の遺存状態は 2 軒ともに良好な貼り床である。住居壁は直立し、北壁と西壁に沿って壁周溝が検出された。壁周溝の規模は幅約 15cm、深さ約 5cm である。

柱穴・炉　柱穴は P1・2・6・8・9・10 を想定しているが、2 軒の住居跡との関連は明確ではない。柱穴の規模は、長径 20 ～ 61cm、短径 19 ～ 50cm、深さ 13.2 ～ 32.8cm を測る。南西コーナー部に貯蔵穴（P11）が検出されている（第 12 表「ピット観察表」）。貯蔵穴から坏形土器（古墳時代前期）が出土している。

炉跡は前述したように焼土層が 2 層になっており、遺存状態は良好である。旧炉跡の長軸方向は N－104°－W、新炉跡は N－21°－W であり、長軸方向で 83° ほど西方にずれている。旧炉跡の長径 114cm、短径 42cm、新炉跡は長径 111cm、短径 45cm を測り、いずれも楕円形を呈する。

出土遺物　本住居跡からの出土遺物は土師器破片が多く、破片から明確な時期を推定できる遺物は少ない。図示した土師器は、貯蔵穴から出土したものであり、時期は和泉式土器である。

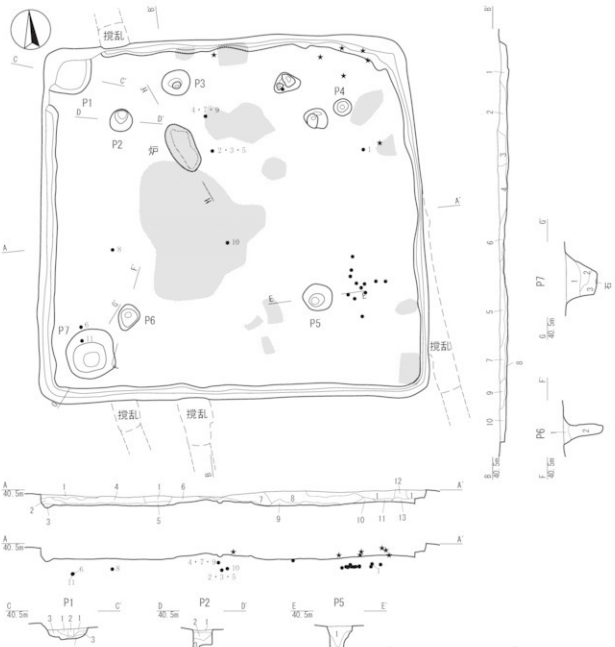
住居跡からは総量で 260 点・重量 1,410g、内訳は縄文土器 6 点・重量 77g、弥生土器 9 点・重量 10g、土師器 176 点・重量 955g、須恵器 4 点・重量 89g、土製品 2 点・重量 159g、中・近世遺物 14 点・重量 112g、細片 45 点・重量 16g、石 4 点・重量 46g である。土師器が多数を占め、数量比は 67.69% である。

時期　出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

6号住居跡（第 20・21 図　図版 2・14）

位置・重複　住居跡は調査区 2 区（N・O－19・20 グリッド）に所在する。住居跡の北西コーナー部で、2 号周溝と接している。

形状・規模　平面形は方形を呈し、長軸方向は N－85°－W を示す。住居跡の規模は長軸 6.18m、短軸



6号住居跡　SPA～SPA'

1　10YR1/3　黒い黄褐色土　(耕作土に撹乱)　締まりなし　粘性なし
2　10YR1/4　褐色土　ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
4　10YR4/6　褐色土　ローム粒・焼化物粒を含む　締まりなし　粘性なし
5　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性あり
6　10YR4/6　褐色土　ローム粒・焼土粒をやや多く含む　締まりなし　粘性なし
7　10YR3/2　黒褐色土　焼化物をブロック状に含む　締まり普通　粘性普通
8　10YR3/3　暗褐色土　焼化物・ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
9　10YR4/4　褐色土　焼化物多く、焼土・ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
10　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒をローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
11　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
12　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒をやや多く含む　締まりなし　粘性なし
13　10YR5/6　黄褐色土を強入　締まりあり　粘性あり

6号住居跡　SPB～SPB

1　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を含む　締まりなし　粘性普通
2　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒・焼化物・ローム粒を含む　締まりなし　粘性普通
3　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を中量含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR4/4　褐色土　焼土粒・ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
5　10YR3/3　暗褐色土　ローム・焼土粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
6　10YR4/6　褐色土　ローム粒・焼化物粒を含む　締まりなし　粘性なし
7　10YR3/3　暗褐色土　焼化物・焼土粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
8　10YR2/3　黒褐色土　締まりあり　粘性あり
9　10YR4/4　褐色土　ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
10　10YR5/6　黄褐色土　ローム(耕作による撹乱)　締まりなし　粘性なし

P 1

1　10YR4/4　褐色土　ロームと黒褐色土が斑在　締まり普通　粘性普通
2　10YR4/6　褐色土　ローム多量に含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR4/3　黄い黄褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR3/4　暗褐色土　ローム小ブロックを含む　締まり普通　粘性普通

P 2

1　10YR4/4　褐色土　ロームブロック(3～5mm)を含む　締まり普通　粘性普通
2　10YR4/6　褐色土　ローム多量に含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR4/3　黄い黄褐色土　ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし

P 5

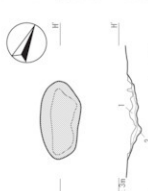
1　10YR4/4　褐色土　ロームブロック(3mm～)を多く含む　締まり普通　粘性普通
2　10YR4/6　褐色土　ローム多量に含む　締まり普通　粘性普通

P 6

1　10YR4/4　褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
2　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を少量混入　締まり普通　粘性普通

P 7

1　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む　締まりなし　粘性なし
2　10YR4/3　黄い黄褐色土　ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性なし
3　10YR3/3　暗褐色土　黄いローム少量含む　締まり普通　粘性普通



6号住居跡炉跡

1　10YR4/8　赤褐色土　焼土　締まり普通　粘性なし
2　10YR5/6　明褐色土　生焼けのローム　締まり普通　粘性なし

第20図　6号住居跡（1：60、1：40）

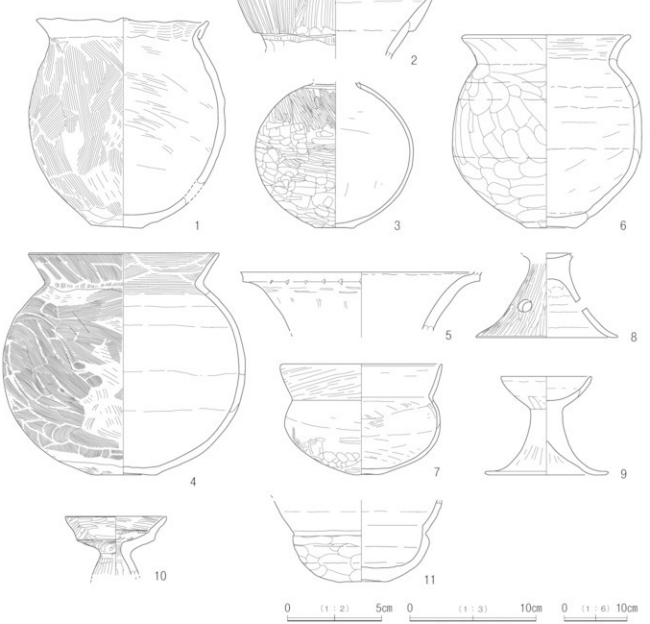
5.66m、確認面（40.512m）からの深さ25.9cmを測る。床は平坦な貼り床であり、遺存状態は良好である。床面から炭化材や焼土が検出されることから、本住居跡は焼失住居であると思われる。壁は直立し、壁に沿って壁周溝が幅15～22cm、深さ8～10cmの規模で住居跡を一周する。

柱穴・炉　柱穴はP2・4・5・6の4箇所で検出されている。柱穴の規模は長径28～47cm、短径27～42cm、深さ36.0～64.8cmを測る。貯蔵穴（P7）は住居跡南西部から検出されている。貯蔵穴の規模は長径77cm、短径75cm、深さ61.4cmを測る（第14表「ピット観察表」）。

炉跡は住居跡の北西側に位置し、遺存状態は良好である。炉跡の規模は長径82cm、短径45cmを測り、平面形は楕円形

第14表　6号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状 平面形	形状 断面形	規模（cm） 長径	規模（cm） 短径	規模（cm） 深さ	備考
P1	方形	鍋底形	73	71	124.6	－
P2	円形	円錐形	36	33	46.0	柱穴
P3	楕円形	円錐形	47	39	17.5	－
P4	円形	円錐形	28	27	57.2	柱穴
P5	円形	円錐形	47	42	36.0	柱穴
P6	楕円形	円錐形	42	33	64.8	柱穴
P7	方形	鍋底形	77	75	61.4	貯蔵穴



第21図　6号住居跡出土遺物

第 15 表　6号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	甕	－	100.0	13.7 胴部最大径 15.6	4.0	16.5	内・口縁部横位のクシ　胴部斜位のハケ　外・口縁部ナデ　胴部縦位のクシ　クシ整形はやや雑　胴部下半に径 1.6cm の孔を穿つ（焼成後）	石英・砂中量	良	内・外面とも 7.5YR5/8 明褐色	内外面ともに黒色部がある　口唇部が波状を呈する
2	五領式	土師器	壺	口縁部	60.0	「16.0」 胴部最大径 16.3	4.1	(57)	内・ナデ　外・口縁部ハケによる整形→ナデ　口縁部は折り返し口縁	白色粒・雲母中量 10YR3/2 黒褐色	良	内・外面 5YR5/6 明赤褐色	外面　口縁部に赤色塗彩の痕跡有
3	和泉式	土師器	壺	口縁部欠損	80.0	胴部最大径 25.1	6.4	(243)	内・胴部ミガキ　外・胴部上半縦位ヘラミガキ　下半横位ヘラミガキ	石英・砂少量 5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 5YR5/8 明赤褐色	焼成・整形ともきわめて良好である
4	五領式	土師器	甕	口縁部～底部	70.0	15.2 胴部最大径 19.3	5.2	18.1	内・口縁部横位のクシ　胴部ヨコナデ　外・口縁部斜位クシ→ヨコナデ　胴部クシ	小石・砂多量	良	内・5YR5/6 明赤褐色 外・5YR8/6 明赤褐色	内部底面黒褐色　外面に黒色部有
5	五領式	土師器	壺	口縁部	40.0	19.2	－	(47)	内・ナデ　外・ヘラミガキ　口唇部に刻有	砂・白色粒多量	良	内・5YR4/8 赤褐色 外・5YR6/6 橙	内・赤色塗彩
6	五領式	土師器	壺	－	100.0	13.4 胴部最大径 15.1	3.8	15.3	内・口縁部ヨコナデ　胴部　ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り	砂・石英多量	良	内・7.5YR5/6 明褐色 外・7.5YR3/4 にぶい褐色	胴部下半にスス付着　底部に煤みを持つ
7	五領式	土師器	小型壺	口縁部～底部	70.0	「17.6」	2.0	8.7	内・外面ヘラミガキ	小石・砂多量	良	内・7.5YR4/8 赤褐色 外・7.5YR3/2 極暗赤褐色	外面の一部にスス付着　底部に煤みを持つ
8	五領式	土師器	高坏	脚部	50.0	－	11.8	(67)	内・ナデ　外・縦位ヘラミガキ　脚部に径 1.2ｃｍの孔を穿つ	石英中量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・5YR5/8 明赤褐色	外・赤色塗彩痕有
9	五領式	土師器	高坏	坏部～脚部	70.0	「7.2」	「9.8」	(78)	内・外面　ナデ　裾部が大きく開く	砂・白色粒多量	やや良	内・7.5YR5/4 にぶい褐色 外・5YR5/8 明赤褐色	
10	五領式	土師器	器台	坏部	60.0	8.1	－	(47)	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部ナデ　外・ヘラミガキ	小石を中量含む	良	内・外面 2.5YR4/8 赤褐色	坏部外面スス付着
11	五領式	土師器	壇	脚部～底部	90.0	－	2.4	(43)	内・ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り→ナデ　底部に煤みを持つ	砂を多く、雲母・石英を中量含む 7.5YR4/4 褐色	良	内面 7.5YR4/4 褐色 外面 5YR4/6 赤褐色	口縁部上半分欠損　外・スス付着　底部煤み有

を呈する。

出土遺物　本住居跡の出土遺物は多く、その主体は土師器が占めている。器種としては、坩・高坏・小型壺・器台・甕等が出土している。図示した遺物は古墳時代前期（五領から和泉式土器）である。

住居跡からは総量が、434 点・重量 6.451g を量り、内訳は縄文土器 3 点・重量 31g、弥生土器 62 点・重量 1,772g、土師器 320 点・重量 4,502g、土製品 9 点・重量 105g、細片 40 点・重量 41g である。

出土遺物は土師器を主体とし、甕形土器・器台形土器・坏形土器等が出土している。土師器が多くを占め、総量比は 73.73% である。

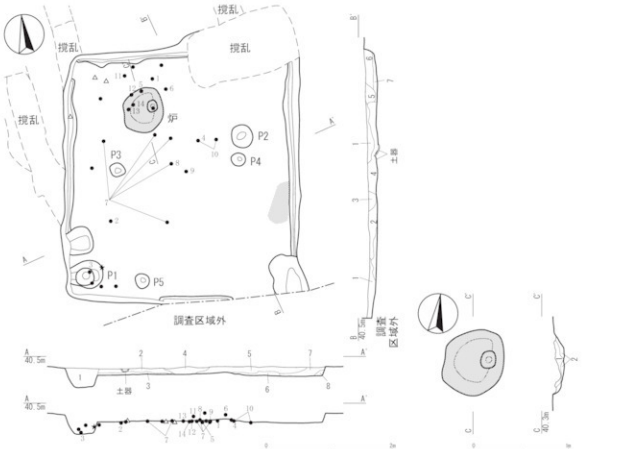
時期　出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

第 16 表　7号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	楕円形	鍋底形	51	43	36.2	貯蔵穴
P2	円形	円錐形	38	35	17.1	柱穴
P3	方形	箱形	25	22	14.5	柱穴
P4	円形	円錐形	23	22	14.7	－
P5	円形	円錐形	23	22	13.4	柱穴

7号住居跡（第 22 ～ 25 図　図版 2・3・15・16）

位置・重複　住居跡は調査区 2 区（T-20・21 グリッド）に位置する。



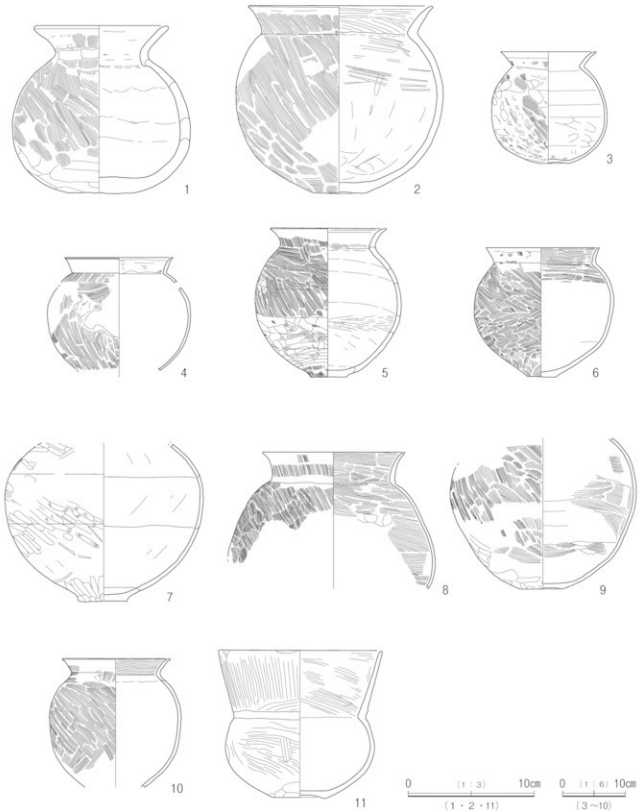
第22図　7号住居跡（1：60、1：40）

形状・規模　平面形は方形を呈し、長軸方向はN－6°－Eを示す。住居跡の規模は長軸4.00m、短軸3.74m、確認面（40.273m）からの深さ8cmを測る。床は貼り床であり、遺存状態はやや良好である。床面上から炭化材や焼土ブロックが検出されていることから、本住居跡は焼失住居であろう。壁は直立し、壁周溝は幅7.6cm、深さ約5cmの規模で、住居跡の北部壁と西部壁で検出された。

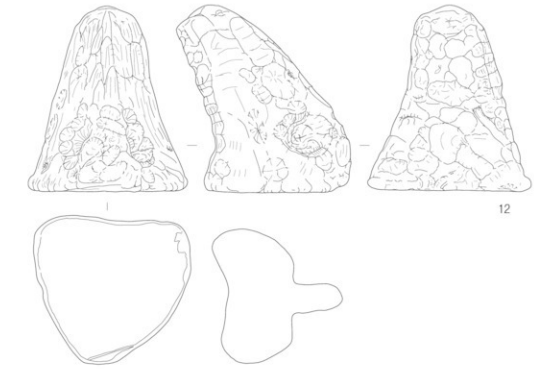
柱穴・炉　ピットは小規模であり、柱穴と断定できるものは検出されていない。ピットの規模は、長径23～38cm、短径22～35cm、深さ13.4～17.1cmを測る。貯蔵穴（P1）は住居跡南西部から検出されている。貯蔵穴の規模は長径51cm、短径43cm、深さ36.2cmを測る（第16表「ピット観察表」）。

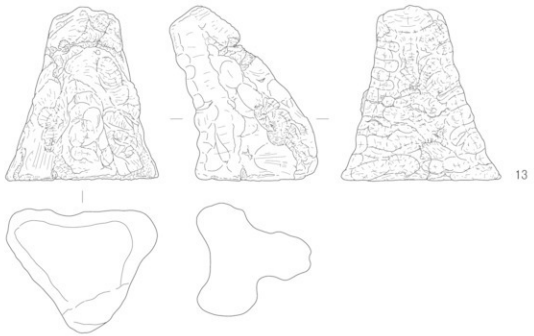
炉跡は住居跡北部に位置し、遺存状態は良好である。炉跡の形状は長径80cm、短径63cmを測り、平面形は楕円形を呈する。炉跡の上層から五徳や竈・甕形土器等多数の遺物が出土している。

出土遺物　本住居跡からの出土遺物は、古墳時代前期（五領式土器）を中心とした土師器である。器種は甕が多く、坏や坩等も観られ、土製品として五徳が4点検出されている。五徳は炉の上面から出土している。

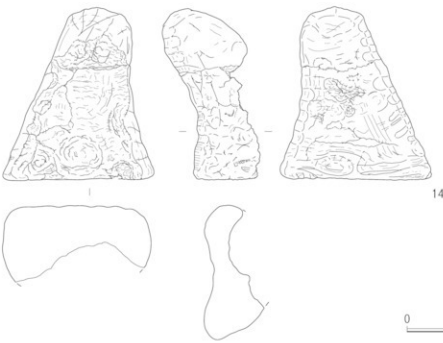


第23図　7号住居跡出土遺物（1）





第24図　7号住居跡出土遺物（2）



第 25 図　7 号住居跡出土遺物（3）

第 17 表　7 号住居跡遺物観察表

（ ）内残存値、「 」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	甕	－	100.0	11.2 胴部最大径 14.1	5.2	13.1	内　口縁部クシ状工具→ナデめ　胴部・クシ　底部ヘラ削り　外・口縁部ナデ　胴部ナデ　頸部縦位ヘラ調整	石英・小石を中量 2.5Y5/6 明赤褐色	良	内・2.5YR5/6 外・2.5YR5/6 10YR5/4 にぶい黄褐色	
2	五領式	土師器	甕	口縁～底部	85.0	14.6 胴部最大径 16.3	4.0	14.9	内・口縁部クシ→ヨコナデ　胴部ナデ　外・口縁部クシ→ヨコナデ　胴部縦位クシ	小石多量 石英中量	良	内・5YR5/8 明赤褐色 外・5YR4/8 赤褐色	胴部内面下半　黒褐色 一部スス付着
3	五領式	土師器	甕	口縁部～底部	95.0	15.4 胴部最大径 24.4	4.6	17.8	内・口縁部斜位のクシ　口唇部ナデ　胴部クシ　外・口縁部ナデ　胴部ヘラ削り	石英・砂多量 10YR4/6 赤色	良	内外とも 2.5YR4/8 赤褐色	外面の一部にスス付着 内外面に黒褐色斑有
4	五領式	土師器	甕	口縁部	40.0	14.1	－	（17.7）	内・クシ状工具によるヨコ整形　胴部ヨコ　外・口縁部ナデ　胴部クシ状工具による整形	石英中量	やや良	内外面 10YR3/2 黒褐色	外面の一部にスス付着
5	五領式	土師器	甕	胴部一部欠損	95.0	18.5 胴部最大径 23.3	5.5	23.7	内・口縁部ハケ状工具で整形→ナデ　胴部ナデ　外・口縁部ハケ整形→ナデ　胴部上半ハケ整形　下半ハケ整形→ミガキ	石英・小石多量	良	内・7.5YR5/6 明褐色 外・7.5YR5/8 明褐色	胴部外面に赤斑黒色部有
6	五領式	土師器	甕	胴部一部欠損	95.0	18.1 胴部最大径 22.1	4.6	20.6	内・口縁部横位のハケ　胴部ミガキ　外・口縁部縦位のハケ→ナデ　胴部ハケ	石英・砂少量	良	内・5YR6/8 橙色 外・10YR5/6 黄褐色	内外面の一部にスス付着
7	和泉式	土師器	甕	胴部	60.0	－ 胴部最大径 31.5	7.5	（25.2）	内・ミガキ　外・斜位のヘラミガキ	砂・石英中量	良	内・外面とも 7.5Y 浅黄橙色	
8	五領式 5 世紀中頃	土師器	甕	口縁部～胴部	60.0	胴部最大径 23.8	－	（19.7）	内・口縁部から胴部横位のハケによる整形　外・口縁部横位のハケ→ナデ　胴部斜位のハケ	砂中量	良	内面 5YR3/1 黒褐色 外面 5YR3/1 黒褐色	
9	五領式	土師器	甕	胴部～底部	40.0	胴部最大径 28.7	6.5	（23.5）	内外・クシ→ﾐｶﾞ	石英・砂中量	良	内・7.5YR6/6 橙色 外・10YR5/6 にぶい黄褐色	

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
10	五領式	土師器	甕	口縁部～胴部	45.0	（16.4）胴部最大径推定 20.7	－	（20.5）	内・口縁部横位のクシ状工具整形　胴部ナデ　外・口縁部ナデ　胴部クシによる整形	砂・小石中量	やや良	内・7.5YR2/2 黒褐色　外・5YR5/6 明赤褐色	内外面にスス付着
11	五領式	土師器	壺	－	95.0	13.0 胴部最大径 11.9	4.0	11.6	内・口縁部クシ状工具による整形→ミガキ　外・口縁部縦位ヘラミガキ　胴部ヘラミガキ	小石微量 10YR3/4 暗褐色	良	内・外面 25YR4/6 赤褐色	内部口縁部と外部全体に赤色塗彩　底部に煤みあり
12		土製品	五徳	－	100.0	3.4	縦・10.9 横・12.5	14.3	ヘラ削り→ナデ　正面・指頭痕あり、先端部内側丸く抉る　形状　三角錐形	砂少量	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	半乾きの状態で炉に擱えたものと思われる
13		土製品	五徳	－	100.0	2.8	横・9.4 縦・12.3	13.8	全体にナデ　正面・指頭痕あり　先端部内側丸く抉る　形状　三角錐形	砂少量	やや良	10YR6/6 黄橙色	半乾きの状態で炉に擱えたものと思われる
14		土製品	五徳	－	100.0	1.8	横・8.5 縦・12.1	13.6	全体にナデ　正面・指頭痕あり　先端部内側丸く抉る　形状　三角錐形　一部欠損	小石・砂中量	やや良	7.5YR6/6 橙色	半乾きの状態で炉に擱えたものと思われる

成形した半乾きの粘土を炉に設置し、炉の火力で焼成したものと考えられる。取り上げる時点で破損するものもあり、また、正面に指（母指・人差指・中指・薬指）でつまみ上げた指頭痕も観察される。座面が楕円形、正面は円錐形、側面はゆるやかに内湾し、上部はわずかに抉られている。第24図12の五徳には、女性の指ならきちんと納まるが、男性の指ではやや太く納まらない程の指頭圧痕を有している。

住居跡からは総量で703点・重量16,793gを量り、内訳は縄文土器2点・重量29g、縄文石器2点・重量1，806 g、弥生土器9点・重量83g、土師器574点・重量10,723g、須恵器5点・重量346g、土製品（五徳細片含む）51点・重量3,025g、中・近世遺物2点・重量4g、細片56点・重量40g、石2点・重量737gである。出土遺物の主体となる土師器は、数量比が82.35％を占める。

時期　住居跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

9号住居跡（第26図　図版3）

位置・重複　住居跡は調査区3区（P－24・25グリッド）に位置し、住居跡北部で4号周溝に切られている。調査区内では、住居跡の約1/4を調査したに留まる。

形状・規模　平面形は残存する南壁から推定すると方形である。住居跡の規模は、南壁の長さが6.52m、調査できた西壁の長さは2.45mである。確認面（40.387m）からの深さ27.9cmである。壁に近い床面から炭化材や焼土が3箇所で確認され、本住居跡も焼失住居と推定される。床面は比較的平坦であるが、柔らかく遺存状態は不良である。壁は直立し、壁周溝が検出されている。壁周溝の規模は、幅15～18cm、深さ4～8cmである。

柱穴・炉　ピットが4箇所で検出されているが、柱穴と思われるピットはP2・3・4を想定している。住居跡南東部で貯蔵穴（P1）と推定されるピットが検出されている。（第18表「ピット観察表」）。

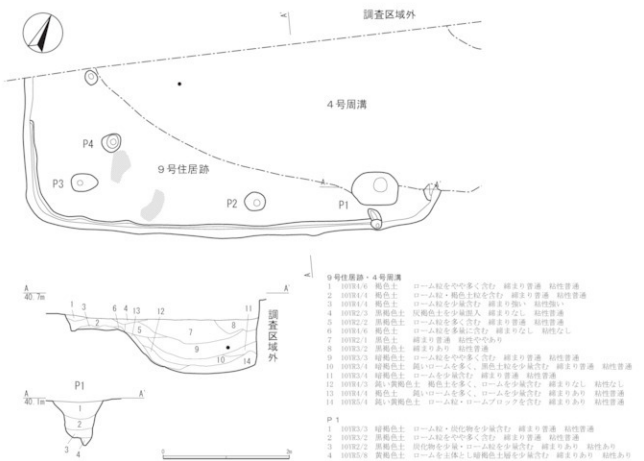
炉跡は検出されていない。

出土遺物　本住居跡からの出土遺物は破片が多く、実測できる資料は皆無である。

住居跡の出土遺物の総量は128点・重量899gを量り、内訳は縄文石器1点・重量4g、弥生土器23点・重量308g、土

第18表　9号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	楕円形	円錐形	74	53	73.7	貯蔵穴
P2	円形	円錐形	31	30	37.8	柱穴？
P3	楕円形	円錐形	43	29	31.6	柱穴？
P4	円形	円錐形	31	30	62.3	柱穴



第 26 図　9 号住居跡（1：60）

師器 85 点・重量 546g、中・近世遺物（砥石）1 点・重量 21g、細片 18 点・重量 20g である。出土遺物の多くは土師器であり、数量比は 66.41% を占める。

時期　住居跡の時期は、出土遺物と 4 号周溝との切りあいから古墳時代前期であると推定される。

10 号住居跡（第 27 ～ 29 図　図版 3・4・16・17）

位置・重複　住居跡は調査 1 区（M・N-9・10 グリッド）に位置する。本住居跡と他の遺構の重複はない。

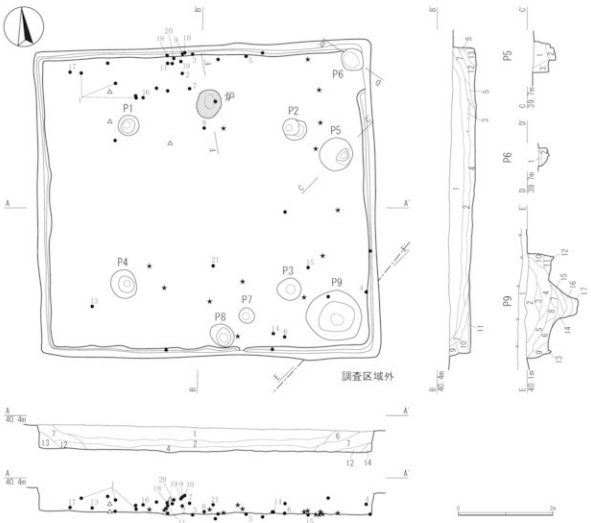
形状・規模　本住居跡は長軸を N-8°-E 方向に持ち、平面形は方形を呈する。住居跡の規模は、長軸 7.18m、短軸 6.54m、確認面（40.162m）からの深さ 59.2m を測る。床面上には多数の炭化材や焼土が散在し、本住居跡も焼失住居である。床面は平坦な貼り床であり、遺存状態は良好である。壁は直立し、壁に沿って壁周溝が住居跡を一周する。壁周溝の規模は幅 18 ～ 27cm、深さ 4 ～ 13cm である。

柱穴・炉　柱穴は P1 ～ P4 の 4 箇所で検出され、規模は長径 43 ～ 61cm、短径 43 ～ 53cm、深さ 81.5 ～ 94.4cm を測る。住居跡南東部コーナーで貯蔵穴（P9）が検出されている。貯蔵穴の規模は長径 118cm、短径 107cm、深さ 84.7cm を測り、平面形は楕円形である（第 19 表「ピット観察表」）。

炉跡は住居跡北部に位置し、遺存状態は良好である。炉跡の規模は長径 61cm、短径 51cm を測り、平面形は楕円形を呈する。

第 19 表　10 号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	円形	筒形	43	43	85.6	柱穴
P2	円形	筒形	50	45	85.3	柱穴
P3	円形	筒形	48	48	81.5	柱穴
P4	楕円形	円錐形	61	53	94.4	柱穴
P5	円形	鍋底形	72	70	47.0	-
P6	方形	鍋底形	47	47	33.7	-
P7	円形	筒形	33	32	14.8	-
P8	円形	鍋底形	55	43	10.0	-
P9	楕円形	鍋底形	118	107	84.7	貯蔵穴



10号住居跡

1　10YR2/1　黒色土　締まりややあり　粘性なし
2　10YR2/1　黒色土　ローム粒微量に含む　締まり普通　粘性なし
3　10YR3/1　黒褐色土　締まり普通　粘性普通
4　10YR4/4　褐色土　黒色土を含む　炭化物を少量含む　ローム土層主体の土層　締まりややあり　粘性普通
5　10YR3/3　暗褐色土　黒色土・焼土粒・ローム粒を微量に含む　締まりなし　粘性なし
6　10YR3/2　黒褐色土　黒色土を少量含む　ローム粒を含む　締まりなし　粘性普通
7　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を含む　炭化物を少量含む　締まり普通　粘性なし
8　10YR4/3　鈍い黄褐色土　炭の粉落土　締まりあり　粘性あり
9　10YR3/3　暗褐色土　ローム土を少量含む　締まり普通　粘性普通
10　10YR3/2　黒褐色土　ローム土を少量含む　締まり普通　粘性普通
11　10YR4/4　褐色土　締まりあり　粘性あり
12　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
13　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒・黒色土粒を少量含む　締まりあり　粘性普通
14　10YR3/1　黒褐色土　ローム ブロック(2～4cm)を含む　黒色土を少量含む　締まりあり　粘性普通

P5

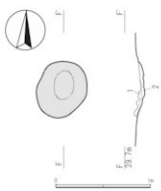
1　10YR3/3　暗褐色土　締まりなし　粘性普通
2　10YR3/3　暗褐色土　ローム ブロック(1cm)を含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR4/4　褐色土　ローム層主体の土　締まりあり　粘性あり

P6

1　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を少量含む
2　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む

P9

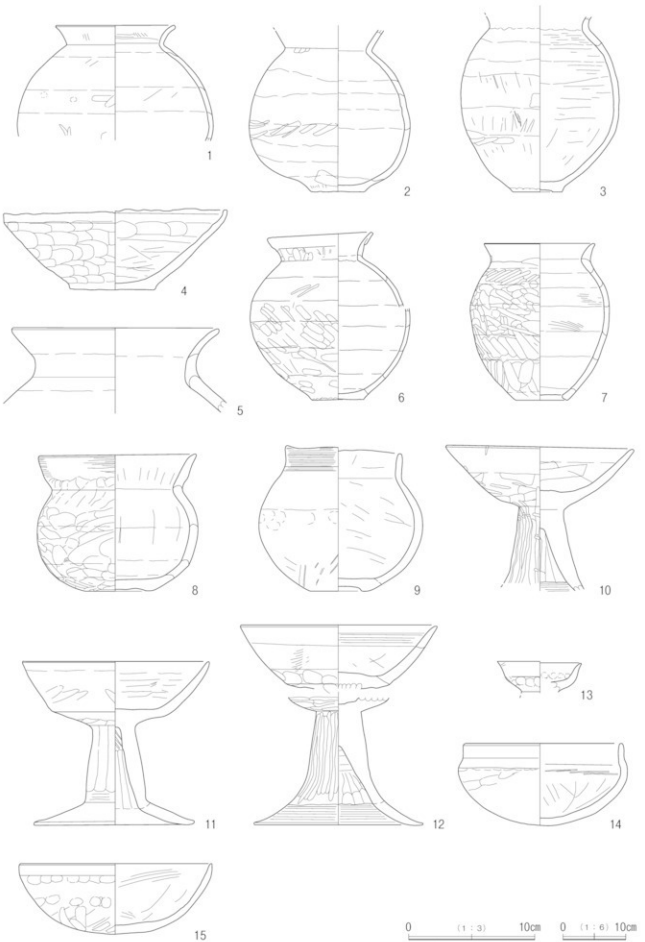
1　10YR3/3　暗色土　耕作土　締まりなし　粘性なし
2　10YR3/2　黒色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性なし
3　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を多量に含む　締まり普通　粘性なし
4　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
5　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を含む　炭化物を含む　締まりあり　粘性普通
6　10YR2/3　黒褐色土　焼土粒・炭化粒・ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性普通
7　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒・炭化粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
8　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
9　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒・ローム ブロック(1～2cm)を少量含む　白色粘土ブロック(3cm)あり　締まり普通　粘性普通
10　10YR3/1　黒褐色土　ローム土を含む　締まりあり　粘性普通
11　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性普通
12　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
13　10YR3/3　暗褐色土　ローム ブロック(1cm)を少量含む　締まり普通　粘性普通
14　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・炭化物を含む　焼土粒を少量に含む　締まりなし　粘性普通
15　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性普通
16　10YR4/3　鈍い黄褐色土　ローム主体の土　締まり普通　粘性あり
17　7.5YR5/4　褐灰色土　締まり普通　粘性あり



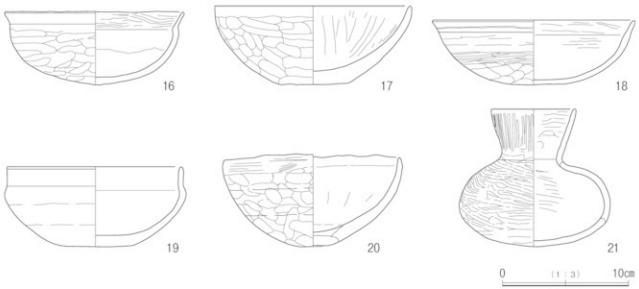
10号住居跡炉跡

1　5YR5/6　明赤褐色土　焼土　締まりあり　粘性なし
2　7.5YR5/6　明褐色土　ローム主体の土　暗褐色土層を少量含む　締まり普通　粘性あり

第27図　10号住居跡（1：80、1：40）



第28図　10号住居跡出土遺物（1）



第 29 図　10 号住居跡出土遺物（2）

第 20 表　10 号住居跡遺物観察表

（）内残存値，「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	和泉式	土師器	甕	口縁部～胴部上半	50.0	19 胴部最大径推定 31.4	–	（18.3）	内・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ調整　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキ（やや雑）	石英・小石中量	良	内・5YR6/8 橙色 外・5YR3/1 黒褐色	外面一部にスス付着
2	和泉式	土師器	甕	口縁部～胴部欠損	95.0	「17.4」 胴部最大径 25.5	8.7	（26.3）	内・ヨコナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキ　磨耗が激しく不明瞭痕	小石多量	やや良	内・外面ともに 5YR5/8 明赤褐色	外面にスス付着
3	和泉式	土師器	甕	胴部	60.0	胴部最大径 25.2	8.4	（29.0）	内・ナデ　外・ヘラミガキ（磨耗し一部で観察）	石英・砂少量	良	内・5YR5/8 明赤褐色 外・5YR6/8 橙色	外・磨耗が激しい　底部が高台状になる
4	五領式 和泉式	土師器	鉢	–	100.0	17.9	7.0	6.2	内・口唇部ハケ整形　身部ヘラ整形　外・口唇部ハケ　胴部ヘラ削り→一部ハケ	白色粒を微量 10YR6/8 明黄褐色	良	内・10YR6/8 明黄褐色 外・10YR2/1 黒色土	口縁部一部が破損する
5	和泉式	土師器	甕	口縁部	60.0	16.5	–	（5.2）	内・外面ともに磨耗が激しく整形痕不明	白色粒微量 10YR4/4 褐色	不良	内・10YR4/3 にぶい黄褐色 外・ 5YR5/6 明赤褐色	外面にスス付着
6	五領式	土師器	甕	–	100.0	16.3 胴部最大径 25.3	8.2	27.0	内・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ　外・口唇部ヨコナデ　口縁部～胴部ヘラミガキ　底部ヘラ削り　口縁は折り返し口縁	石英・小石・砂多量	良	内・5YR2/2 黒褐色 外・5YR3/4 暗赤褐色	胴部外面一部にスス付着　埋没時の土圧により胴部が変形する
7	和泉式	土師器	甕	口縁部と胴部の一部欠損	95.0	「17.7」 胴部最大径 22.0	底部孔径 7.2	25.2	内・ハケによる整形　外・口縁部ハケ整形→ヨコナデ　胴部ヘラ削り	砂微量	良	内・5YR2/2 黒褐色 外・7.5YR5/3 にぶい黄褐色	底部孔は焼成前
8	五領式	土師器	小型壺	口縁部～胴部	60.0	12.2 胴部最大径 12.7	5.8	11.0	内・口縁部ヨコナデ　ヨコナデ　底部指頭整形　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り→ヘラミガキ　底部低い高台を作る	白色粒を微量 7.5YR7/6 橙色	やや良	内・7.5YR4/1 褐灰色 外・10YR5/4 にぶい黄褐色	内面（底部）・外面底部の整形はやや雑
9	和泉式	土師器	小型壺	–	100.0	10.8	4.3 胴部最大径 13.4	11.5	内・ナデ　外・口縁部ハケ目　胴部ナデ一部ヘラ削り	白色粒を微量	良	内・10YR8/6 黄橙色 外・10YR6/6 明黄褐色	外面　スス付着　底部　高台状になる
10	和泉式	土師器	高坏	スソ欠損	90.0	15.0	–	（11.9）	内・ヨコナデ　外・坏部上半ヨコナデ　下半ヘラ削り　脚部縦位ヘラミガキ	白色粒微量	良	内・外面 5YR6/8 橙色 外・脚部 5YR2/1 黒褐色	坏部の一部にスス付着

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
11	和泉式	土師器	高坏	－	100.0	14.9	13.2	13.1	内・坏部ヘラ削り→ヨコナデ 脚部・横位ヘラ削り→ヨコナデ 外・坏部ヨコナデ 接合部ヘラ削り→ナデ 脚部縦位ヘラミガキスソ部ヨコナデ	黒色粒中量 ｲﾈｰﾄ中量	良	内・外面坏部 5YR6/8 橙色 外・脚部 5YR2/2 黒褐色	接合は脚部からの接合で坏部底部で穿孔部を削り→ナデる
12	五領式	土師器	高坏	坏部～脚部	95.0	15.8	13.3	14.5	内・坏部ヨコナデ 脚部・横位ヘラ削り スソ部ヨコナデ 外・坏部ヨコナデ 接合部ヘラ削り 脚部上半縦位ヘラミガキ スソ部ヘラ削り→ヨコナデ	砂少量	良	内・7.5YR6/8 橙色 外・5YR5/8 明赤褐色	坏内面に微量、外面に少量のススト付着 脚部スソに黒色部有 接合は坏部から
13	五領式	土師器	小型高坏	坏部	80.0	6.8	－	(25)	内・外面ヨコナデ	小石微量	やや良	内・外面 5YR5/8 明赤褐色	内・外面に赤色塗彩痕有
14	和泉式	土師器	坏	－	100.0	12.6	－	6.5	内・口縁部ナデ 身部ヘラミガキ 外・口縁部ナデ 胴部ヘラミガキ	白色粒・石英を少量含む 7.5YR5/6 明褐色	良	内外面 5YR4/8 赤褐色	内外面ともにハケリ有 内外面赤色塗彩
15	和泉式	土師器	坏	－	60.0	15.4	－	5.6	内・クシ削り→ナデ 外・口縁部ナデ 胴部ヘラ削り→一部ナデ 胴部上半に指頭痕あり	白色粒微量 7.5YR4/6 褐色	良	内・7.5YR4/6 褐色上 外・5YR4/4 にぶい赤褐色	内・ススト付着 外・底部黒色斑
16	五領式	土師器	坏	口縁部～身部	100.0	14.2	－	5.7	内・ナデ 外・口縁部～胴部部上半までナデ 下半ヘラ削り	小石を中量・石英を少量含む、砂を多量 5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 5YR5/8 明赤褐色	口縁部の一部に剥みあり
17	和泉式	土師器	坏	－	100.0	15.6	5.2	6.2	内・ヘラ削り→ヨコナデ 外・口唇部ナデ 胴ヘラ削り	砂を多量・石英を少量	良	内・5YR4/8 赤褐色 外・5YR5/8 明赤褐色	
18	和泉式	土師器	坏	－	100.0	16.2	－	5.1	内・口縁部横位ヘラミガキ 身部縦位ヘラミガキ 外・口縁部～身部上半ヘラミガキ→ナデ 下半ヘラ削り	白色粒多量・砂中量 5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 5YR5/6 明赤褐色	
19	五領式	土師器	坏	口縁～底部	50.0	「14.0」	6.8	6.3	内・ナデ 外・口縁部ナデ 底部・ヘラ削り	砂・石英を中量	良	内外面とも 10YR5/6 黄褐色	内外面とも調整が顕著 内外面赤色塗彩痕あり
20	和泉式	土師器	碗	－	85.0	10.0	2.4	6.3	内・コヨナデ 外・口縁部横位ケシ 胴部下半ヘラ削り（やや雑） 口縁やや波状	白色粒を微量 7.5YR6/8 橙色	やや良	内外面 7.5YR6/8 橙色	外・ススト付着
21	和泉式	土師器	壺	－	100.0	6.2 胴部最大径 12.0	－	11.0	内・口縁部横位ヘラミガキ 胴部ナデ 外・口縁部縦位ヘラミガキ 胴部横位ヘラミガキ	砂微量 5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 5YR4/8 赤褐色	内面（口縁部）・外面に赤色塗彩有

出土遺物　本住居跡からは完形土器を含め、今回の調査では最も多くの遺物が出土した遺構である。器種は坏・碗・高坏・坩・小型壺・甕・鉢等の多種類である。遺物の時期としては古墳時代前期（五領・和泉式土器）を主体とする。

住居跡からの出土遺物の総量は 1,087 点・重量 23,983g を量り、内訳は縄文土器 37 点・重量 2,149g、弥生土器 60 点・重量 552g、土師器 862 点・重量 19,262g、須恵器 1 点・重量 5g、中・近世遺物 1 点・重量 12 g、細片 121 点・重量 136 g、石 5 点・重量 1,867g である。土師器が多数を占め、数量比で 79.30% である。

時期　出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

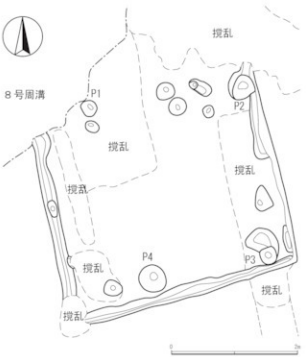
11 号住居跡（第 30 図　図版 4）

位置・重複　住居跡は調査区 3 区（S・T－25・26 グリッド）に位置する。住居跡北部は 8 号周溝に切られ、北東部は撹乱の溝によって消失している。

形状・規模　本住居跡の平面形は長軸を N－11°－W に持ち、平面形は南北に長い長方形を呈する。規模は長軸「4.20m」、短軸 3.78m、確認面「40.363 m」からの深さ 3.3cm を測る。表土は床面まで達しており、表土掘削時に床面が確認される状態で検出された。住居全体に溝状の撹乱が観られる。残存している床面の状態は良好な貼り床である。壁周溝は南壁に沿って僅かに検出されている。検出された壁周溝の規模は、幅 20cm、深さ 7 ～ 12cm である。

柱穴・炉　多くのピットが検出されているが、明確に柱穴と確認できるピットは不明である（第 21 表「ピット観察表」）。炉は検出されていない。

出土遺物　本住居跡は前述したように、表土掘削時に床面を検出しているような状態であったために、実測可能な遺物は出土していない。



第 30 図　11 号住居跡（1：60）

第 21 表　11 号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状 平面形	形状 断面形	規模（cm） 長径	規模（cm） 短径	規模（cm） 深さ	備考
P1	円形	円筒形	27	23	22.7	－
P2	楕円形	円錐形	41	27	23.7	－
P3	円形	円錐形	27	26	33.1	－
P4	円形	円錐形	46	43	32.5	－

住居跡出土遺物の総量は 18 点・重量 175g を量り、内訳は弥生土器 2 点・重量 27g、土師器 16 点・重量 148g である。住居跡の覆土がほとんど消失していることもあり、遺物の出土量は極めて少ない。

時期　住居跡の出土遺物や形状等から古墳時代前期であると推定される。

12 号住居跡（第 31 図　図版 4・17）

位置・重複　住居跡は、調査区 5 区（U・V－28・29 グリッド）に位置する。本住居跡に重複する遺構は観られない。

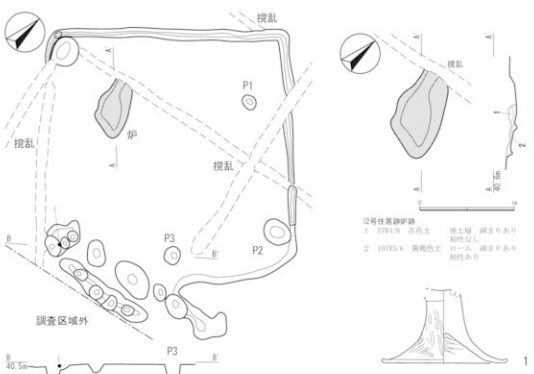
形状・規模　本住居跡は長軸を N－44°－E に持ち、平面形は方形を呈する。住居跡の規模は長軸「4.10m」、短軸 4.00m、確認面（40.501 m）からの深さ 5.5cm を測る。本住居跡も溝状の撹乱を受け、さらに表土が住居跡床面まで達しており、住居跡の覆土は観察されない。床面は貼り床であり、残存部は比較的良好である。床面から焼土が少量検出されている。壁周溝は幅 11cm、深さ 6cm の規模で、住居跡南西壁と西壁を除いて検出されている。

柱穴・炉　ピットの規模や検出位置等から判断し、明確に柱穴と判断されるピットは確認されていない。貯蔵穴（P2）は住居東部にあり、形状は平面形が円形呈し、規模は長径が 30cm、短径 28cm、深さ 47.5cm を測る（第 22 表「ピット観察表」）。

炉跡は住居跡の北西部に所在し、炉跡の北部は撹乱を受けて消失している。炉跡の遺存状態はやや良である。炉跡の規

第 22 表　12 号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状 平面形	形状 断面形	規模（cm） 長径	規模（cm） 短径	規模（cm） 深さ	備考
P1	楕円形	円錐形	26	20	10.3	－
P2	円形	円錐形	30	28	47.5	貯蔵穴
P3	楕円形	円錐形	48	36	11.3	－



第 31 図　12 号住居跡（1：60、1：40）及び出土遺物

第 23 表　12 号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	高坏	脚部	30.0	-	「10.0」	(5.7)	外・縦位ヘラミガキ　裾部ミガキ	白色粒少量	良	内面 7.5YR5/6 明褐色 外面 2.5YR4/8 赤褐色	裾部は開きながら反る

模は長径 92cm、短径 50cm を測り、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物　図化した遺物（高坏の脚部）は、本住居跡の貯蔵穴から出土したものである。小型の高坏である。

住居跡出土遺物の総量は 29 点・重量 244.5g を量り、内訳は土師器 15 点・重量 170g、中・近世遺物 2 点・重量 16g、細片 2 点・重量 2g、石 10 点・重量 56.5g である。

時期　住居跡の形状や出土遺物等から古墳時代前期であると推定される。

13 号住居跡（第 32 図　図版 4・17）

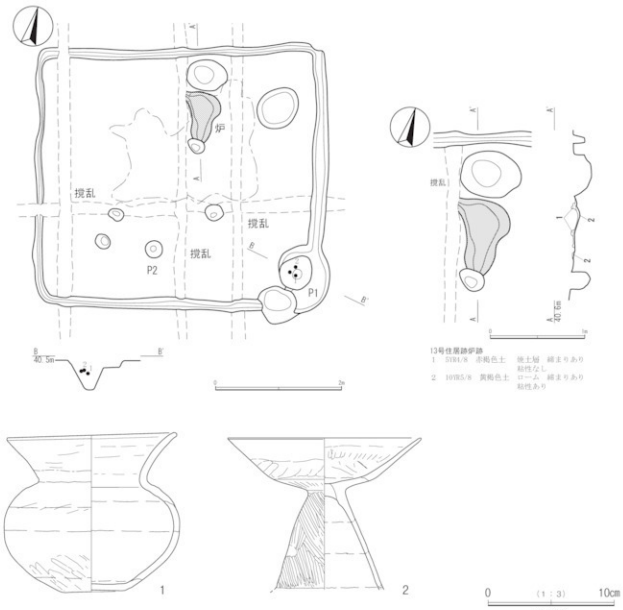
位置・重複　住居跡は調査区 5 区（U・V-30 グリッド）に位置する。本住居跡と重複する他の遺構は所在しない。

形状・規模　本住居跡は長軸方向を N-75°-E に持ち、平面形は方形を呈する。住居跡の規模は長軸 4.78m、短軸 4.13m、確認面（40.440m）からの深さは 2.1cm を測る。

住居跡は床面直上まで溝状の撹乱が井桁状に本住居跡を走っている。住居跡も床面直上まで表土に覆われ、表土掘削時

第 24 表　13 号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状 平面形	形状 断面形	規模（cm） 長径	規模（cm） 短径	規模（cm） 深さ	備考
P1	円形	漏斗形	53	51	46.7	貯蔵穴
P2	円形	円錐形	28	27	61.1	柱穴



第 32 図　13 号住居跡（1：60、1：40）及び出土遺物

第 25 表　13 号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	和泉式	土師器	小型壺	－	100.0	13.4 胴部最大径 13.9	5.5	12.6	内・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ 外・口縁部ハケ　胴部ヘラ削り→ナデ	石英・小石多量	やや良	内・5YR4/8 赤褐色 外・10YR2/1 黒色	外面　磨耗ある
2	和泉式	土師器	高坏	スソ欠損	90.0	15.4	－	(12.0)	内・ナデ　外・坏部ハケ→ナデ→ヘラミガキ　脚部ヘラミガキ	褐灰色粘土を中心にし、うすく化粧土を使用 小石微量	良	内・外面 2.5YR5/8 明赤褐色	

には床面が検出されていた。残存している床面は比較的良好な貼り床である。床面から少量ではあるが焼土が検出されている。壁周溝は幅 12 ～ 23cm、深さ 6 ～ 13cm の規模を持ち、住居跡を一周する。

柱穴・炉　P2 は柱穴であると思われるが、その他のピットは柱穴と認識されない（第 24 表「ピット観察表」）。

P1は貯蔵穴と推定される。規模は長径53cm、短径51cm、深さ46.7cmを測り、平面形は円形を呈する。

炉跡は住居跡北部に、長径97cm、短径48cm、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物　本住居跡も前述したように、表土掘削時に住居の床面を確認できた。したがって出土遺物は少なく、図示した遺物2点は貯蔵穴からの出土である。いずれも五領式土器の範疇に入るものと思われる。

住居跡出土遺物の総量は117点・重量1,428gを量り、内訳は縄文土器1点・重量7g、弥生土器4点・重量24g、土師器111点・重量1,394g、中・近世遺物1点・重量3gである。最も多く出土した土師器の数量比は、94.87%である。

時期　出土遺物等から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

14号住居跡（第33・34図　図版4・5・18）

位置・重複　住居跡は調査区5区（U・V-32・33グリッド）に位置し、住居跡東部から南部にかけて9号周溝に切られている。

形状・規模　住居跡の平面形は方形を呈し、長軸をN-1°-Wに持つ。住居跡の規模は長軸6.18m、短軸5.36m、確認面（40.301m）からの深さは18.9cmを測る。

床面は耕作等の影響を受けて多少の軟弱な箇所もあるが、おおむね良好な遺存状態の貼り床である。床面から焼土が検出されていることから焼失住居である可能性が窺える。壁周溝は幅15cm、深さ10cmの規模を持ち、住居跡を一周する。

柱穴・炉　柱穴はP1・2・4の3箇所である（第26表「ピット観察表」）。柱穴の規模は長径48～70cm、短径41～57cm、深さ44.5～49.3cmを測る。

炉は住居の北部に位置する。炉の上層には、多数の土師器小片を意図的に敷き詰めた状態で検出されている。炉の南部には長さ57cm、幅12cm、厚さ9cmを測る柱状の粘土を枕状に横たえている。焼土等の遺存状態は良好である。炉の規模は長径85cm、短径69cmを測り、平面形は楕円形である。

出土遺物　本住居跡からは、甕・壇等が出土している。図示した遺物はいずれも古墳時代前期（五領式土器）の範疇に入るものであろう。

住居跡出土遺物の総量は513点・重量3,784gを量り、内訳は縄文土器3点・重量74g、弥生土器26点・重量518g、土師器444点・重量3,117g、中・近世遺物4点・重量27g、細片34点・重量32g、石2点・重量16gである。土師器の出土数量比は、86.55%を占める。

時期　住居跡の出土遺物や9号周溝との切りあい状態、さらには住居跡の形状等から古墳時代前期であると推定される。

15号住居跡（第35図　図版5・18）

位置・重複　住居跡は調査区6区（Z・Aa-31・32グリッド）に位置する。住居跡北西部で10号周溝に切られている。

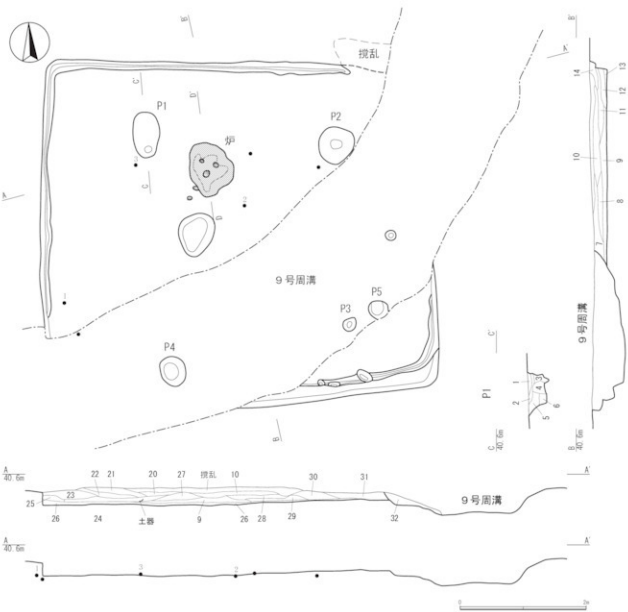
形状・規模　住居跡の平面形は方形を呈し、長軸をN-13°-E方向に持つ。住居跡の規模は長軸5.54m、短軸4.81m、確認面（40.549m）からの深さは30.8cmを測る。床面は多少の凹凸が観察されるが、遺存状態は比較的良好な貼り床である。床面から焼土や炭化材がブロック状に検出されていることか

第26表　14号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	楕円形	円錐形	70	43	49.3	柱穴
P2	円形	円錐形	58	57	44.5	柱穴
P3	円形	円錐形	25	21	24.5	-
P4	楕円形	円錐形	48	41	47.7	柱穴
P5	円形	円錐形	31	29	19.1	-

第27表　15号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	楕円形	円錐形	53	40	14.9	柱穴
P2	楕円形	円錐形	45	39	79.7	柱穴
P3	楕円形	円錐形	54	49	73.7	柱穴
P4	方形	円錐形	39	21	73.6	柱穴



14号住居跡

7	10YR4/3	鈍い黄褐色土	鈍いロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
8	10YR4/4	褐色土	鈍いローム・ロームブロックを少量含む　締まり普通　粘性普通
9	10YR4/6	褐色土	ロームブロックを含む　締まりあり　粘性普通
10	10YR4/3	鈍い黄褐色土	締まり普通　粘性普通
11	10YR4/3	鈍い黄褐色土	ローム粒を多く含む　締まりあり　粘性あり
12	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土を含む　締まりあり　粘性あり
13	10YR4/4	褐色土	粘性の強いローム　締まりあり　粘性あり
14	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性あり
20	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を多量に含む　締まり普通　粘性普通
21	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック(1~3)を含む　締まり普通　粘性普通
22	10YR4/4	褐色土	鈍いローム・ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
23	10YR3/3	暗色土	ローム粒を混入　締まり普通　粘性普通
24	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まりややあり　粘性普通
25	10YR3/4	暗褐色土	鈍いローム・ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
26	10YR3/3	暗褐色土	鈍いローム・ローム粒を含む　締まりあり　粘性あり
27	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(3~5)・ロームを多量に含む　締まり普通　粘性普通
28	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(3~4)を多く含む　締まり普通　粘性普通
29	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まりあり　粘性あり
30	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
31	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりややあり　粘性やややあり
32	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む(周溝の覆土)　締まりなし　粘性なし

P 1

1	10YR3/2	黒色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
2	10YR3/3	暗色土	ロームブロック(1cm)を含む　締まりなし　粘性なし
3	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR4/6	褐色土	ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
5	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(3~5)をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
6	10YR5/3	暗褐色土	鈍いローム・ロームを多く含む　締まりあり　粘性普通

14号住居跡炉跡

1	5YR4/8	赤褐色土	(焼土)　締まりあり　粘性なし
2	10YR4/6	褐色土	(生地ローム)　締まりなし　粘性なし
3	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(1~3)を多く含む　締まり普通　粘性なし
4	7.5YR4/3	褐色土	締まり普通　粘性普通
5	10YR3/4	暗褐色土	締まり普通　粘性普通

第 33 図　14 号住居跡（1：60、1：40）

第 34 図　14 号住居跡出土遺物

第 28 表　14 号住居跡遺物観察表

（ ）内残存値、「 」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	弥生式	壺	口縁部	30.0	16.8	－	（16.3）	内・ナデ　外・口唇部ナデ　頸部最位ヘラ　胴部ナデ　口縁は折り返し	小石微量 砂中量	良	内・7.5YR6/6 橙色 外・7.5YR6/4 にぶい橙色	内面は磨耗する
2	五領式	土師器	甕	口縁部	25.0	11.0	－	（4.1）	内・外面　ハケ状工具により整形	小石を微量	やや良	内・外面 5YR6/8 橙色	口縁部のみ破片
3	五領式	土師器	壺	口縁部～底部	80.0	10.4	2.0	7.8	内・口縁部ハケ状工具による横位整形　身部ミガキ　外・口唇ナデ、ハケ状工具による整形　身部下半はヘラ削り	石英を多量	良	内・7.5YR4/1 にぶい黄褐色 外・5Y R5/6 明褐色	

ら住居は焼失住居であろう。壁は垂直に立ち上がる。壁周溝は観られなかったが、壁柱穴が東壁と北壁に沿って検出されている。壁柱穴の大きさは径 14 ～ 20cm、深 6 ～ 13cm である。

柱穴・炉　柱穴は P1 ～ P4 の 4 箇所で検出した（第 27 表「ピット観察表」）。柱穴の大きさは長径 39 ～ 54cm、短径 21 ～ 49cm、深さ 14.9 ～ 79.7cm、平面形は楕円形あるいは方形を呈する。

炉の西側一部は 10 号周溝によって切られているが、炉の遺存状態は良好である。炉の規模は長径 95cm、短径 65cm を測り、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物　本住居跡からは、10 号周溝が住居跡を縦断していることもあり、遺物の出土量は少ない。図示した遺物は高坏の坏部破片である。

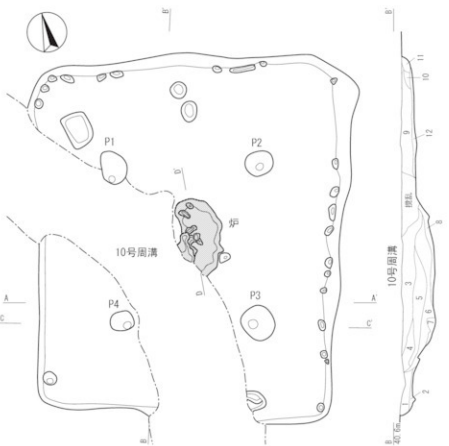
本住居跡からは 63 点・重量 552 g を量り、内訳は弥生土器 33 点・重量 243g、土師器 28 点・重量 293g、鉄製品 2 点・重量 16g である。

時期　住居跡の出土遺物や 10 号周溝との切りあい、住居の形状等から古墳時代前期であると推定される。

16 号住居跡（第 36 図　図版 5・18）

位置・重複　住居跡は調査区 4 区（U・V－19・20 グリッド）に位置し、住居の南部、約 1/5 を調査したものである。住居の北部は市道の下に広がり、市道の北側調査区（2 区）には本住居の痕跡は見られなかった。住居と重複する他の遺構は所在しない。

形状・規模　住居跡の東西壁は N－6.5°－W の方位を示し、平面形は方形を呈する。住居の規模は東西 3.68m、南北（0.92m）、確認面（40.450m）からの深さ 53.3cm を測る。住居の断面土層は不自然な堆積であり、自然堆積ではない。床面はロームを利用しているが、軟弱である。床面から焼土の検出はなかった。壁は直立するが、壁周溝は検出できなかった。



15号住居跡・10号周溝　SP4―SP4'

1	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を極少量含む　締まり普通　粘性普通
2	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を極少量含む　締まりあり　粘性普通
3	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を極少量含む　締まりあり　粘性ややあり
4	10YR3/1	黒褐色土	黄いローム粒を少量含む　締まりあり　粘性普通
5	10YR4/4	黄いろ褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
6	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を含む　締まりなし　粘性なし
7	10YR4/6	褐色土	ロームブロック(3~5)を多く含む　締まり普通　粘性普通
8	10YR2/2	黒褐色土	締まり普通　粘性普通
9	10YR2/3	黒褐色土	締まりなし　粘性なし
10	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性普通
11	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性普通
12	10YR3/3	暗色土	ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性普通
13	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を含む　締まりややあり　粘性普通
14	10YR2/3	黒褐色土	ロームブロック(3cm)を混入する　締まりあり　粘性あり

15号住居跡・10号周溝　SP8―SP8'

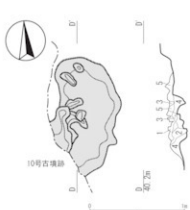
1	10YR3/3	暗褐色土	黄いローム小を少量含む　締まり普通　粘性普通
2	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性あり
3	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックを含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・黄いロームを多く含む少量含む　締まり普通　粘性普通
5	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック(1~3)・ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性ややあり
6	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
7	10YR4/6	褐色土	ロームと黒褐色土層を混入する　締まりあり　粘性あり
8	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(3~5)を多く含む　締まり普通　粘性普通
9	10YR3/2	黒褐色土	締まりなし　粘性普通
10	10YR4/3	黄いろ褐色土	ローム粒を多量に含む　締まり普通　粘性普通
11	10YR5/8	褐色土	黄いローム　締まりなし　粘性普通
12	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりあり　粘性あり

P 3

1	10YR4/3	黄いろ褐色土	黄いローム を多量含む　締まりなし　粘性普通
2	10YR4/4	褐色土	締まりややあり　粘性普通
3	10YR5/6	黄褐色土	ローム　締まりあり　粘性あり
4	10YR4/6	褐色土	黄いローム を混入　締まりあり　粘性普通
5	10YR3/4	暗褐色土	締まりなし　粘性なし
6	10YR5/4	黄いろ褐色土	締まりあり　粘性普通

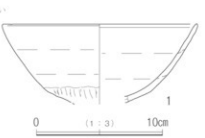
P 4

1	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
2	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
3	10YR4/4	褐色土	ロームを多く含む　締まり普通　粘性普通



15号住居跡炉跡

1	5YR4/6	赤褐色土	焼土　締まりあり　粘性なし
2	7.5YR5/8	明褐色土	黄いロームとロームブロック(1~3)を含む　締まりなし　粘性なし
3	10YR2/2	黒褐色土	黒色土(炭化物)・焼土ブロック(1mm)を含む　締まりなし　粘性なし
4	10YR5/6	黄褐色土	締まりあり　粘性あり
5	10YR5/8	黄褐色土	生掘汚のローム　締まりあり　粘性弱い

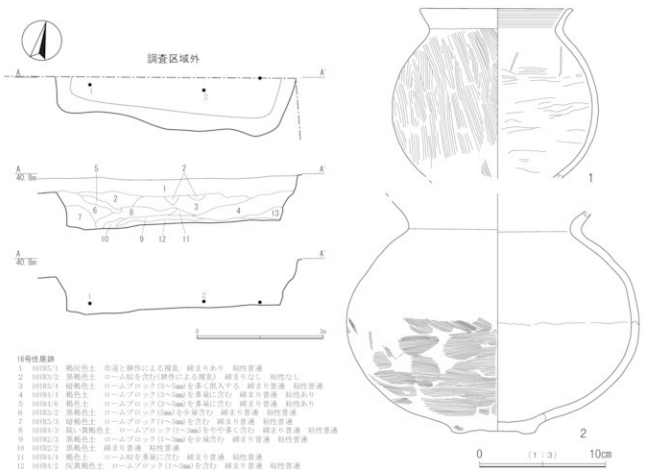


第 35 図　15 号住居跡（1：60、1：40）及び出土遺物

第 29 表　15 号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式和泉式	土師器	高坏	坏部	30.0	「15.4」	－	(6.2)	内・ミガキ　外・ミガキ	砂中量	良	10R3/6 暗赤褐色	内外面赤色塗彩



第 36 図　16 号住居跡（1：60）及び出土遺物

第 30 表　16 号住居跡遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	甕	口縁部～胴部	70.0	11.8 胴部最大径 16.5	－	(13.6)	内・クシによる横位の整形　外・口縁部ミガキ　胴部クシによる整形	石英・砂中量	良	内・5YR3/1 黒褐色 外・5YR4/4 にぶい赤褐色	
2	五領式	土師器	甕	胴部・口縁部一部欠損	80.0	「15.2」 胴部最大径 26.9	6.5	(19.4)	内・口縁部ヨコナデ　胴部ハケによるヨコナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキ　外面ハケリが激しく不明	石英・小石多量	やや良	内・7.5YR5/4 にぶい黄褐色 外・7.5YR2/1 黒褐色	外面全体にススが付着

柱穴・炉　柱穴・炉ともに検出されなかった。

出土遺物　本住居跡からの出土遺物は、調査面積が小さいこともあり、多くは出土していない。住居西部の床面直上から 2 点の甕形土器が出土し図示した。遺物の時期は古墳時代前期（五領式土器）の範疇に位置すると考える。

遺物の量は少なく、総量は 118 点・重量 2,052g である。内訳は土師器 105 点・重量 2,042g、細片 13 点・

重量 10g である。

時期　出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

17 号住居跡（第 37 図　図版 5）

位置・重複　住居跡は調査区 3 区（Q・R－26 グリッド）に位置する。住居の南部は 8 号周溝に切られ、東部では 19 号住居跡と重複し、東部と西部は撹乱を受けている。本住居跡と 19 号住居跡の新旧関係は、撹乱の影響を受けて不明である。

形状・規模　住居の長軸方向は不明であるが、北壁の方位は N－42°－E を示す。平面形は方形を呈する。住居の規模は北壁が 2.84m、東壁は（1.80m）、確認面（40.372m）からの深さ 41.9cm 測る。

床面はローム層の地山を利用している。壁は直立し、壁周溝等は検出されない。

柱穴・炉　柱穴・炉ともに検出されなかった。

出土遺物　遺物の出土量は少なく、総量 29 点・重量 175g であり、内訳は土師器 26 点・重量 157g、中・近世遺物 3 点・重量 18g である。

時期　住居跡の時期は、出土遺物が土師器であること、8 号周溝に切られていることなどから、古墳時代前期に属するものと推定している。

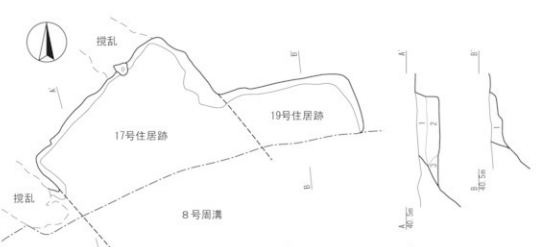
18 号住居跡（第 38 図　図版 5）

位置・重複　調査区 5 区（W－33・34 グリッド）に位置する。住居は調査区の南西部にあり、住居の西部と南部は調査区外に広がる。住居の大半は撹乱を受けており、原状を残す床等の大半は確認できない。住居と他の遺構の重複は観られない。

形状・規模　住居の北東壁は N－67°－E の方位を示し、平面形は方形である。北東壁の長さは 4.15m、北西壁は 3.54m、確認面（40.394m）からの深さ 12.6cm を測る。床面から焼土

第 31 表　18 号住居跡ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	不整方形	鍋底形	34	24	27.5	－
P2	方形	鍋底形	25	23	21.0	－



17号住居跡
1　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(1～3)を含む　締まりあり　粘性なし
2　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック(1～3)・ローム粒を多く含む　締まりあり　粘性なし
3　10YR4/3　黄い黄褐色土　黄いローム多くを含む　締まりなし　粘性なし

19号住居跡
1　10YR4/6　褐色土　　黄いローム・ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性なし

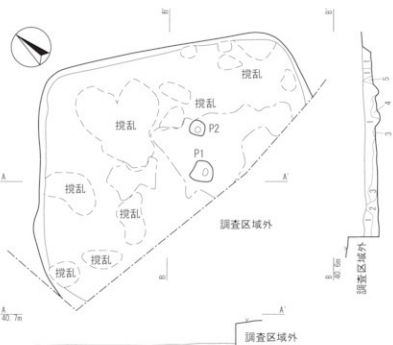
第 37 図　17・19 号住居跡（1：60）

ブロックが検出されていることから焼失住居であろう。

柱穴・炉　柱穴と断定できるピットは検出されていない。炉においても撹乱の影響を受け検出されていない。

出土遺物　本住居跡からの出土遺物はいずれも小片であり、実測は皆無である。出土遺物は少なく、総数33点・重量223gを量り、内訳は弥生土器4点・重量27g、土師器26点・重量157g、中・近世遺物2点・重量5g、鉄製品1点・重量34gである。

時期　住居の形状や出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と推定される。



第38図　18号住居跡（1：60）

19号住居跡（第37図）

位置・重複　住居跡は調査区3区（Q-25グリッド）に位置する。住居は西側で17号住居跡と南側で8号周溝と重複する。17号住居跡との新旧関係は明瞭ではないが、8号周溝には切られている。住居跡の本来の形状は定かではない。本住居は、北壁に焼土のブロックを検出したことを、住居跡とした大きな理由である。

形状・規模　住居の平面形は方形を呈する。壁は直立しているが、壁周溝等は検出されていない。規模は明瞭ではない。

柱穴・炉　柱穴や炉は検出されていない。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　8号周溝に切られていることから古墳時代前期の住居跡であると推定される。

2．周溝

今回の調査では、形状の異なる2種類の周溝が検出されている。

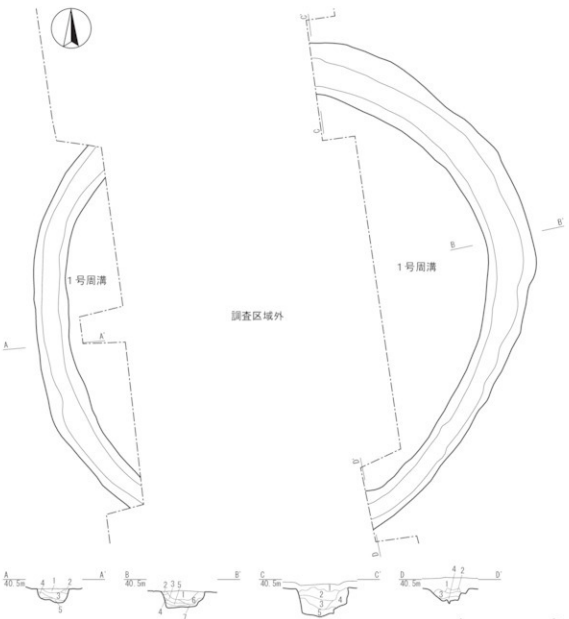
A類　弥生時代中期から観られる周溝墓の系譜を引く溝である。ここでは溝の形状は平面形が円形を呈し、断面形は「箱形」や「U」字形を呈する。溝の規模は直径10m前後、溝幅0.5～1m、深さ0.5m前後を測る。この溝は完全な形で調査できたのは1基のみであるが、地形の関係か一部が消失している溝が多く所在している。

B類　古墳（墳丘を有し、墳丘内に主体部を構築したものと考えられる）の周溝として判断できる溝である。ここでは直径15～25mの規模と、溝幅が1～5m、深さ1m程を測り、平面形は円形を呈し、断面形は溝の外壁がほぼ直立し、内壁は墳丘中央部に向かい緩やかな傾斜で立ち上がる。これらの要素を満たす周溝をさす。

1号周溝（A類）（第39図　図版5・6）

位置・重複　調査区1・2区（L・M・N－11・12・13グリッド）に位置する。本遺構に重複する遺構は検出されていない。

形状・規模　周溝の平面形は若干歪んでいるが円形を呈する。周溝の断面形は箱形を呈し、溝底は平坦である。溝幅は南部が狭く、北部で広く、深さは南部で浅く、北部で深くなる。周溝の規模は直径10.8m、溝幅



1号周溝　SPA－SPA'
1　7.5YR3/4　暗褐色土　腐作土　締まりなし　粘性なし
2　7.5YR4/6　褐色土　ロームブロック含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR3/3　暗褐色土　ローム小ブロックを少量含む　締まりなし　粘性なし
5　10YR4/4　褐色土　ロームブロック(1～10cm)を含む　締まり普通　粘性普通

1号周溝　SPB－SPB'
1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
2　10YR5/3　鈍い黄褐色土　鈍いロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性なし
4　10YR5/6　黄褐色土　ローム　締まりあり　粘性あり
5　10YR3/4　暗褐色土　黒色土で鈍いロームを混入　締まり普通　粘性普通
6　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒を少量に含む　締まり普通　粘性普通
7　10YR4/4　褐色土　ロームを主体、黒色土を混入　締まりあり　粘性あり

1号周溝　SPC－SPC'
1　7.5YR3/4　暗褐色土　腐作土　締まりなし　粘性なし
2　10YR2/1　黒色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック(1～2cm)・ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性あり
5　10YR4/4　褐色土　ローム主体の土　締まりあり　粘性あり

1号周溝　SPD－SPD'
1　10YR3/4　暗褐色土　腐作土　締まりなし　粘性なし
2　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロック(1cm)を少量含む　締まりあり　粘性あり

第39図　1号周溝（1：80）

0.67 ～ 1.18m、深さ 27.9 ～ 64.3cm を測る。周溝の中央部は、南北に走る市道によって縦断されているために、主体部を確認することはできなかった。

出土遺物　出土遺物の多くは小片であり、実測できる資料は皆無である。小片の観察から古墳時代前期（五領式土器）の範疇に入る土器を多く観る。

出土遺物の総量は 189 点・重量 1,737g を量り、内訳は旧石器 5 点・重量 20g、縄文土器 27 点・重量 337g、弥生土器 21 点・重量 199g、土師器 106 点・重量 629g、須恵器 10 点・重量 92g、中・近世遺物 10 点・重量 60g、細片 6 点・重量 15g、鉄製品 1 点・重量 10g、石 3 点・重量 375g である。最も多く出土した遺物は土師器であり、数量比は 56.08% を占める。

時期　出土した遺物等から古墳時代前期と思われる。

2 号周溝（B 類）（第 40・41 図　図版 6・18）

位置・重複　周溝は調査区 2 区（L ～ R－15 ～ 21 グリッド）に位置する。4・5 号住居跡と重複し、それぞれを切っている。北東部には近世の撹乱と推定される深い掘り込みが所在する。掘り込みの覆土は黒褐色土で短時間に埋められたようである。覆土中には多くの礫が不規則に混入している。礫は全て自然石であるが、古墳の石室等に使用されていた可能性は否定できない。

形状・規模　周溝の平面形は円形を呈し、北部から南部にかけて緩やかな傾斜をもって浅くなる。周溝の断面形は外壁がほぼ直立し、内壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。周溝の底面は皿状である。周溝の規模は直径 24.72m、幅 2.31 ～ 4.87m、深さ 34.7 ～ 96.2cm を測る。

出土遺物　出土遺物は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代と多岐にわたる。周溝に伴う遺物は、土師器が最も多く出土している。埴輪は円筒埴輪の小片が出土しているが、本周溝に伴うものではない。

掲載した遺物は坩形土器に「ハ」の字形の台が付いた形の土器（台付坩形土器と仮称）、小型壺形土器、須恵器では甑・甕形土器である。

遺物の出土量は総数で 1,238 点・重量 13,097.3g を量り、内訳は旧石器 1 点・重量 146g、縄文土器 69 点・重量 1,113g、縄文石器 4 点・重量 1,460g、弥生土器 46 点・重量 413g、土師器 798 点・重量 5,794g、須恵器 160 点・重量 3,111g、埴輪 1 点・重量 38g、細片 141 点・重量 339g、石 20 点・重量 713g、銭貨 1 枚・2.3g である。土師器の数量比は 64.56% を占める。

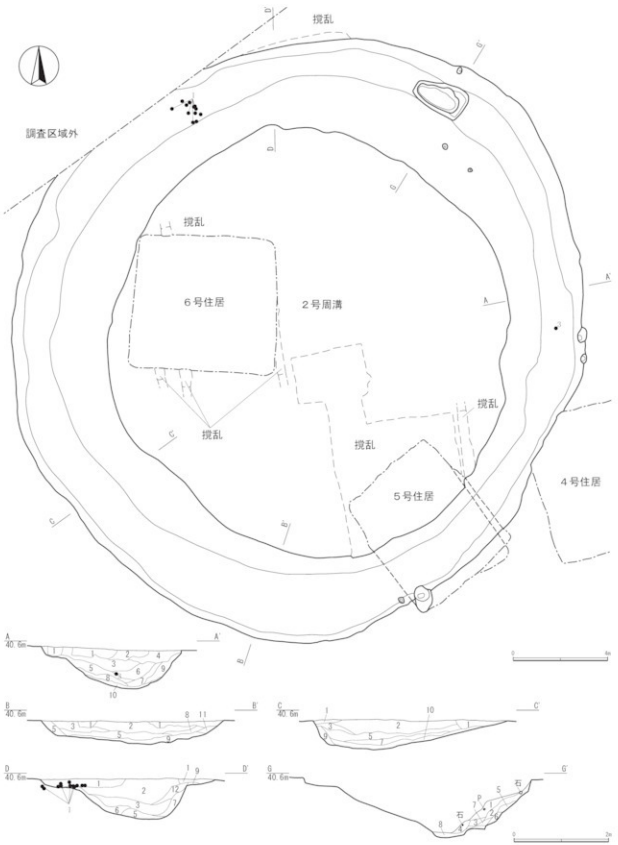
時期　古墳時代後期に属すると推定される。

3 号周溝（A 類）（第 42 図　図版 6）

位置・重複　周溝は、調査区 2 区（Q・R・S－14・15・16・17 グリッド）に位置する。周溝は東部で 1 号溝に、西部で 1 号土坑と、北部で 4 号住居跡と重複し、いずれの遺構にも切られている。周溝の南側大半が調査区外に延びることもあり、周溝南部を検出することはできなかった。

形状・規模　周溝の平面形は緩やかな弧を描き、断面形は「U」字形を呈する。周溝の規模は、溝幅 0.65 ～ 1.15m、深さ 11.9 ～ 32.6cm を測る。

出土遺物　本遺構からは土師器を主体とした土器片が出土しているが、いずれも小片であるため、図示できる遺物は皆無である。出土遺物の総量は 138 点・重量 1,446g を量り、内訳は弥生土器 2 点・重量 17g、土師器 127 点・重量 1,401g、土製品 1 点・重量 8g、中・近世遺物 2 点・重量 10g、細片 6 点・重量 10g である。土師器が最も多く出土し、数量比は 92.03% を占める。



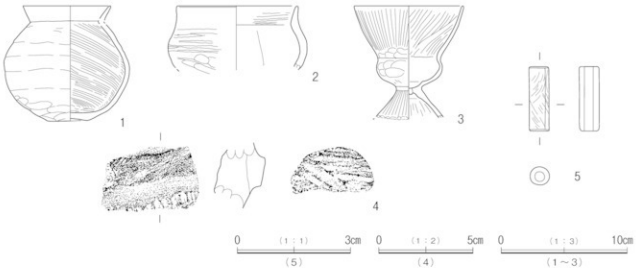
2号周溝　SPA－SPK ～SPG－SPG

1　10YR4/3　黒い黄褐色土　ローム粒を多く、赤色土粒を少なく含む　締まりなし　粘性なし
2　10YR3/1　黒褐色土　黒色土粒を多く含む　締まりあり　粘性普通
3　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒、赤色土粒をやや多く含む　締まりあり　粘性普通
4　10YR2/3　暗褐色土　ローム粒を含む。締まった固い層　締まりあり　粘性やや強い
5　10YR4/4　褐色土　ローム粒を含む。ややサラサラした層　締まりなし　粘性なし
6　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック(1～3cm)を少量含む　締まりやや弱い　粘性やや弱い
7　10YR4/4　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。固くなった層　締まり強い　粘性あり
8　10YR4/3　黒い黄褐色土　ローム粒を多量に含む　締まり普通　粘性普通
9　10YR4/4　褐色土　黒いローム土を主とする　締まり普通　粘性あり
10　10YR4/6　褐色土　黒いローム土を主として、ローム粒を含む　締まり普通　粘性あり
11　10YR3/2　暗褐色土　極暗褐色土に黒いローム土を混入　締まり普通　粘性普通
12　10YR3/2　黒褐色土　黒いローム土を少量含む　締まり普通　粘性普通

2号周溝　SPG－SPG

1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む　締まりなし　粘性なし
2　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック(1～3cm)を含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
4　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロックを多く含む　締まりなし　粘性なし
5　10YR4/3　黒い黄褐色土　風化したローム土を多く含む　締まり普通　粘性普通
6　10YR5/6　黄褐色土　ローム土を主体とする　締まりあり　粘性あり
7　10YR2/2　黒褐色土　黄色ローム土を含む　締まりあり　粘性あり
8　10YR4/6　褐色土　黄褐土を多く含む　締まりなし　粘性なし

第 40 図　2号周溝（1：160、1：80）



第41図　2号周溝出土遺物

第32表　2号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底部径(cm)	高さ(cm)	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	小型壺	口縁部大半が欠損	90.0	「7.0」胴部最大径8.8	3.2	7.8	内・口縁部ヨコナデ　胴部ハケ整形　外・口縁～胴部上半ナデ　胴部下半ヘラ削り	石英・小石中量	良	内・5YR4/4 にぶい赤褐色 外・5YR5/8 明赤褐色	外面1/2は7.5YR2/1黒色
2	鬼高式	土師器	小型壺	口縁部	25.0	「9.7」胴部最大径推定「11.4」	－	(6.0)	内・口縁部ミガキ　胴部ナデ 外・口縁ヨコミガキ　胴部ヘラ削り→ヘラミガキ	石英・砂多量 2.5YR4/6 赤褐色	良	内外面とも2.5YR4/6 赤褐色	
3		土師器	台付壺	－	60.0	「8.6」身部最大径5.2	－	(8.9)	内・口縁部屈位ヘラミガキ　身部ナデ　身部中央に凹有　外・口縁部屈位ヘラミガキ　身部横位ヘラミガキ　脚部・内外面ヘラミガキ　脚部の縁は打ち欠いた痕跡あり	小石を少量	良	内・外面とも5YR4/8 赤褐色	
4		埴輪	円筒埴輪	不明	－	－	(5.0)	(4.8)	内・横位クシ　外・屈位クシ	石英・砂中量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・5YR4/2 灰褐色	
5		石製品	管玉	－	100.0	上径0.5 下径0.5	孔径上0.2 孔径下0.2	長5.17	黄灰褐色				材質：滑石

時期　古墳時代前期の遺物が多くを占めていることから本遺構は古墳時代前期に属すると推定される。

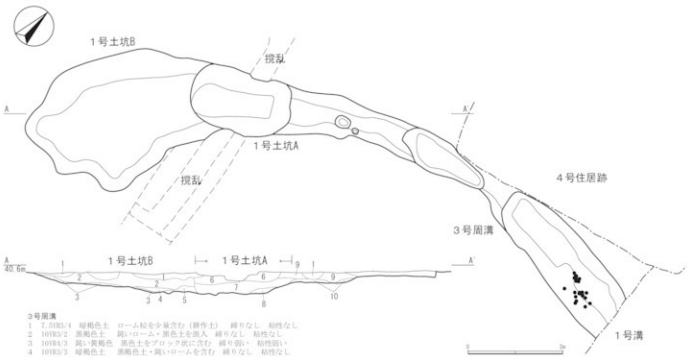
4号周溝（B類）（第43図　図版6・18）

位置・重複　周溝は調査区2・3区（O・P-23・24グリッド）に位置し、周溝北部の大半が調査区外となり、周溝南部の一部を調査したものである。周溝は9号住居跡と重複し、これを切っている。

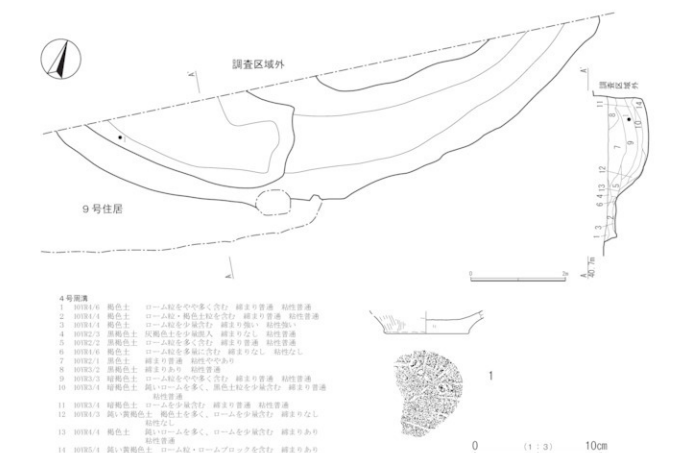
形状・規模　平面形は円形であると推定している。周溝の断面形は、外壁が直立し、内壁は緩やかに立ち上がる。周溝の底部は皿状となっている。周溝の規模は、幅約2.70m、深さ約110cmを測る。周溝の直径は推定で約16mになるものと思われる。

出土遺物　本遺構からの出土遺物は、土師器小片が多数を占める。図示した遺物（甕形土器）は底部に木葉痕が観られ、研磨した痕跡と思われる線状痕が顕著に観察される。

出土遺物の総量は247点・重量2,496gを量り、内訳は縄文土器3点・重量156g、縄文石器1点・重量34g、弥生土器29点・重量337g、土師器180点・重量1,833g、須恵器2点・重量50g、細片31点・重量



第 42 図　3号周溝（1：80）



第 43 図　4号周溝（1：80）及び出土遺物

第 33 表　4号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1		土師器	甕	底部	5.0	－	「6.9」	(1.8)	内・ミガキ　外・木葉痕有	石英微量	良	内・外面 7.5YR5/6 明褐色	

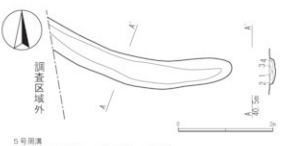
43g、石1点・重量 43g である。多数出土している土師器の数量比は 78.87% を占める。

時期　出土遺物や9号住居跡との重複関係等から古墳時代後期に属すると推定される。

5号周溝（A類）（第 44 図　図版 6）

位置・重複　周溝は調査区1区（I-11・12 グリッド）に位置し、他の遺構と重複していない。周溝の西部は市道となり、溝の北部は表土とともに削除されたため検出できなかった。今回調査した周溝は南側の一部である。

形状・規模　検出された周溝は、緩やかに湾曲している。周溝の断面形は「U」字形を呈し、溝底は僅かに皿状となる。溝幅 0.55 ～ 0.66m、深さ 11.1cm、推定直径約 9m であろう。



第 44 図　5号周溝（1：80）

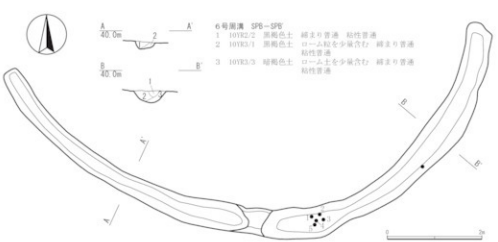
出土遺物　出土遺物は土師器の小片が1点・重量 3g である。

時期　周溝からの出土遺物は少なく、本遺構の時期は不明である。

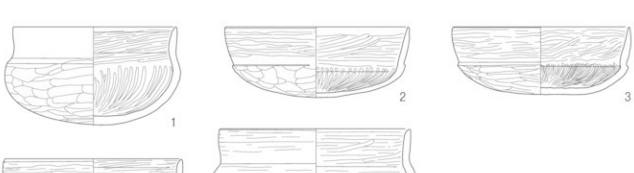
6号周溝（A類）（第 45・46 図　図版 7・18）

位置・重複　周溝は調査区1区（H・I-7・8・9 グリッド）に位置する。周溝の南部約 1/2 を検出したものである。北部は表土を深く掘削しており、周溝の深さまで達しているものと推定される。他の遺構と本遺構の重複関係はない。

形状・規模　周溝の平面形は半円形を呈し、断面形は「U」字形、溝底は平坦である。溝の南部で幅約



第 45 図　6号周溝（1：80）



第46図　6号周溝出土遺物

第34表　6号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	和泉式	土師器	坏	－	100.0	13.1	－	7.7	内・口縁部横位のヘラミガキ　身部縦位のヘラミガキ　外・口縁部～身部上半横位のヘラミガキ　身部下半ヘラ削り　ていねいな調整	白色粒・砂を中量 2.5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 2.5YR5/8 明赤褐色	底部に黒斑有　赤色塗彩
2	和泉式	土師器	坏	－	100.0	14.6	－	5.5	内・口縁部横位のヘラミガキ　身縦位のヘラミガキ　外・横位のヘラミガキ　胴部下半ヘラ削り　ていねいな調整	砂を微量 5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 2.5YR4/8 赤褐色	底部に黒斑有　内外面・赤色塗彩
3	和泉式	土師器	坏	－	100.0	15.1	－	5.2	内・口縁部横位のヘラミガキ　身部縦位のヘラミガキ　外・口縁部横位のヘラミガキ　身部下半ヘラ削り　ていねいな調整	砂を少量含む	良	内・2.5YR4/8 赤褐色　外・2.5YR4/8 10YR5/6	赤色塗彩
4	和泉式	土師器	坏	－	100.0	14.0	－	5.5	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部縦位のヘラミガキ　外・口縁部横位ヘラミガキ　身部クシ整形身部下半ヘラ削り　ていねいな調整	白色粒・小石を中量 10YR5/6 黄褐色	良	内面 5YR5/8 赤褐色　外面 5YR5/8 赤褐色	内・赤色塗彩
5	和泉式	土師器	坏	－	100.0	15.2	－	7.9	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部縦位のヘラミガキ　外・口縁部横位ヘラミガキ　身部下半ヘラ削り　ていねいな調整	砂を中量 2.5YR4/6 褐色土	良	内・外面 7.5YR4/8 赤褐色土	底部黒斑有　赤色塗彩

0.75m、深さ約7cmのブリッジが観られる。規模は、溝幅が0.42～0.66m、深さ15.7～29.9cm、推定直径が約11mを測る。

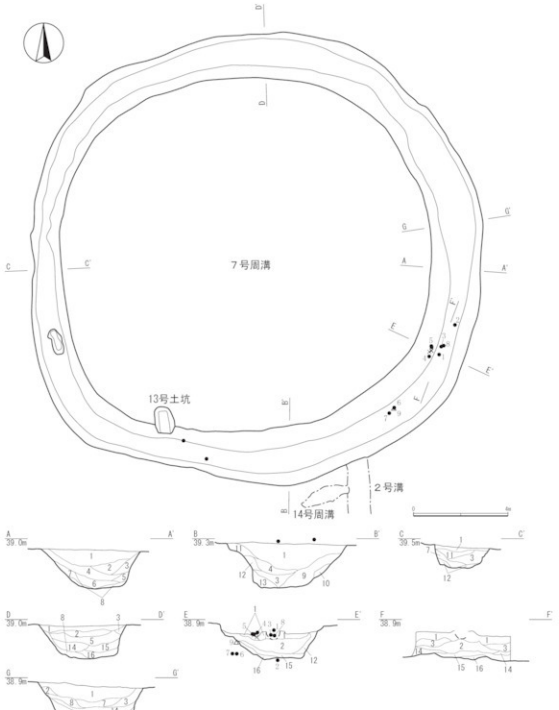
出土遺物　本遺構からは土師器が45点・重量1,463gである。遺物は本遺構のブリッジ状の施設東から集中して出土している。遺物は古墳時代前期（和泉式土器）坏形土器が5点集中して出土している。

時期　出土遺物などから古墳時代前期であると推定される。

7号周溝（B類）（第47・48図　図版7・19）

位置・重複　周溝は調査区1区（C～G-3～7グリッド）に位置する。周溝は東部で南北に調査区を縦断する2号溝と重複し、これに切られている。

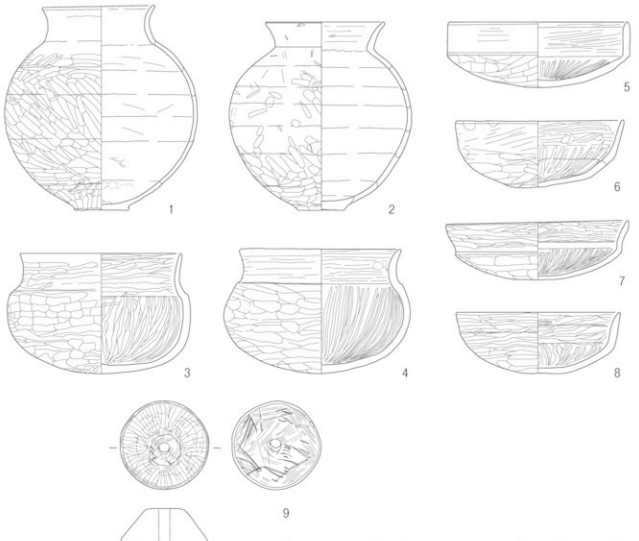
形状・規模　周溝の全容を調査できた3基の内の1基である。周溝は南から西にかけてやや直線的となり、南西部で鋭角に屈曲し、北から東は湾曲している。平面形は方形と円形が組み合わさったような形となる。周溝の幅は南部から東部にかけて広なり、西部で狭くなる。周溝の断面形は全体として箱形を呈し、内外壁



7号周溝　SPA－SPA'～SPG－SPG'

1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒を少量に含む　締まり普通　粘性普通
2　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性なし
3　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性あり
4　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性あり
5　10YR3/3　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
6　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒・焼土ブロック(1cm)を少量含む　締まりあり　粘性普通
7　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
8　10YR3/3　暗褐色土　黒色土粒・焼土ブロック(1cm～3cm)を含む　締まりなし　粘性あり
9　10YR4/4　褐色土　ローム粒を多量含む　締まりなし　粘性なし
10　10YR4/6　褐色土　ローム・ローム粒を含む　締まり普通　粘性あり
11　10YR6/4　鈍い黄褐色土　ローム をやや多く、ローム粒を混入　締まり普通　粘性普通
12　10YR4/4　褐色土　鈍いローム を多く含む　締まりあり　粘性あり
13　10YR4/6　褐色土　ロームブロック(3～5cm)と暗褐色土をサンドイッチ状態で重ねる　締まりなし　粘性なし
14　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
15　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
16　10YR4/4　褐色土　焼土ブロック(1～4cm)を含む　締まり普通

第47図　7号周溝（1：160、1：80）



第48図　7号周溝出土遺物

第35表　7号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	甕	－	100.0	18.1 胴部最大径29.2	8.4	32.3	内・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ 外・口縁部から肩部ヨコナデ 胴部ヘラ削り	雲母多量 石英・砂中量 2.5YR4/8 赤褐色	良	内・2.5YR4/8 赤褐色 外・2.5YR4/6 赤褐色	外面黒色斑有
2	鬼高式	土師器	甕	－	100.0	18.9 胴部最大径28.9	7.2	30.0	内・ヨコナデ　外・ヨコナデ 胴部ヘラ削り→ナデ	石英・砂中量	良	内・5YR4/4 にぶい赤褐色 外・5YR2/1 黒褐色	外面の一部にスス付着
3	鬼高式	土師器	椀	－	100.0	13.0 胴部最大径14.5	－	9.5	内・口縁部横位ヘラミガキ　胴部縦位ヘラミガキ　外・口縁部から胴部上半ヘラミガキ　胴部下半ヘラ削り	白色粒微量	良	内・5YR2/2 黒褐色 外・2.5YR3/6 暗赤褐色	内・口縁部に黒斑有
4	鬼高式	土師器	椀	－	100.0	13.7	－	9.7	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部縦ヘラミガキ　外・口縁部～胴部上半横位のヘラミガキ、下半ヘラ削り	小石・石英を中量 7.5YR5/8 明赤褐色	良	内・外面 2.5YR4/6 赤褐色	全体に赤色塗彩　外面口縁部スス付着
5	鬼高式	土師器	坏	－	100.0	14.3	－	5.2	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部縦ヘラミガキ　外・口縁部横位のヘラミガキ、身部ヘラ削り	白色粒・石英・砂中量	良	内・外・ 2.5YR4/6 赤褐色	口縁部内外面に　赤色塗彩
6	鬼高式	土師器	坏	－	100.0	13.5	－	5.4	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部縦ヘラミガキ　外・口縁部横位のヘラミガキ、身部ヘラ削り	白色粒・砂をやや多量	良	内・外面 2.5YR4/8 赤褐色	口縁部内外面に　赤色塗彩

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
7	鬼高式	土師器	坏	－	100.0	14.6	－	5.1	内・口縁部横位ヘラミガキ・身部縦位ヘラミガキ　外・口縁部横位ヘラミガキ・身部ヘラ削り	砂微量	良	内・5YR3/2 暗赤褐色 外・5YR4/8 赤褐色	
8	鬼高式	土師器	坏	－	100.0	13.0	－	5.2	内・口縁部　横位ミガキ　身部縦位ヘラミガキ　外・口縁部ヘラミガキ　身部　ヘラ削り	白色粒をやや多く	良	内外面・2.5YR4/6 赤褐色	口唇部の一部に線状痕多数あり
9		石製品	紡錘車	－	100.0	上部径 1.8 孔径 0.6	4.7	2.0	上面・研磨　側面・縦位の擦痕、線状痕あり　底面・線状痕顕著				材質：滑石

ともに壁の立ち上がりは急峻な傾斜を示す。

周溝の規模は直径 19.65m、幅 1.16 ～ 2.54m、深さ 112.2 ～ 138.7cm を測る。

出土遺物　周溝南部の覆土上層から、土師器の甕形土器が正立した状態で出土している（図版 7 を参照）。その周囲 3 方向には、坏形土器・碗形土器が等間隔で配され、坏・碗形土器の間に粉末状の朱が散布されていた。この出土状況から周溝内埋葬を想定して調査したが、周溝の覆土中に掘り方は確認されなかった。また甕形土器の土壌を科学分析の結果、骨・歯などの存在を肯定するデータは確認できなかった（自然科学分析を参照）。掲載遺物は、坏形土器・甕形土器・碗形土器である。いずれも鬼高式土器である。

出土遺物の総量は、169 点・重量 10,049g を量り、内訳は縄文土器 24 点・重量 363g、縄文石器 3 点・重量 456g、弥生土器 11 点・重量 62g、土師器 121 点・重量 8,995g、須恵器 1 点・重量 48g、中・近世遺物 3 点・重量 18g、石 6 点・重量 107g である。土師器の出土が多く数量比は 71.60% である。

時期　出土遺物や周溝の形状から古墳時代後期に属すると推定される。

8 号周溝（B 類）（第 49・50 図　図版 8・19）

位置・重複　周溝は調査区 3・4 区（R ～ W－23 ～ 26 グリッド）に位置する。周溝の西部及び南部は、東西と南北に走る市道の交差点となり、周溝を縦横断している。周溝は 11・17・19 号住居跡・5 号溝と重複し、これを切っている。

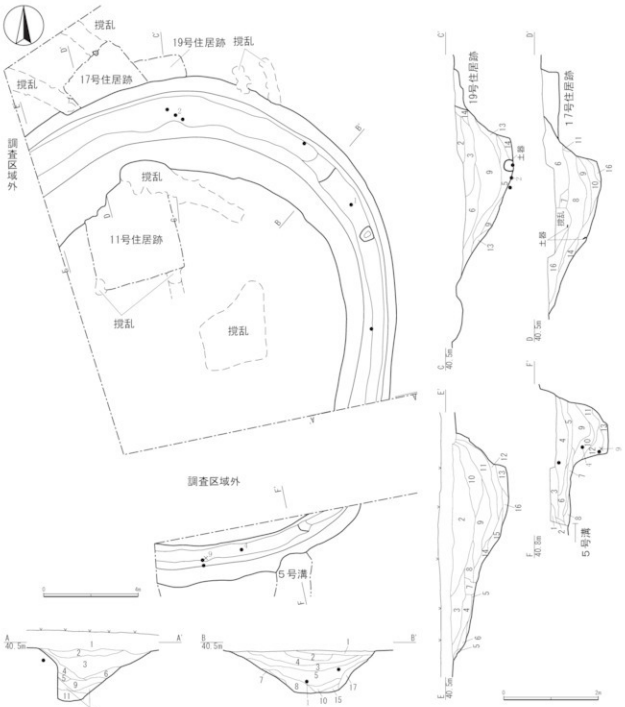
形状・規模　周溝は、東部から西部にかけてほぼ直線的に掘られており、北部は緩やかに湾曲している。西側の調査できなかった市道の西（5 区）からは周溝の痕跡は確認できなかった。これらのことから、方形と円形を組み合わせた形状の 7 号周溝に類似したものと考えられる。

周溝の断面形は、西部から南部かけて溝幅が狭く、断面形が箱形を呈し、内外壁ともに急峻な立ち上がりとなる。東部から北部にかけて溝幅が広くなり、内壁は緩やかに立ち上がるが、外壁は急峻な立ち上がりをする。

周溝の規模は、推定直径が約 22m、幅 2.22 ～ 3.78m、深さ 112 ～ 139cm を測る。

出土遺物　土師器を主体とし、刀子や石製装飾品と紡錘車が出土し、いずれも本遺構に伴う遺物である。刀子や石製装飾品は周溝底から出土しており、古墳の副葬品である可能性が窺える。紡錘車は覆土中層からの出土である。

出土遺物の総量は 1,335 点・重量 34,414g を量り、内訳は旧石器 6 点・重量 34g、縄文土器 12 点・重量 214g、弥生土器 24 点・重量 290g、土師器 945 点・重量 15,519g、須恵器 221 点・重量 17,794g、中・近世遺物 29 点・重量 331g、鉄製品（刀子）1 点・重量 3g、銭貨 2 枚・重量 4g、細片 27 点・重量 26g、石 5 点・重量 170g である。土師器の出土量が多く、数量比は 71.37% を占める。



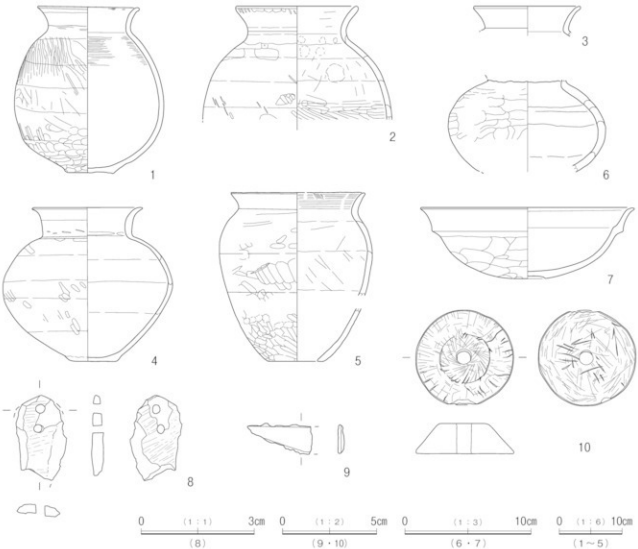
8号周溝　SPA～SPE～SPE

1	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック(1～3)を含む　締まりあり　粘性なし
2	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック(1～3)・ローム粒を多く含む　締まりあり　粘性なし
3	10YR4/3	黄いろ褐色土	黄いローム多くを含む　締まりなし　粘性なし
4	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
5	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性普通
6	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
7	10YR4/4	褐色土	ローム・ローム粒を多量に含む　締まり普通　粘性普通
8	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性なし
9	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を極めて多く含む　締まりなし　粘性なし
10	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まりなし　粘性なし
11	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒を混入する　締まりあり　粘性あり
12	10YR2/3	黒褐色土	黄いローム・ローム粒を混入　締まり普通　粘性普通
13	10YR4/4	褐色土	黄いローム大量に含む　締まり普通　粘性普通
14	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
15	10YR3/4	黒褐色土	カクラン　締まりなし　粘性なし
16	10YR4/3	黄いろ褐色土	ローム・ローム粒を多量に含む　締まり普通　粘性あり
17	10YR4/4	褐色土	黄いロームを多く含む　締まりなし　粘性なし

8号周溝　SPF～SPF

1	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
2	10YR3/2	黒褐色土	締まり普通　粘性普通
3	10YR3/4	暗褐色土	黄いロームを多く含む　締まり普通　粘性普通
4	10YR3/1	黒褐色土	締まり普通　粘性普通
5	10YR2/1	黒褐色土	ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
6	10YR2/1	黒褐色土	ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性なし
7	10YR3/4	黒色土	ロームブロック(1～3)をやや多く含む　締まり普通　粘性あり
8	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒をわずかに含む　締まり普通　粘性普通
9	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を多量に含む　砂質　締まりなし　粘性なし
10	10YR4/4	褐色土	ローム粒・黄いロームを含む　締まりなし　粘性なし
11	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒を含む　黒褐色土を混入　締まりなし　粘性なし
12	10YR4/6	褐色土	黄いローム・ローム粒を含む　締まりなし　粘性なし
13	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土に多くのローム粒を含む　締まりなし　粘性なし

第49図　8号周溝（1：160、1：80）



第 50 図　8 号周溝出土遺物

第 36 表　8 号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	甕	－	100.0	16.0 胴部最大径 23.2	7.8	26.6	内・口縁部ハケ整形→ヨコミガキ　胴部ヘラ整形　外・口縁部ハケ→ミガキ　胴部ヘラミガキ	黒色粒多量	良	内・2.5YR4/8 赤褐色 外・2.5YR4/8 赤褐色	
2	鬼高式	土師器	甕	口縁部～胴部上半	50.0	19.6 胴部最大径推定 30.0	－	（18.3）	内・ヨコナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ	石英多量 小石中量	やや良	内・5YR6/6 橙色 外・7.5YR3/3 暗褐色	口縁部整形がやや雑
3	鬼高式	土師器	甕	口縁部	40.0	17.0	－	（5.1）	内・口縁部ヘラミガキ→ナデ 外・口縁部ナデ	砂・小石多量 10YR3/4 暗褐色	良	内・7.5YR3/1 黒褐色 外・5YR3/1 黒褐色	外面一部に赤色塗彩痕有
4	鬼高式？	土師器	甕	胴部一部欠損	95.0	17.6 胴部最大径 26.9	8.0	24.4	内・ヨコナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキ	石英・砂多量	良	内・5YR5/6 明赤褐色 外・5YR3/1 黒褐色	外面全体にスス付着
5	鬼高式	土師器	瓶	口縁～胴部底部	50.0	22.2 胴部最大径 24.3	底部孔径 6.7	（26.8）	内・口縁部ヨコナデ　胴部斜位ヘラ整形　外・口縁部ヨコナデ　胴部縦位ヘラ削り	石英少量	良	内・7.5YR3/4 暗褐色 外・7.5YR4/4 暗褐色	内・口縁部スス付着 外・胴部大半が黒褐色　一部にスス付着

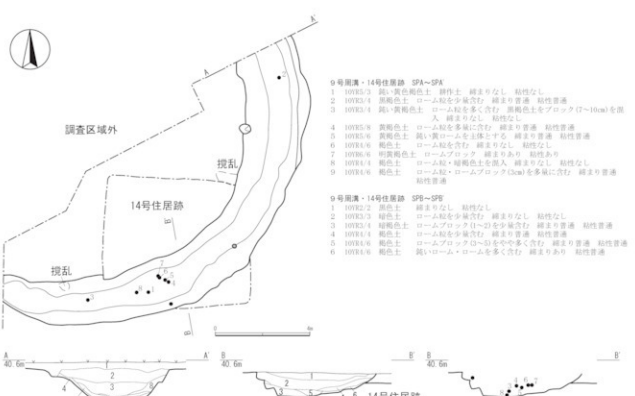
図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
6	鬼高式	土師器	壺	胴部	60.0	胴部最大径「12.5」	－	（8.1）	内・ナデ　輪積痕明瞭　外・ヘラ削り→ヘラミガキ	石英・砂少量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・5YR5/8 明赤褐色	
7	鬼高式	土師器	坏	口縁部～身部	25.0	「17.0」	2.4	（5.5）	内・ナデ　外・口縁部ナデ　胴部ヘラ削り→ナデ　底部に円形の凹有	白色粒を多量 5YR6/8 橙色	良	内・外面ともに 10YR3/6 暗赤色	全面に赤色塗彩
8		石製品	石製垂飾	－	40.0	幅 1.3 孔径 0.2	－	長さ 2.3	欠損部多く全形不明　上部に径 2 mmの円形穿孔 2 つが縦列する 表裏に線状痕顕著				黒色片岩
9		鉄製品	刀子	刃部先端	30.0	全長（3.6）	幅 1.4	－					
10		石製品	紡錘車	－	100.0	上部径 2.7 孔径 0.8	5.2	1.6	上面・扁状の線条痕顕著・側面やや太目の線条痕。　底面・線条痕				材質：頁岩

時期　出土遺物や周溝の形状から古墳時代後期に属すると推定される。

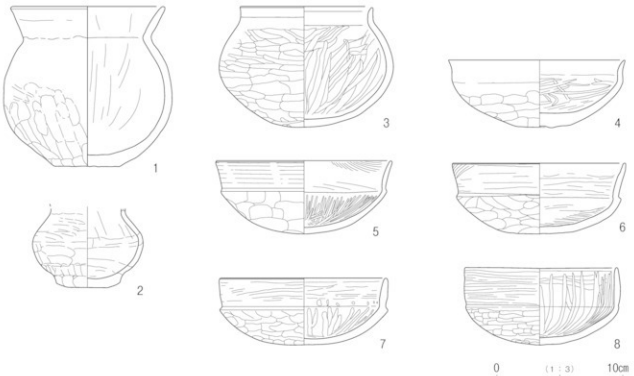
９号周溝（Ｂ類）（第 51・52 図　図版 8・20）

位置・重複　周溝は調査区５区（T・U・V－31 ～ 34 グリッド）に位置する。周溝北部から西部は調査区外となり、周溝の約 1/3 を調査した。周溝は南部で 14 号住居跡を切っている。

形状・規模　周溝の平面形は円形を呈するものと推定される。周溝の幅は北から西部にかけてやや狭くなる。周溝の断面形は、外壁がほぼ直立し、内壁は傾斜をもって立ち上がる。周溝の断面形は内側が大きく開いた「U」字形であり、周溝底部は皿状となる。周溝の幅や深さは、西部に向かって狭くかつ浅くなっている。



第 51 図　９号周溝（1：160、1：80）



第 52 図　9 号周溝出土遺物

第 37 表　9 号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	甕	－	100.0	12.1	5.0	12.6	内・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラミガキが一部に残る　外・口縁部ヨコナデ　胴部上半ヨコナデ　下半ヘラ削り	砂・白色粒を多量	良	内・外面・25YR5/8 明赤褐色	外・黒色斑有
2	鬼高式	土師器	小型壺？小型の長頸瓶？	胴部～底部	50.0	－ 胴部最大径 8.8	5.0	(6.3)	内・ヘラ削り→ナデ　外・ヘラ削り→ナデ　底部ヘラ削り	石英・雲母少量 砂中量 5YR6/8 橙色	良	内・5YR6/8 橙色 外・5YR5/8 明赤褐色	
3	鬼高式	土師器	小型丸底	口縁部～底部	90.0	10.5 胴部最大径 13.8	－	9.4	内・口縁部横位ヘラミガキ　胴部ナデ→縦位ヘラミガキ　外・口縁部ハケ→ミガキ　胴部横位ヘラミガキ　ていねいに仕上げ	石英多量 砂中量	良	内外面とも 25YR5/8 明赤褐色	内面スス付着　外面スス付着　底部黒色
4	鬼高式	土師器	坏	坏部	100.0	(14.4)	1.6	5.3	内・口縁部ナデ　身部ヘラミガキ　外・口縁部ナデ　胴部ヘラ削り　底部に粘土がはがれた痕跡有（丸く）	砂を中量 5YR4/6 赤褐色	良	内・外面とも 5YR4/6 赤褐色	高坏の坏部か坏か不明　要検討
5	鬼高式	土師器	坏	坏部～身部	80.0	14.6	－	5.8	内・口縁部ヨコナデ　身部ヨコナデ→ヘラミガキ　外・口縁部ヨコナデ　身部ヘラ削り	砂中量	良	内・外面 5YR4/8 赤褐色	
6	鬼高式	土師器	坏	坏部～身部	80.0	13.8	－	5.6	内・口唇部ヨコナデ　口縁部下半～身部ミガキ　外・口縁部ヨコナデ　身部ヘラ削り	石英微量	良	内・外面 5YR4/8 赤褐色	
7	鬼高式	土師器	坏	坏部～身部	85.0	13.4	－	5.3	内・口縁部ヨコナデ　身部ヨコナデ→ヘラミガキ　外・口縁部ヨコナデ　身部ヘラも削り	砂少量	良	内・外面 5YR5/8 明赤褐色	内・外面に小さな黒斑有
8	鬼高式	土師器	坏	－	100.0	12.0	－	6.2	内・口縁部横位ヘラミガキヨコ→縦位のヘラミガキ（身部まで）　外・口縁部～身部ヘラミガキ　底部ヘラ削り	砂・石英中量	良	内・外面 5YR5/8 明赤褐色	

周溝の規模は、推定直径が約 18m、幅 1.14 ～ 2.56m、深さ 28.4 ～ 72.5cm を測る。

出土遺物　出土遺物は土師器を主とする。土師器はいずれも古墳時代後期の範疇に入る。掲載遺物は、坏・甕・小型壺形土器である。

出土遺物の総量は 619 点・重量 7,106g を量り、内訳は旧石器 2 点・重量 8g、縄文土器 2 点・重量 24g、縄文石器 2 点・重量 28g、弥生土器 40 点・重量 399g、土師器 534 点・重量 6,546g、土製品 1 点・重量 5g、中・近世遺物 2 点・重量 25g、瓦 1 点・重量 5g、細片 31 点 44g、石 4 点・重量 22g である。土師器が最も多く出土し、数量比は 86.55% を占める。

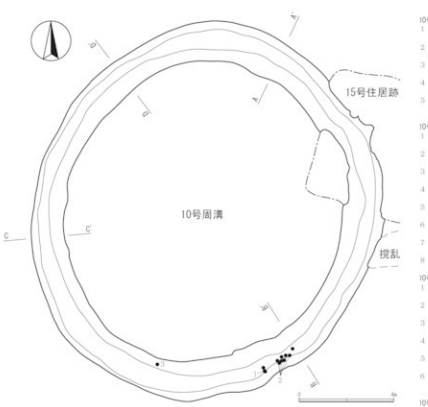
時期　出土遺物や周溝の形状から古墳時代後期に属すると推定される。

10 号周溝（B 類）（第 53・54 図　図版 9・20）

位置・重複　周溝は調査区 6 区（Z ～ Cc-32 ～ 35 グリッド）に位置する。周溝は 15 号住居跡と重複し、これを切っている。

形状・規模　平面形は円形を呈し、周溝の幅や深さには大きな変化が観られない。断面形は箱形であり、内外面の壁は若干の傾斜を持ちながら立ち上がる。周溝底部は皿状となる。

周溝の規模は直径 15.2m、幅 1.28 ～ 1.78m、深さ 52.6 ～ 56.6cm を測る。



10号周溝　SPA－SPA'
1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まりなし　粘性なし
2　10YR3/4　暗褐色土　黄いロームを混入　締まりなし　粘性なし
3　10YR4/4　黄褐色土　ローム粒・ローム小ブロックを含む　締まり普通　粘性普通
4　10YR4/6　黄褐色土　ロームを多く混入する　締まり普通　粘性普通
5　10YR6/5　黄褐色土　ロームブロック（1～3）・ローム粒を大量に含む　締まり普通　粘性普通

10号周溝　SPB－SPB'
1　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を多く含む　締まり普通　粘性普通
2　10YR3/1　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
4　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を含む　締まりなし　粘性普通
5　10YR4/3　黄い黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む　締まり普通　粘性普通
6　10YR4/4　褐色土　黄いローム・ロームブロックを多く含む　締まり普通　粘性あり
7　10YR4/6　褐色土　黄いロームを主体　締まり普通　粘性あり
8　10YR2/1　黒褐色土　耕作の痕跡か？

10号周溝　SPC－SPC'
1　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を多く含む　締まりなし　粘性なし
2　10YR4/6　褐色土　ローム粒を主体とする層　締まりなし　粘性なし
3　10YR4/4　褐色土　ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性なし
4　10YR5/6　黄褐色土　黄いロームを多量に含む　締まり普通　粘性普通
5　10YR4/3　黄い黄褐色土　ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通
6　10YR5/6　黄褐色土　ロームブロック（5cm前）・ローム粒を含む　締まり普通　粘性普通

10号周溝　SPD－SPD'
1　10YR3/1　黒褐色土　締まり普通　粘性普通
2　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通
3　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性なし
4　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒を多量に含む　締まりなし　粘性なし
5　10YR4/4　黄い黄褐色土　ローム粒を主体とする　締まりなし　粘性なし
6　10YR3/3　暗色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性普通

第 53 図　10 号周溝（1：160、1：80）

第 54 図　10 号周溝出土遺物

第 38 表　10 号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	甕	口縁部～胴部	30.0	「15.2」	不明	（20.4）	内・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ 外・口縁部ヨコナデ　胴部ナデ	石英・砂多量	やや良	内・5YR4/6 赤褐色 外・7.5YR5/6 明褐色	
2	鬼高式	土師器	甕	口縁部	30.0	21.6	不明	（12.1）	内・口縁部横位ヘラミガキ　胴部上半ミガキ　外・口縁部縦位ヘラミガキ	砂少量	良	内・外面とも 5YR4/8 赤褐色	
3	5 世紀中頃？	須恵器	ハソウ	－	10.0	12.2 胴部最大径 16.8	－	16.7	内・口縁部白灰色の灰釉　外・肩部に白灰色の灰釉　口縁部と肩部に波状文　肩部下にヘラ状工具による整形痕有	白色粒・砂微量	良	内・外面 10YR6/1 褐灰色	東海系

出土遺物　掲載遺物は土師器の甕形土器と須恵器ハソウである。須恵器ハソウは東海系で 5 世紀中葉と推定されるが、土師器は鬼高式土器の範疇に入る。

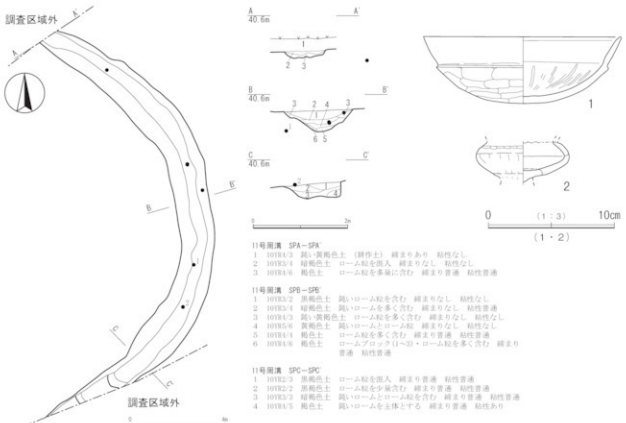
出土遺物の総量は 453 点・重量 6,789g を量り、内訳は縄文土器 6 点・重量 125g、縄文石器 1 点・重量 82g、弥生土器 26 点・重量 372g、土師器 367 点・重量 5,206g、須恵器 26 点・重量 972g、細片 27 点・重量 32g である。土師器の出土量が極めて多量であり、その数量比は 80.02% を占める。

時期　周溝の時期は、出土遺物や周溝の形状から古墳時代後期に属すると推定している。

11 号周溝（B 類）（第 55 図　図版 9・20）

位置・重複　周溝は調査区 6 区（Bb ～ Ee－36・37 グリッド）に位置する。周溝の西部は斜面地となり、表土とともに周溝も流失しており、周溝の西部は検出できなかった。北・南部は調査区外となっているため、周溝の全容を把握することはできなかった。調査は周溝の東部を調査したものである。周溝と重複する遺構はない。

形状・規模　周溝の平面形は円形を呈するものと推定される。周溝の幅は北部でやや狭く、東部で広くなる。周溝の断面形は、「 U 」字形をし、北から南に向かい僅かに浅くなっている。南部ではブリッジと思われる浅い箇所が観られる。その周囲から須恵器等が数点出土している。周溝の規模は、推定の直径は約 18m、



第 55 図　11 号周溝（1：160、1：80）及び出土遺物

第 39 表　11 号周溝遺物観察表

（ ）内残存値、「 」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	坏	口縁部～底部	40	「15.8」	－	(53)	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部最位ヘラミガキ　外・口縁部横位ヘラミガキ　身部ヘラ削り	石英・砂多量	良	内・5YR3/8 赤褐色 外・7.5YR3/8 明褐色	
2		土師器	台付壺？	胴部	50.0	胴部最大径「7.6」	－	(35)	内・外ナデ	石英中量	良	内外面・5YR5/6 明赤褐色	

幅 0.98 ～ 1.72m、深さ 33 ～ 53cm を測る。

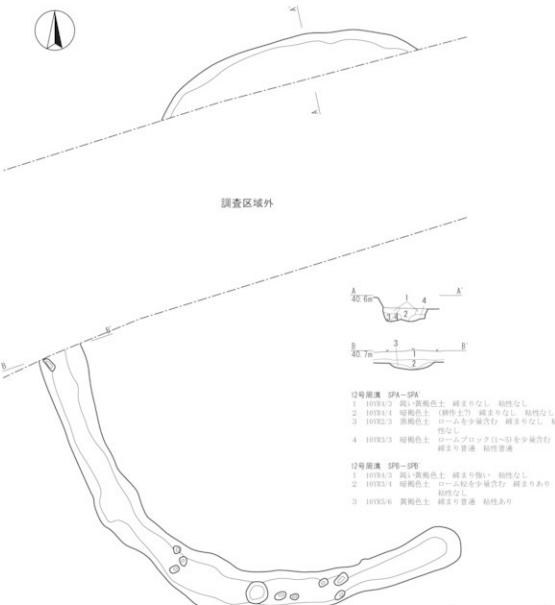
出土遺物　出土遺物の量は少なく、土師器を主体としている。土師器は古墳時代後期に比定される。掲載遺物の中に台付坩形土器と思われる土師器がある。台部は胴部との接続痕を残し、口縁は頸部から破損している。

出土遺物の総量は 101 点・重量 1,198g を量り、内訳は旧石器 1 点・重量 1g、弥生土器 2 点・重量 25g、土師器 50 点・重量 1,115g、細片 46 点・重量 46g 石 2 点・重量 11g である。

時期　出土遺物や周溝の形状から古墳時代後期に属すると推定される。

12 号周溝（A 類）（第 56 図　図版 9）

位置・重複　周溝は調査区 5・6 区（W・X・Y－29・30・31 グリッド）に位置する。周溝の北部は東西に走る道路が横断している。周溝北側の調査区 5 区に周溝の一部が僅かに観られる。東部は撹乱を受け、周溝の全容を知ることはできなかった。他の遺構との重複はない。



第 56 図　12 号周溝（1：80）

形状・規模　周溝の断面形は「U」字形を呈し、溝底は比較的平坦である。平面形は一辺が緩やかに湾曲し、南西コーナー部はやや強く屈曲しており、隅丸方形に近い形状である。周溝の規模は、直径は推定約 11.8m、溝幅 0.68 ～ 0.97m、深さ 9cm を測る。

出土遺物　遺物の出土量は少なく、いずれも小片であるため図示できる遺物は皆無である。

出土遺物は総数量 10 点・重量 178g であり、内訳は弥生土器 1 点・重量 19g、土師器 8 点・重量 135g、中・近世遺物 1 点・重量 24g である。

時期　本遺構の時期を決定できる遺物は皆無であることから不明である。

13号周溝（A類）（第57図　図版9・20）

位置・重複　周溝は調査区6区(Z･Aa-35･36グリッド)に位置する。周溝の北部は大半が調査区外に広がり、周溝の全容を把握することはできなかった。他の遺構との重複は観られない。

形状・規模　周溝の平面形は、やや歪んだ円形を呈すると推定される。周溝の断面形は「U」字形を、溝底は比較的平坦である。南部に長さ約1.80m、深さ10.6cm程のブリッジが観られる。周溝の規模は、直径は推定約10m、溝幅0.62～1.33m、深さ10.6～31.6cmを測る。

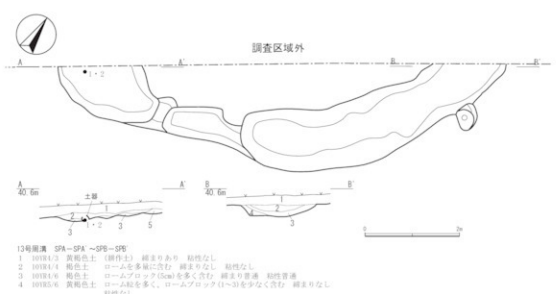
出土遺物　出土遺物の出土量は少なく、数量で62点・重量744gである。その内訳は土師器58点・重量738g、細片4点･重量6gであり、すべてが土師器である。掲載遺物は、坏と小型丸底壺形土器の2点である。

時期　出土遺物から古墳時代後期前葉（鬼高Ⅰ式土器）に属すると考えられる。

14号周溝（A類）（第58図　図版9）

位置・重複　周溝は調査区1区（G･H･Ⅰ･J-3･4･5グリッド）に位置する。周溝の東部で2号溝に切られている。

形状・規模　周溝は西部で南部と北部に分断した状態で検出され、北部の周溝も二分されている。調査区の東側は緩やかな斜面となっているために、周溝は検出されていない。周溝の形状は、平面形が円形を呈し、断面形は南側が「U」字形を、北側が箱形である。周溝の規模は直径9.4m、南部の溝幅0.48～0.82m、深

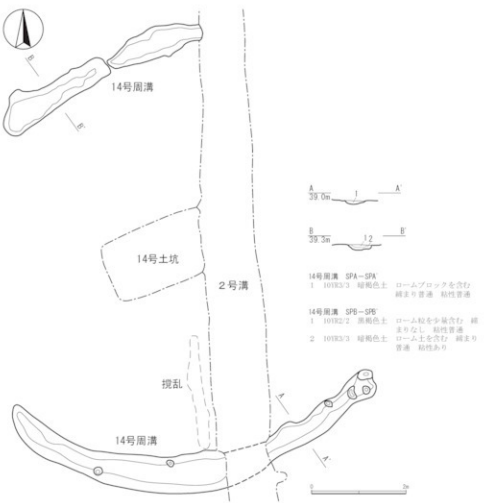


第57図　13号周溝（1：80）及び出土遺物

第 40 表　13 号周溝遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	小型壺	丸底	－	10.0	－	10.5	内・　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り→ヘラミガキ　外・口縁部ナデ　胴部ヘラミガキ	砂・白色粒中量	良	内・外面 5YR5/8 明赤褐色	底部に黒斑有
2	鬼高式	土師器	坏	口縁部～身部	90.0	14.2	－	6.2	内・口縁部ヨコナデ　身部ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り	砂を多く含む 5YR3/6 濃赤褐色	良	内外面 7.5YR4/6 褐色土	



第 58 図　14 号周溝（1：80）

さ 13.4 ～ 22.7cm、北部の溝幅 0.51 ～ 0.66m、深さ 10 ～ 12cm を測る。

出土遺物　試掘調査時に 7 点の土師器破片が出土している。

時期　出土遺物は小片であり時期を推定することは困難である。

3．土坑と遺物

古墳時代の範疇に入ると推定される土坑は３基である。いずれも時期を確定できる遺物等は少ない。

１号土坑（第 59 図　図版 9・20　）

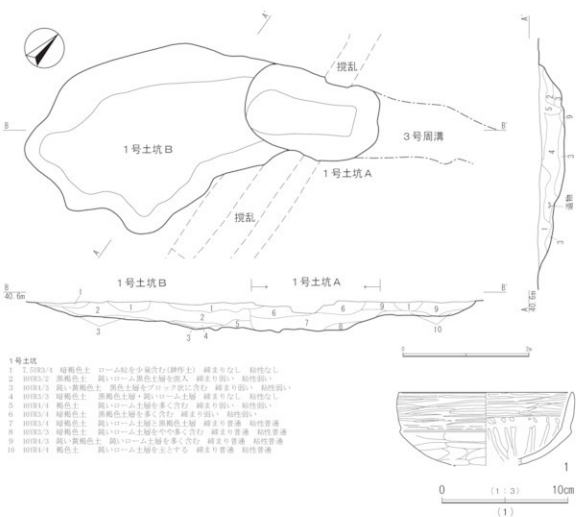
位置・重複　調査区２区（R・S－16・17 グリッド）に位置する。３号周溝と重複し、これを切っている。

形状・規模　土坑は北東から南西に緩やかに湾曲する。土坑の平面形は不整形を呈し、断面形は鍋底形をする。土坑の底面と土層図から判断すると、２基の土坑が重複しており、南西側の土坑が北東側の土坑に切られている。

規模は新しい土坑が長軸 2.15m、短軸 1.3m、深さ 48.5cm、古い土坑は長軸推定約 3.6m、短軸 2.75m、深さ 43.9cm を測る。

出土遺物　土坑からは総量で 146 点・重量 859g が出土し、内訳は縄文土器１点・重量 30g、縄文石器１点・重量 34g、弥生土器９点・重量 62g、土師器 115 点・重量 650g、須恵器２点・重量 18g、中・近世遺物４点・重量 21g、細片 14 点・重量 14g である。土師器が最も多く出土し、総量比は 78.77% である。

時期　土坑は、出土遺物や３号周溝との関係から古墳時代後期に推定される。



第 59 図　１号土坑（１：60）及び出土遺物

第 41 表　1 号土坑遺物観察表

（ ）内残存値、「 」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	坏	口縁部	20.0	「13.8」	－	（6.1）	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部ヨコナデ→縦位ヘラミガキ 外・口縁部横位ヘラミガキ　身部ヘラ削り→ミガキ　頸部一条隆起文と沈線	砂微量	良	内外面 2.5YR4/8 赤褐色	全面赤色塗彩

7 号土坑（第 60・61 図　図版 20）

位置・重複　土坑は調査区 1 区（H－6 グリッド）に位置し、同様な形状の土坑と「十」字形に重複している。東西に長軸をもつ土坑が新しく、南北を長軸とする土坑が旧の土坑である。

形状・規模　新旧いずれの土坑も平面形は長方形を呈し、土坑の断面は箱形である。新土坑は長径 2.40m、短径 0.59m、深さ 28.2cm を、旧土坑は長径 1.79m、短径 0.74m、深さ 16.3cm を測る。

本土坑に形状的に類似する土坑 4 基が、南北方向に約 5m 間隔で直線的に配列されている。土坑は、13・7・12・11 号土坑の 4 基である。この配列はどのような意味を有するのか不明である。

出土遺物　土坑からは、総量で 61 点・重量 294g を量り、内訳は弥生土器 6 点・重量 16g、土師器 54 点・重量 265g、須恵器 1 点・重量 13g が出土している。いずれも覆土中の出土であるため、本遺構に伴うかは明瞭ではない。図示した土師器は、小型壺の胴部破片である。

時期　土坑からの出土遺物は少ないが、図示した小型壺の破片が出土していることから古墳時代に推定されるものと思われる。

36 号土坑（第 60・61 図）

位置・重複　土坑は調査区 2 区（R－23）に位置する。他の遺構との重複は観られない。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形は鍋底形である。規模は長軸 0.30m、短軸 0.25m、深さ 0.14m である。20 号住居跡の西側に所在する。土坑から甕形土器（土師器）の口縁から胴部に至る破片が出土している。

出土遺物　出土遺物は全てが土師器であり、16 点・重量 296g を量る。古墳時代前期（五領式土器）に比定

第 60 図　7・36 号土坑（1：60）

第 61 図　7・36 号土坑出土遺物

第 42 表　7号土坑遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	?	土師器	小型壺	口縁部～胴部	25.0	「5.0」（胴部最大径「5.7」	–	（2.8）	内外面ともナデ	石英・雲母中量 5YR5/8 明赤褐色	良	内外面ともに 5YR5/8 明赤褐色	口縁部内面・胴部外面に赤色塗彩

第 43 表　36 号土坑遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式	土師器	甕	口縁部～胴部	20.0	「13.0」	–	（11.6）	内・口縁部ヨコナデ　胴部ミガキ　外・口縁部縦位ヘラミガキ　胴部ヘラミガキ　頸部に浮線文状の貼り付け文あり	小石・砂中量	良	内・外面 10YR5/4 にぶい黄褐色	

される甕形土器の口縁部～胴部破片である。土器は土坑底部に密着した状態で出土している。

時期　土坑の時期は遺物から古墳時代前期（五領式土器）である。

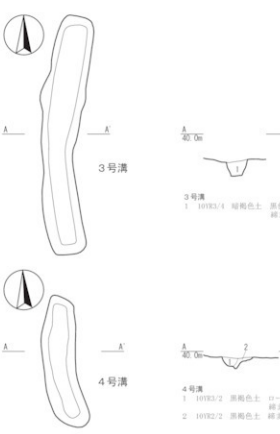
4．溝状遺構

5条の溝状遺構を検出しているが、時代や利用目的等は不明である。ここでは、周溝との関わりを推定できる3条の溝を記載した。

3号溝（第62図）

位置・重複　調査区1区（I-7グリッド）に位置する。6号周溝の東に所在する。遺構の重複はない。

形状・規模　溝は緩やかに湾曲しながら、長軸を南北にした長方形を呈する。湾曲していることから円形周溝墓と



第 62 図　3・4号溝（1：60）

の係わりを精査したが、本溝に対応する遺構は検出できなかった。規模は南北 3.78 m、東西 0.60 m、深さ 35cm を測る。

時期　遺物は出土していないが、溝の形状や覆土等から古墳時代に推定されると考えられる。

４号溝（第 62 図）

位置・重複　調査区１区（L・M－８グリッド）に位置する。他の遺構との重複はない。

形状・規模　溝は僅かに湾曲し、長軸を南北に持つ長方形を呈する。溝の断面形は鍋底形を呈する。本溝も僅かに湾曲していることから周溝墓との係わりを想定したが、対応する溝は検出できなかった。規模は南北 2.08 m、東西 0.53 m、深さ 12cm を測る。

時期　遺物は出土していないが、溝の形状や覆土等から古墳時代に推定されると考えられる。

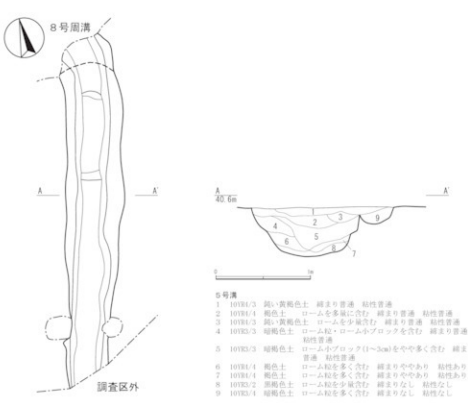
５号溝（第 63 図）

位置・重複　調査区４区（W ～ Y－24 グリッド）に位置する。北部で８号周溝と重複し、これに切られている。

形状・規模　溝は直線的に南北方向へ延びている。溝の断面形は逆台形を呈し、溝底は平坦である。規模は幅 155cm、深さ 55cm、調査した長さ約 9m を測る。本遺構と８号周溝の重複地点で、西方からの溝と重複している可能性が窺える。本遺構の北部で僅かに屈曲するらしい変化点が観察されることや土層からも本遺構より古い溝との重複を想定できる。

周溝墓を想定したが、５・６区では溝に対応する遺構は検出されていない。本遺構の性格等は明瞭ではないが、８号周溝との関係や溝の形状等を考慮すると、周溝墓の一部である可能性を否定できない。

出土遺物　遺物の出土量は少なく、総量 49 点・重量 534g であり、その内訳は縄文土器５点・重量 109g、



第 63 図　５号溝（１：100、１：40）

土師器 39 点・重量 291g、土製品 1 点・重量 76g、須恵器 1 点・重量 24g、中・近世遺物 2 点・重量 30g、石 1 点・重量 4 g である。土製品は円筒埴輪の破片である。

時期　出土遺物は少なく時期は明瞭ではないが、8 号周溝との関係では古墳時代後期以前であることは確かである。

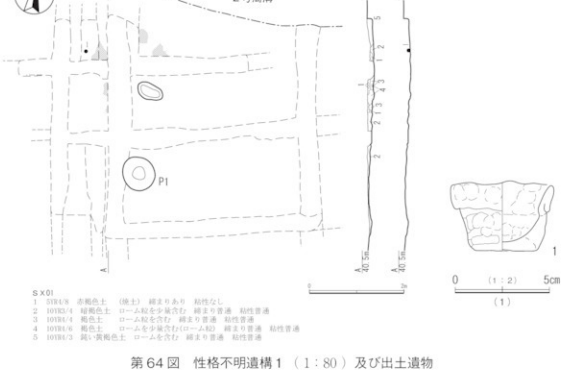
5．その他

性格不明遺構 1（第 64 図　図版 20）

本遺構は住居跡である可能性を有している遺構であるが、住居の炉跡や床面あるいは柱穴・壁周溝等が確認されないために、また住居の掘り込みが親られないこともあり、現地においては、住居跡として取り扱わなかった遺構である。

第 44 表　性格不明遺構 1 ピット観察表

ピット番号	形状		規模（cm）			備考
	平面形	断面形	長径	短径	深さ	
P1	円形	鍋底形	70	69	325	-



第 64 図　性格不明遺構 1 （1：80）及び出土遺物

第 45 表　性格不明遺構 1 遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	五領式？	土師器	小型鉢（手づねり）	-	100.0	5.6	3.6	3.5	手づねり土器	白色粒多量 砂中量	良	内・外面 10YR2/2 黒褐色	

である。

位置・重複　調査区 2 区（R・S-18・19 グリッド）に位置し、他の遺構との重複はない。

形状・規模　遺構はトレンチャーによる溝が縦横に走っており、遺構の性格を把握することは困難であった。

柱穴・炉　焼土が 5 箇所でブロック状に検出されているが、いずれも耕作等によって移動していると判断された。炉として明確に把握することはできず、また住居跡の可能性を探ったが、床や柱穴等は検出できなか

った。

出土遺物　出土遺物は土師器が29点・重量197gが出土している。図示したミニュチュアの鉢形土器は、トレンチャーの溝から出土している。他の遺物はいずれも小片である。本遺構の性格等不明であるが、住居跡である可能性を否定するものではない。

時期　本遺構の時期は明確ではないが、古墳時代前期に比定できる。　（渡辺）

第６節　奈良・平安時代の遺構と遺物

１．土坑

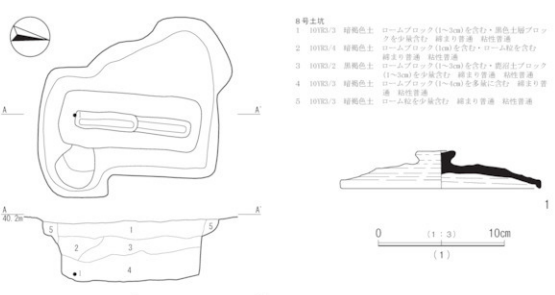
34基の土坑が確認されているが、出土遺物等が少なく時代を推定する土坑は少ない。奈良・平安時代の範疇にはいる土坑は８号土坑のみである。

８号土坑（第65図　図版10・21）

位置・重複　土坑は調査区１区（K・L－10・11）に位置する。土坑と他の遺構の重複はない。

形状・規模　平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈し、土坑底面中央部に幅28cm、長さ184cm、深さ約15cmの溝を掘り込んでいる。断面形は箱形を呈し、底面は溝を除き、平坦である。土坑の規模は、長径2.86m、短径2.14m、深さ114.9cmを測る。土坑の上部は、埋める時に崩したものかあるいは何らかの撹乱によるものか不明であるが、不規則に変形している。

出土遺物　出土遺物は総数で46点・重量445gを量り。内訳は土師器３点・重量43g、須恵器39点・重量268g、土製品２点・重量126g、陶器２点・重量８gである。底部溝の南側から須恵器蓋が出土している。蓋



第65図　８号土坑（１：60）及び出土遺物

第46表　８号土坑遺物観察表　　（ ）内残存値、「 」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	９～10世紀	須恵器	蓋	天井部	40	「16.0」	－	3.0	内・口縁ナデ（ロクロ）　外・口縁部ナデ　天井部回転ヘラ削り　摘　直径3.2cm　高さ1cm　形　宝珠	石英・雲母多量 10YR4/1 褐灰色	良	内・外面 10YR7/1 灰白色	

は1/2破片が1点出土している。

本土坑はその形状から埋葬施設である可能性もある。

時期　土坑の時期は最下層から出土した須恵器蓋から9～10世紀に構築されたものと推定している。

第7節　中・近世の遺構と遺物

1．土坑

明らかに中・近世の土坑は少ない。遺物等の出土が少なく、時期の判断は困難であるが、中・近世の土坑と思われる遺構を記載した。

2号土坑（第66図　図版10）

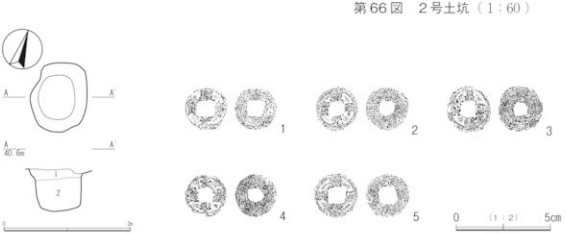
位置・重複　調査区1区(M-14グリッド)に位置し、3号住居跡と重複してこれを切っている。

形状・規模　土坑は3号住居跡の床面上に、幅30cm、高さ14cmの凸帯を円形に巡らし、住居の床面を皿状に14cmほど掘り下げている。凸帯には粘土を一部に用いている。規模は長径1.71m、短径1.68mを測り、深さは44.2cmである。本土坑の使用目的は不明である。

出土遺物　土師器25点・重量177gが出土してい

2号土坑
1　10YR8/2　灰白色土　粘土塊　締まりあり　粘性強い
2　10YR2/3　暗褐色土　ローム粒を少量含む　締まり普通　粘性なし
3　10YR4/3　黒い黄褐色土　地土ブロック(1cm)・ローム粒・粘土粒を含む締まり普通　粘性普通
4　10YR3/4　暗褐色土塊　ローム粒をやや多く含む　締まり普通　粘性普通
5　10YR4/4　褐色土　黒いローム土粒を多く含む　締まりややあり　粘性ややあり
6　10YR3/3　暗褐色土　締まりあり　粘性あり
7　10YR4/3　黒い黄褐色土　ローム粒が多く、粒土粒を多く含む　締まりやあり　粘性やあり
8　10YR4/4　褐色土　黒いローム粒を含む　締まりあり　粘性あり

第66図　2号土坑（1：60）



3号土坑
1　7.5YR4/6　褐色土　ローム小ブロックを含む　締まり強い　粘性あり
2　7.5YR4/6　褐色土　ローム小ブロック(10～50mm)を多量に含む　締まりなし　粘性なし

第67図　3号土坑（1：60）及び出土遺物

第47表　3号土坑遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底部径(cm)	高さ(cm)	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1		銅製品	銭貨	－	－	2.3	穴径0.7	－	咸平元寶（北宋銭 初鋳年998）				
2		銅製品	銭貨	－	－	2.4	穴径0.6	－	咸平元寶（北宋銭 初鋳年998）				
3		銅製品	銭貨	－	－	2.4	穴径0.7	－	不明				
4		銅製品	銭貨	－	－	2.3	穴径0.7	－	太平通宝（梁銭 初鋳年1021）				
5		銅製品	銭貨	－	－	2.4	穴径0.9	－	不明				

る。いずれも小片であり、本遺構に伴うものではない。
時期　粘土を使用して、周囲に凸帯を巡らすなどの土坑の形状から、中・近世の範疇に入るものと考えられる。

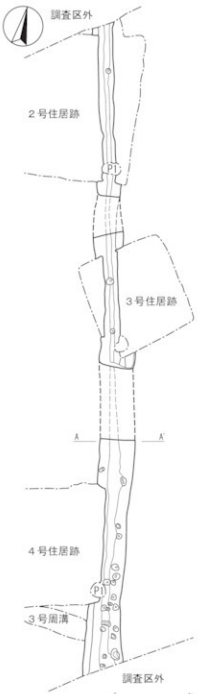
3号土坑（第67図　図版10）
位置・重複　土坑は、調査区2区（J－15グリッド）に位置し、2号住居跡と1号溝と重複し、2号住居跡を切り、1号溝に切られている。
形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形は筒形である。規模は長径1.08m、短径0.88m、深さ73.2cmを測る。
出土遺物　六道銭が土坑の覆土下層から5枚出土している。六道銭は布に巻かれていたようで、布片が密着していた。腐食が激しく銭貨の銘を判読できたものは3枚である。判読できた銭貨は「太平通宝」（北宋銭）1枚と「咸平元寶」（北宋銭）2枚、不明2枚である。出土遺物から土坑は中・近世の埋葬施設であろう。
時期　土坑の時期は、江戸時代初期であると推定される。

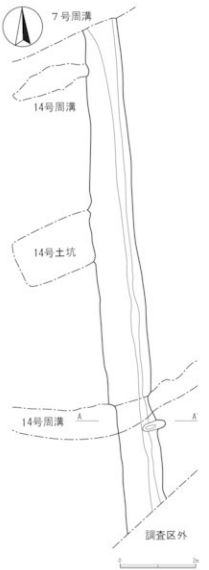
2．溝
溝は2条を記載する。

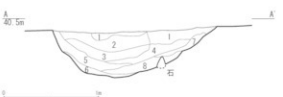
1号溝（第68図）
位置・重複　調査区2区（I～R－14・15グリッド）に位置する。3号周溝と2・3・4住居跡と重複し、これらの遺構を全て切っている。
形状・規模　溝は、直線的に南北方向へ伸びており、調査区を縦断している。規模は幅1.58～1.96m、深さ52.4～57.7cmを測る。溝の断面形は逆台形を呈し、溝底は平坦である。溝の覆土は非常に硬く締まった層が観察され、溝を一次通路として使用していた可能性がある。
出土遺物　溝に伴う遺物は出土していない。
時期　時期は不明であるが、中・近世の地境に利用された溝と思われる。

2号溝（第68図）
位置・重複　調査区1区（G～J－4グリッド）に位置する。7・14号周溝と重複し切っている。
形状・規模　溝は直線的に南北方向へ延びており、調査区を縦断している。溝の形状は断面形が鍋底形を呈し、溝底は多少の起伏が観察される。規模は幅0.93～1.2m、深さ24cmを測る。溝は直線的に延びていることから、地境に利用された溝である。
出土遺物　溝に伴う遺物は出土していない。
時期　時期は不明であるが、中・近世の地境に利用された溝と思われる。

3．遺物
中・近世の遺物は第70図に示したとおりである。須恵質陶器、灰釉陶器、銭貨等である。いずれも遺構の覆土上層や表土から出土したものである。出土遺物の内訳は、磁器68点・重量363g、陶器187点・重量1,579g、中世の石製品5点・重量158gである。特記すべきことは、8号周溝の最上層から出土した須恵質陶器と磁器である。これらの遺物は、周溝の2箇所に各々が集中して出土している。陶器は3～4個体の大甕である。磁器は小片が多く図示できるものはなかった。







1号溝

1	10YR4/2	灰黄褐色土	耕作土　締まりなし　粘性なし
2	10YR3/2	黒褐色土	非常に固く締まっている　締まり強い　粘性普通
3	10YR3/3	暗褐色土	非常に固く締まっている　締まり強い　粘性普通
4	10YR3/4	暗褐色土	非常に固く締まっている　締まり強い　粘性普通
5	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒を多く含む　締まりが強い固い層　締まり強い 粘性普通
6	10YR4/4	褐色土	固いロームを含む　締まり強い　粘性普通
7	10YR3/6	黄褐色土	ロームを主体とする　締まり強い　粘性あり
8	10YR4/3	黄い黄褐色土	黄いロームを多量に含む　締まり普通　粘性普通

2号溝

1	10YR3/3	暗褐色土	締まり普通　粘性普通
2	10YR3/1	黒褐色土	ローム土・暗褐色土を少量含む　締まり普通 粘性普通

第68図　1（1：200、1：40）・2号溝（1：100、1：40）

第８節　その他の遺構

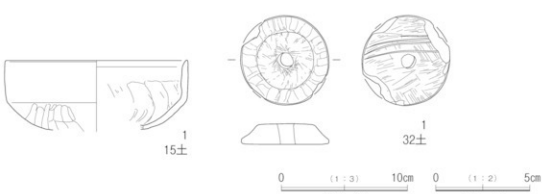
ここに記載する遺構は、時代・遺構の使用目的等が不明のものである。調査区６区において多数のピットを確認したが、柱列として使用した痕跡は観られなかった。一覧表として提示する。　（渡辺）

第 48 表　土坑一覧

遺構番号	位置	形状		重複	長軸(m)	短軸(m)	深さ		長軸方向	備考
		平面形	断面形				遺構確認標高	深さ(m)		
SK04	J-8・9	方形	鍋底形		4.58	3.20	39.852	36.4	N-9-W	不明
SK05	J・K-11	長方形	鍋底形		1.60	0.69	40.162	27.8	N-17-W	不明
SK06	J-10	長方形	箱形		2.14	1.04	39.946	36.9	N-89-W	不明
SK09	H・I-6	円形	鍋底形		1.14	0.98	39.492	17.0	N-2-W	不明
SK10	J・K-4・5	長方形	箱形		2.47	1.18	39.349	83.0	N-6-E	不明
SK11	J-6	長方形	箱形	T字状に重複	1.23 1.85	1.08 1.18	39.522	5.4 17.1	N-10-E N-80-E	上段新 下段旧　不明
SK12	I-6	長方形	箱形	十字に重複	1.25 2.34	0.56 0.62	39.485	38.2 28.2	N-22-W N-2-W	上段新 下段旧　不明
SK13	G-6	長方形	鍋底形	SM07を切る	(1.14)	0.84	39.305	53.5	N-9-W	不明
SK14	H・I-4	長方形	箱形	SD01に切られる	(2.18)	1.38	39.138	20.1	N-68-E	不明
SK15	K・L-9・10	長方形	箱形		2.94	0.70	40.052	29.7	N-64-W	不明
SK17	N-21・22	方形	鍋底形		(2.24)	(1.60)	40.477	21.8	?	不明
SK18	V-21	長方形	筒型		3.12	2.18	40.518	75.8	N-88-E	不明
SK19	V-20	円形	鍋底形		1.54	0.74	40.457	23.6	N-10-W	不明
SK20	W-23	楕円形	鍋底形		1.08	0.51	40.482	32.9	N-79-E	不明
SK21	W-23	楕円形	鍋底形		1.18	0.81	40.506	15.0	N-10-W	不明
SK22	W-23	不整形	鍋底形		0.87	0.72	40.485	44.1	N-31-E	不明
SK23	X-23	円形	鍋底形		0.40	0.30	40.373	14.2	?	不明
SK25	F-1・2	方形	箱形		(1.20)	0.68	38.687	36.7	N-13-W	不明
SK27	T-23	円形	筒型		0.55	0.47	40.389	62.6	N-88-E	不明
SK28	T-22	楕円形	鍋底形		1.47	1.13	40.323	23.7	N-22-E	不明
SK29	E-1・2	方形	箱形		1.22	0.83	38.591	59.0	N-16-W	不明
SK30	K・L-6	方形	箱形		1.12	0.76	39.612	47.9	N-4-W	不明
SK31	B-3	方形	箱形		2.38	1.32	38.541	44.7	N-10-W	不明
SK32	R・S-30	長方形	箱形		2.54	0.97	40.415	42.5	N-43-E	不明
SK33	U-28	長方形	箱形		(2.20)	1.03	40.528	38.0	N-77-E	不明
SK34	T-29	円形	鍋底形		0.90	0.60	40.415	18.7	N-8-E	不明
SK35	L-7	長方形	箱形		2.51	1.15	39.869	53.3	N-52-W	不明

第 49 表　ピット一覧

遺構番号	位置	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ	
					遺構確認標高	深さ(m)
P01	Bb－34	楕円形	63.0	51.0	40.475	40.5
P02	Bb－35	長方形	79.0	43.0	40.293	45.0
P03	Bb－35	円形	45.0	47.0	40.247	34.2
P04	Bb－35	円形	42.0	40.0	40.247	38.1
P05	Bb－35	円形	41.0	38.0	40.247	22.0
P06	Cc－35	楕円形	54.0	48.0	40.276	52.1
P07	Cc－35	楕円形	37.0	43.0	40.276	15.7
P08	Cc－35	円形	55.0	63.0	40.368	38.4
P09	Cc－34	隅丸方形	49.0	53.0	40.414	44.4
P10	Cc－34	不整方形	89.0	84.0	40.437	49.7
P11	Cc－32	不整形	44.0	43.0	40.560	51.5
P12	Bb－31	円形	101.0	61.0	40.505	40.4
P13	X－24	楕円形	43.0	42.0	40.514	15.5
P14	X－24	楕円形	43.0	28.0	40.514	15.5
P15	X－24	楕円形	50.0	41.0	40.425	22.5
P16	W－23	楕円形	40.0	31.0	40.506	19.9
P17	W－24	楕円形	52.0	68.0	40.454	18.9
P18	V－23	楕円形	72.0	65.0	40.369	19.7
P19	V－22	方形	40.0	39.0	40.487	68.8



第 69 図　15・32 号土坑出土遺物

第 50 表　15 号土坑遺物観察表

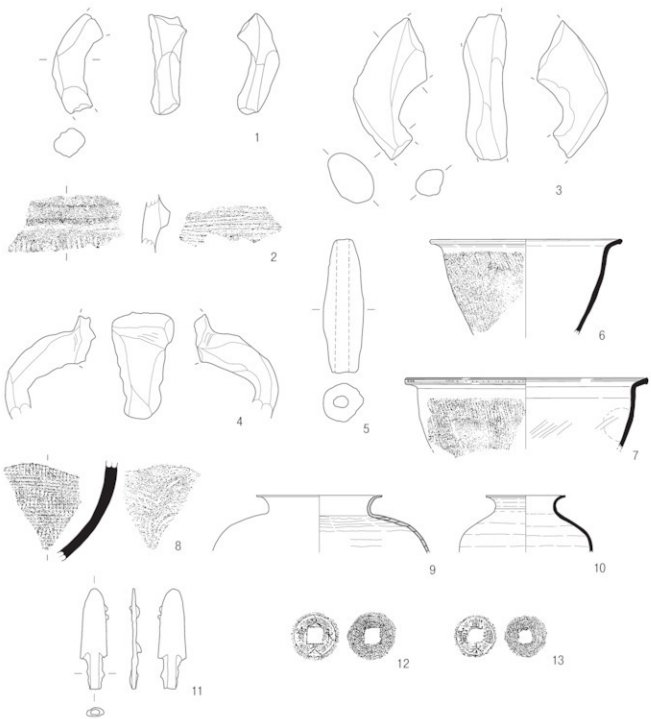
（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底部径(cm)	高さ(cm)	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	鬼高式	土師器	坏	－	25.0	「14.4」	－	5.8	口縁部　内外面ヨコナデ　身部内面ヘラミガキ　外面縦位ヘラケズリ	石英少量	良	10R4/8 赤色	外面身部は整形がやや雑

第 51 表　32 号土坑遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	時代	種別	器種	部位	残存率(%)	口径(cm)	底部径(cm)	高さ(cm)	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1		石製品	紡錘車	－	100.0	上部径 3.1 孔径 0.8	4.7	1.1	上面・研磨　側面・縦位の擦痕。縁部鋭角　底面・縦状痕顕著にある				材質：滑石



第 70 図　その他の出土遺物

第 52 表　その他の出土遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	出土位置	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	2 区カクラン		土製品	形象埴輪	腕部	5.0	（1.0）	－	（2.9）	表面ヘラ削り→ナデ	石英中量 雲母微量	良	5YR4/8 赤褐色	
2	SD05 覆土上層		埴輪	円筒埴輪	不明	5.0	（径 2.6）	－	（4.1）	内・横位クシ　外・縦位のクシ（6 ～ 7 本）	石英・砂中量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・5YR5/6 明赤褐色	
3	1 区表採		土製品	形象埴輪の一部	腕部？	70.0	（径 1.7 ～ 1.1）	－	（3.7）	ヘラ削り→ナデ	雲母・石英中量	良	2.5YR5/6 明赤褐色	
4	2 区カクラン		土製品	形象埴輪の一部	腕部？	70.0	（径 0.9 ～ 1.7）	－	（2.7）	ヘラ削り→ナデ	雲母多量 石英中量	良	2.5YR5/6 明赤褐色	
5	2 区表採		土製品	管玉	－	100.0	全長 3.5 孔径 0.3	径 1.7	－					
6	SM07 覆土上層	9 ～ 10 世紀	須恵質陶器	瓶	口縁部 ～ 底部	30.0	「30.6」	「15.0」	（16.0）	内・口縁部ヨコナデ ヘラ調整　胴部ヘラ削り→ナデ　外・縦位のタタキ目	石英少量	良	内・外面 10YR5/1 褐灰色	孔は 3 孔で構成（焼成前）
7	SM08 覆土上層	9 ～ 10 世紀	須恵質陶器	甕	口縁部	20.0	「38.5」	－	（15.1）	内・口縁部ヨコナデ 胴部ナデ　外・口縁部ヨコナデ　胴部縦位のタタキ	石英・雲母中量 砂中量	良	内外面 10YR7/1 灰白色	
8	SM08 覆土上層	中・近世	須恵質陶器	甕	胴部	20.0	不明	－	（0.9）	内・青海波　外・縦横カキ目	石英中量	良	内・外面とも 10YR5/1 褐灰色	
9	1 区表採	中・近世	陶質土器	大甕	口縁部	30.0	「20.5」 胴部最大径「34.6」	－	（9.5）	内・灰釉（緑釉）・黒色釉（鉄釉？）　外・黒色釉（鉄釉？）・口縁部下半灰釉（緑釉）	陶土か？	良	内・5Y4/4 暗オリーブ 5Y3/1 オリーブ黒	外・7.5YR2/2 黒褐色
10	SM08 覆土上層	中・近世	須恵質陶器	甕	口縁部 ～胴部上半	25.0	「21.0」 （胴部最大径推定「35.5」	－	（15.0）	内・口縁部　灰釉　外・胴部　灰釉が粒状にある	10YR6/2 灰黄褐色	良	内・25YR7/2 灰黄褐色	
11	1 区表採		鉄製品	鉄鏃	ナカゴ欠損	90.0	全長（5.4）	身幅 1.4 身長 3.5	－	逆有				
12	SM03 覆土上層		銅製品	銭貨	－	100.0	径 2.6	孔径 0.7	－	文久永寶（初鋳　1861 ～）				
13	SM08 覆土上層		銅製品	銭貨	－	100.0	径 2.3	孔径 0.7	－	寛永通宝（古寛永　初鋳 1741 ～）				

第 9 節　試掘調査

試掘調査は平成 21 年（2009）10 月 28 日から同年 11 月 4 日まで行われた。調査予定範囲に幅 1m ～ 2.2 mのトレンチを 21 箇所設定し、試掘調査面積は 784.91 ㎡である。

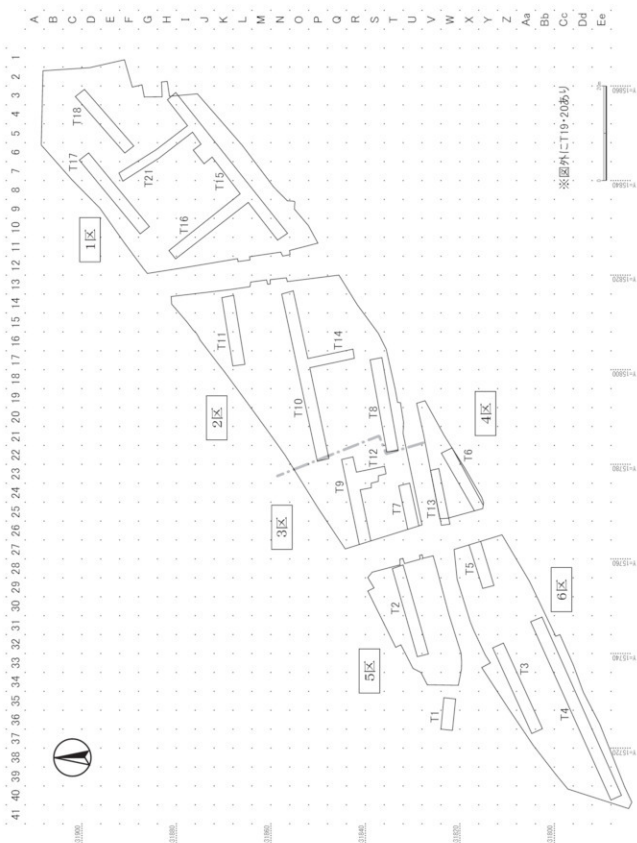
試掘調査の結果、住居跡 8 軒、周溝 5 基、土坑 2 基、溝 6 条が確認されている。

出土遺物は、総数で 90 点・重量 1,364g であり、その内訳は縄文土器 4 点・重量 98g、石器 6 点・重量 14g、弥生土器 4 点・重量 191g、土師器 68 点・重量 974g、須恵器 1 点・重量 7g、土製品 1 点・重量 30g、陶器 1 点・重量 5g、鉄製品 2 点・重量 31 g である。出土遺物は細片が多く図示できるものは 6 点である。

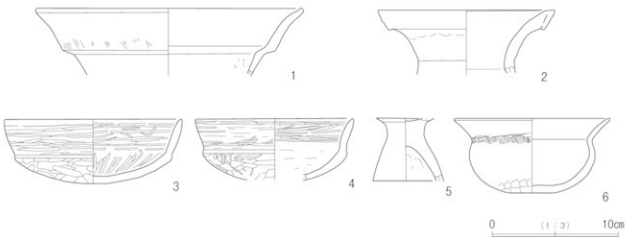
図示した遺物は弥生時代の後期に比定される壺形土器の口縁部破片、古墳時代後期前葉の坏形土器、古墳時代前期の小型壺形土器と時期不明の高坏形土器の脚部破片である。表採遺物の石器は図示しなかった。石器はいずれも剥片である。石材はチャート 4 点、黒曜石 2 点である。

第 72 図 1 はトレンチ 12 の住居跡からの出土で、これは本調査時の 8 号住居跡に相当する。8 号住居跡の時期と遺物の時期が一致することから、8 号住居跡に伴うものと考えられる。同図 2 はトレンチ 11 の住居跡からの出土で、これは本調査時の 2 号住居跡に相当する。2 号住居跡の覆土上層からの出土と思われることから、本住居跡に伴う可能性は低いと考えられる。同図 3・4 はトレンチ 15 の溝からの出土で、これは本調査時の 14 号周溝に相当する。14 号溝の覆土上層からの出土と思われることから、本遺構に伴う可能性は

低いと考えられる。同図6はトレンチ14の住居跡からの出土で、これは本調査時の5号住居跡に相当する。5号住居跡の時期と遺物の時期が一致することから、5号住居跡に伴うものと考えられる。



第71図　試掘調査トレンチ配置図（1：800）



第 72 図　試掘調査出土遺物

第 53 表　試掘調査遺物観察表

（）内残存値、「」内推定値

図版番号	出土位置	時代	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底部径（cm）	高さ（cm）	特徴（調整痕等）	胎土	焼成	色調	備考
1	T－12	弥生町～前野町	弥生土器	壺	口縁部	20.0	「21.3」	－	(5.7)	内・横位ヘラミガキ　外・クシ→縦位ヘラミガキ	小石微量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・5YR4/8 赤褐色	内・外面赤色塗彩
2	T－11	弥生町～前野町	弥生土器	壺	口縁部	20.0	「14.0」	－	(5.3)	内・横位ミガキ 外・口縁部横位ミガキ　縦位の貼付紐（結状）	白色粒・小石微量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・10YR6/6 明黄褐色	内・口唇部下に赤色塗彩　外・口唇部に赤色塗彩折り返し口縁
3	T－15	和泉式	土師器	坏	口縁部～身部	50.0	13.6	－	5.3	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部ヘラミガキ　外・口縁部横位ヘラミガキ　身部ヘラ削り	白色粒微量	良	内・外 5YR5/6 明赤褐色	外面身部に黒斑あり
4	T－15	和泉式	土師器	坏	口縁部～身部	90.0	13.8	－	5.1	内・口縁部横位ヘラミガキ　身部ミガキ　外・口縁部横位ヘラミガキ　身部ヘラ削り	白色粒・石英微量	良	内・5YR4/6 赤褐色 外・5YR3/6 暗赤褐色　身部に黒斑あり	
5	表採	不明	土師器	高坏	脚部	30.0	不明	－	(5.7)	内外面ともに磨耗するため調整痕明瞭ではない	小石多量	やや良	内・7.5YR4/1 褐灰色 外・7.5YR5/6 明褐色	
6	T－14	五領式	土師器	小型壺	口縁部～部以頂	80.0	「12.4」	3.3	5.9	内・口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ削り→ナデ　外・口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り→ミガキ　頂部クシ調整	白色粒・石英少量	良	内・7.5YR2/1 黒色 外・5YR4/6 赤褐色	

第３章　自然科学分析

第１節　土壌分析

南台遺跡７号周溝出土壷内土のリン・カルシウム分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

筑西市に所在する南台遺跡は、西方を南に流れる小貝川と五行川の合流点から東に約 1km の台地上に位置し、弥生時代から古墳時代前期の住居跡、古墳時代後期の古墳周溝、円形周溝墓などが検出されている。７号周溝で検出された壷内の土について、蛍光Ｘ線分析によるリン・カルシウム分析を行い、人骨が存在した可能性を検討した。

2. 試料と方法

試料は、７号周溝で検出された壷内の土である（試料№１）。また、比較試料として 16 号土坑より出土した壷内の土も同時に分析した（試料№２）。第 54 表に分析試料の一覧を示す。

第 54 表　分析試料

試料	遺構	備考
№１	７号周溝	壷内土
№２	16 号土坑	壷内土（比較試料）

分析は、藤根ほか(2008)の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析によりリン、カルシウムを多く含む箇所を直接的に検出できるという利点がある。測定試料は、乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で 20t・１分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム（Rh）ターゲット、Ｘ線ビーム径が 100 μｍまたは 10 μｍ、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い元素の分布図を得て、その結果を基にリン（P）のマッピング図の輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。また、ポイントを選ぶ際には、ジルコニウム（Zr）のＬα線がリンのＫα線のピークに近いため、ジルコニウム（元素マッピングはＫα線で測定）の輝度の高い箇所は避けるよう留意した。測定条件は、元素マッピング分析では 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μｍ、測定時間 2000s を５回走査、パルス処理時間 P3 に、ポイント分析では 50kV、0.10 ～ 0.26mA（自動設定）、ビーム径 100 μｍ、測定時間 500s、パルス処理時間 P4 に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

3. 結果

各試料の元素マッピング図およびポイント分析の箇所５点を第 73 図に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した半定量値を第 55 表に示す。分析の結果、試料№１はリン（P_2O_5）が 0.10 ～ 0.59%、カルシウム（CaO）が 1.78 ～ 13.32%、試料№２はリン（P_2O_5）が 0.09 ～ 0.79%、カルシウム（CaO）が 0.73 ～ 3.52% の値を示した。

第 55 表　半定量分析結果（mass%）

試料	ポイント	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
No.1	a	0.00	17.03	66.87	0.10	0.61	0.69	9.31	0.55	0.14	4.56	0.01	0.08	0.01	0.04
	b	0.00	25.08	48.01	0.59	1.03	1.03	1.78	1.69	0.43	20.19	0.02	0.05	0.02	0.08
	c	1.49	21.48	33.70	0.13	0.91	0.57	13.32	1.93	0.76	25.40	0.04	0.13	0.06	0.09
	d	0.00	24.28	46.70	0.34	0.97	1.06	2.58	1.66	0.66	21.60	0.01	0.04	0.03	0.07
	e	0.73	21.75	51.60	0.44	1.06	1.02	1.84	1.53	0.57	19.28	0.03	0.04	0.02	0.08
No.2	a	0.00	23.98	50.61	0.32	1.34	1.31	3.52	1.51	0.40	16.83	0.03	0.06	0.03	0.06
	b	0.00	19.14	56.48	0.34	1.21	1.01	0.78	1.60	0.73	18.57	0.02	0.04	0.02	0.06
	c	0.64	22.40	48.90	0.27	1.45	1.06	0.73	1.80	0.48	21.96	0.03	0.03	0.02	0.23
	d	0.65	20.53	50.90	0.79	1.24	1.16	1.03	1.64	0.80	21.10	0.03	0.03	0.02	0.07
	e	0.64	21.99	50.17	0.09	1.00	1.05	1.41	1.77	0.35	21.37	0.02	0.05	0.02	0.06

4. 考察

ヒトを含む動物の骨や歯は、ハイドロキシアパタイト $Ca_5(PO_4)_3OH$ が主成分であり、すなわち蛍光 X 線分析ではリン（P）とカルシウム（Ca）が共に高く検出される。ただし、鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素である点に注意を要する。また、貝殻はもちろん、木材なども蛍光 X 線分析では高いカルシウム含有量を示す。カルシウムのみの検出では骨由来であるか判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、本来は骨が存在していたが、堆積・埋没過程で分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない可能性や、骨からビビアナイト $Fe_3(PO_4)_2 \cdot 8H_2O$ が析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという可能性もある。

分析の結果、試料№ 1 はリンが最大 0.59% と少なく、また比較試料である試料№ 2 の同最大 0.79% より下回っており、リンが明らかに多く含まれる物質は検出されなかった。

5. おわりに

7 号周溝出土壺内土について蛍光 X 線分析を行った結果、リンを明らかに多く含む箇所は見出せなかった。以上、自然科学的見地から、骨・歯などの存在していた可能性を検討したものの、骨・歯の存在を積極的に肯定できるデータは得られなかった。遺構の性格については、出土状況や類例など考古学的所見と総合して判断することが望まれる。

引用・参考文献

藤根久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析．日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集，108-109.

第2節　種実分析

南台遺跡出土台付甕内の炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

茨城県筑西市に位置する南台遺跡は、小貝川と五行川の合流点から東に約 1km の標高約 40m の台地上に立地する、弥生時代と古墳時代前期、古墳時代後期を主体とする集落遺跡である。ここでは古墳時代前期の竪穴住居跡から出土した台付甕の中から検出された炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

2. 試料と方法

試料は古墳時代前期（4 世紀末～ 5 世紀初頭）の竪穴住居跡である 3 号住居跡（SI-03）から出土した台付甕の中から検出された炭化種実である。炭化種実の一部は塊状であった。甕内からは炭化材片も多数出土した。炭化種実の取り上げ、抽出は東京航業研究所によって行われた。ただし、分析試料は甕内から検出された炭化種実の一部で、全量ではない。

同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

同定の結果、得られた炭化種実は、草本植物で栽培植物のイネ炭化種子のみであった。また部分的に数 10 粒単位で長軸 1 ～ 3 cm程度の塊状が約 40 点観察できたが、塊にはイネ炭化種子のみが含まれていた。特に潰れた面などは観察できなかった。イネの炭化種子塊は複数みられ、全体的に脆かった。塊の大きさは最大で、長軸 26.4mm、短軸 16.6mm、厚さ 12.5mm であった。同定した試料は全体の一部分である。この一部分の復元個体数を完形の種子の重さと全体の重量（8.8g）から求めると、約 1800 点であった。

以下に産出した炭化種実の記載と、写真図版を掲載し、同定の根拠とする。

(1) イネ　Oryza sativa L.　炭化種子　イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝があるが、本試料ではほとんど観察できない。計測可能な 11 点の大きさは、長さ 3.5 ～ 4.7（平均 4.2）mm、幅 2.2 ～ 2.9（平均 2.6）mm 程度。写真の炭化種子塊は長軸 24.2mm、短軸 15.2mm、厚さ 11.8mm。

4. 考察

古墳時代前期の竪穴住居跡から出土した台付甕の中から検出された炭化種実と炭化種実塊はイネ種子であった。籾は含まれておらず、胚が欠落していたため、脱穀後、炭化したと推定される。種子は玄米の状態でみえる縦溝がほとんど観察されなかったため、水分によって膨張したか、精米されて見えにくくなった可能性がある。一部は塊を成しており、炊かれて糊着した結果、塊となった可能性が高い。

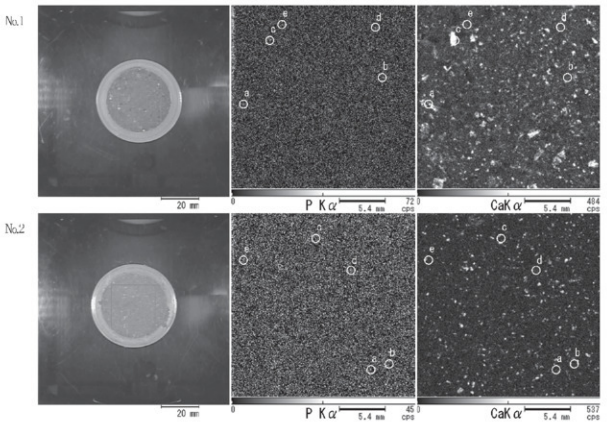
これまで古墳時代の調理後の米の出土例としては、神奈川県横浜市北川表の上遺跡の古墳時代後期の住居跡から炭化したおにぎりが容器に入って出土している（佐々木ほか，2009）。炊いた米が炭化して埋没した場合、容器に入れられた米やおにぎりとして握られた米はその表面に平坦に潰れた粒が複数みられ、粒の方向は不揃いで糊化して付着している様相が認められるが、本遺跡では、おにぎりにみられるような平坦な面

が形成されていないことや糊着度合いが低く、調理後のご飯が特に加工されることなく、台付甕に入っていたと考えられる。

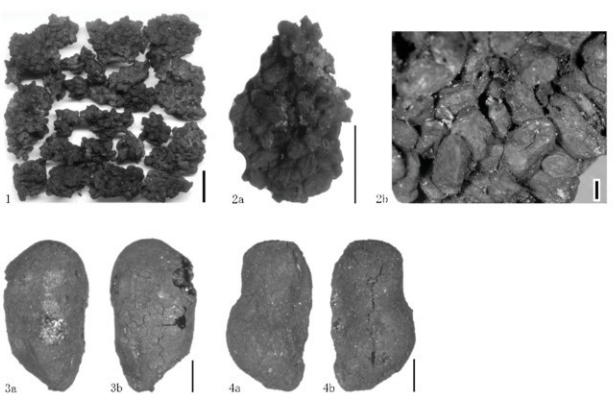
古墳時代の米の調理法はこれまで甕に付着していた煤などから推定されてきたが、炭化米自体で検討された事例は非常に少ない。同住居から出土した調理に使用された土器と合わせて検討することにより、当時の米の調理方法が具体的に検討できると期待される。

引用文献

佐々木由香・パンダリ スダルシャン・米田恭子・村田健太郎・小石川　篤（2009）北川表の上遺跡出土炭化種実同定および炭化種実塊のX線CT画像解析による検討．横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告42　北川表の上遺跡」:423-435．横浜市教育委員会．



第 73 図　プレス試料および元素マッピング図



スケール　1, 2a:10mm, 2b, 3, 4:1mm

1, 2.イネ炭化種子塊(SI03, NO.1)、3, 4.イネ炭化種子(SI03, NO.1)

第 74 図　南台遺跡から出土した炭化種実

第４章　総括

今回の調査は、南北に伸びる台地上に広がる南台遺跡を、東西に縦断するように遺跡の一部を調査した。調査の概要は前述したとおりである。調査の成果を踏まえ、南台遺跡の問題点を記載してまとめにしたい。

第１節　住居跡について

住居跡は20軒を調査した。住居跡の時期は、弥生時代終末期から古墳時代前期に属する。弥生時代の住居跡が２軒、古墳時代の住居跡が15軒、時期不明であるが古墳時代の範疇に入ると思われる住居跡が３軒である。古墳時代前期に属する住居跡が多く検出されている。ここでは古墳時代の集落について記述したい。

古墳時代前期の住居跡はその規模や出土遺物の多さなどから、２タイプに分けることが可能であろう。まず、住居跡の規模を基準にすると、住居跡の長軸と短軸の長さがいずれも6mを超え、遺構確認面からの深さも0.40～0.60mを測る大型の住居跡（Ⅰ類）である。長軸、短軸ともに6m以下で、遺構確認面からの深さも0.3m以下の住居跡(Ⅱ類)との２タイプに分けることができる。Ⅰ類は２・４・10号住居跡の３軒である。Ⅰ類の住居跡は調査区東部に所在し、時期的には古墳時代前期（五領期から和泉期）の範疇に含まれる。Ⅱ類の住居跡は調査区全般にほぼ均等に所在している。Ⅱ類の住居跡も遺物から、Ⅰ類の住居跡と同様に古墳時代前期（五領期から和泉期）に比定される。

Ⅰ類の住居は、古墳時代前期前葉（五領式土器を伴う時期・４・10号住居跡）と前期後葉（和泉式土器を伴う時期・２号住居跡）の２時期に大別できる。Ⅱ類の住居跡は弥生時代後期（８・20号住居跡）、古墳時代前期前葉（３・６・７・14号住居跡）と古墳時代前期後葉（５・13・15号住居跡）に大別され、比較的短い期間に連綿と営まれた様相が窺える。

古墳が造営された古墳時代後期に属する住居跡は、検出されていないことも今回の調査で明らかになったことである。

今回調査した住居跡の大半は、住居内覆土に焼土や炭化材が検出されていることから、焼失住居である可能性が高い。多くの焼失住居が所在する理由は不明である。多数の焼失住居を観ると古墳を造営するために移住させた可能性も考えられる。あるいは集落として移動した後に古墳を造営したものか、疑問が残る。

調査したすべての住居跡が古墳時代前期で終焉し、住民はいずれかへ散逸していると思われる。どのような理由があって住民が散逸したのか。

また特筆事項として３号住居跡から出土した台付甕の器内土から、炭化した種子が多数検出されている。種子の分析を依頼したところ、すべてが煮炊きされた米であるとの結果を受けている。古墳時代前期において、こうして一般集落においても米の炊飯を知る証左として貴重な資料を得ることが出来た。

（渡辺）

第２節　周溝について

周溝は、造営された時期と形状の差異から、２タイプ（Ａ類・Ｂ類）に分かれる。Ａ類は溝幅が狭く、規模も小さく深さも浅い周溝である。平面形は円形であり、断面形は「U」字形や箱形である。Ｂ類は溝幅も広く、規模も大きく、円墳の周溝に多く観られる形状を呈している。今回の調査では、基本的には同様の目的で掘り込まれていると思われるが、形状が異なる溝が観察されている。

Ａ類の周溝　Ａ類の周溝は７基を確認している。周溝の形状は、前述したようにＢ類の周溝とは明らかに

異なっている。出土遺物が少なく、時期を確定できる周溝は少ないが、遺物から推定すると、古墳時代前期に属すると思われる。明確に時期を確定できるのは、1・3・6・13号周溝である。これらの周溝は五領式土器から鬼高式土器を伴っている。周溝の時期と形状から、円形の溝を持つ周溝墓（円形周溝墓）と判断される。A類の周溝は、住居跡とB類の周溝との時間差を埋めるような時期に造営されていると考えられる。

B類の周溝　調査した7基の周溝は、その形状から2タイプ（B-1類とB-2類）に分けることができる。B-1類は平面形が円形を呈し、断面形は内壁が緩やかな傾斜をもち、外壁は直立する。B-2類は周溝の約1/2が円形、1/2が緩やかに湾曲する。断面形も平面形が円形の場所は、B-1類の周溝と同様であるが、緩やかに湾曲して直線となる場所は溝幅も狭く、溝の内外壁は直立し、断面形は「箱形」を呈する。

B-1類は2・4・9・10・11号周溝の5基である。B-1類は前述したように、円墳の周溝によく観られる形状である。

B-2類は7・8号周溝の2基である。7号周溝は、南部から北部にかけて円形を、西部から南部にかけて緩やかに湾曲した直線となる。8号周溝は、西部が市道であり調査はできなかったが、周溝の南部は7号周溝と形状が極めて類似していることから、B-2類の範疇とした。形状の変化の理由は明確ではないが、周溝を構築した時期の差なのか、不明な点が多い。

7号周溝から周溝内埋葬を想定した甕と坏形土器が出土している。甕形土器内の土を土壌分析した結果、骨や歯が存在していた積極的なデータは検出されなかった。甕形土器が正立した状態で、甕形土器周囲3方に坏・碗形土器が等間隔に配置されていた。坏形土器等の間に粉末状の「朱」が検出されている。周溝覆土に掘り方は観られなかったが、土器の出土状況等から周溝内埋葬の可能性を否定できないものと考えている。

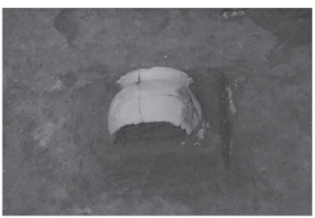
今回の調査は前述したように、広範囲に広がる南台遺跡の一部を調査したものである。南台遺跡の概要を知ることはできたものと考えている。南台遺跡の全容を把握するためには、今後の調査に委ねられることは大きいと思われる。（渡辺）

引用・参考文献

茨城県明野町教育委員会　1990　茨城県明野町埋蔵文化財報告書第3集
茨城県史編さん原始古代史部会　1974　茨城県史料（考古資料編・古墳時代）
茨城県筑西市教育委員会　2008　岩瀬戸東遺跡
金井塚良一　1976　北武蔵考古学資料図鑑
小林龍雄・安藤弘道・田尾誠敏・後藤健一・手塚直樹　2007　土器の考古学
埼玉の弥生土器観会　2007　埼玉の弥生時代　六一書房
財団法人茨城県教育財団　1999　茨城県教育財団文化財調査報告第149集「熊の山遺跡」上・下巻
玉里村立史料館　2004　霞ヶ浦の弥生土器
筑波大学歴史・人類学系　1991　古墳測量調査報告書Ⅰ
土浦市教育委員会　1999　東出・神出・中居遺跡　土浦市遺跡調査会
土曜考古第5号　1982　土曜考古研究会
中村浩・望月幹夫編　2001　「季刊考古学」土師器と須恵器
山岸良二・椙山林継　2005　方形周溝墓研究の今　雄山閣
龍善寺遺跡調査会　2006　龍善寺遺跡　土浦市教育委員会

1 号住居跡完掘（南西より）

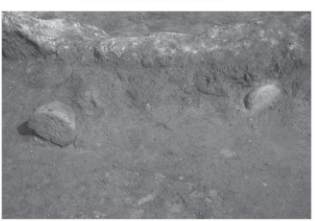
2 号住居跡遺物出土状況（1）（南より）



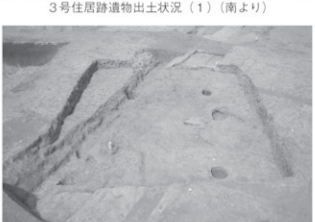
2 号住居跡遺物出土状況（2）（南より）

2 号住居跡完掘（西より）

3 号住居跡遺物出土状況（1）（南より）



3 号住居跡遺物出土状況（2）（北西より）

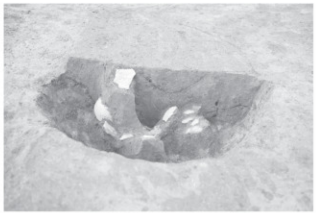


3 号住居跡完掘（南より）

4 号住居跡遺物出土状況（北より）

図版2

4号住居跡完掘（南より）



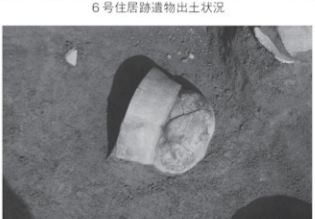
5号住居跡貯蔵穴（南より）

5号住居跡炉検出状況（西より）

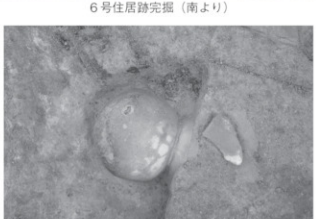
5号住居跡完掘（南より）

6号住居跡遺物出土状況

6号住居跡完掘（南より）



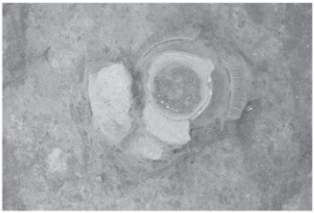
7号住居跡遺物出土状況（1）（南より）



7号住居跡遺物出土状況（2）（西より）

７号住居跡遺物出土状況（３）（南より）

７号住居跡完掘（南より）



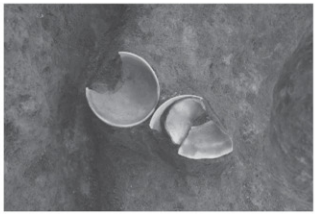
８号住居跡遺物出土状況（南より）

８号住居跡完掘（南より）

９号住居跡完掘（南より）

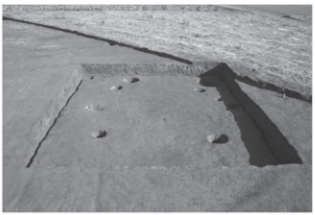
10 号住居跡遺物出土状況（１）（北より）

10 号住居跡遺物出土状況（２）



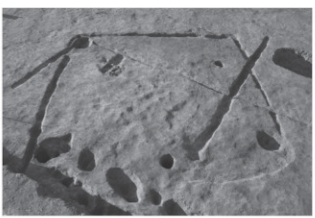
10 号住居跡遺物出土状況（３）（北より）

図版 4



10 号住居跡完掘（西より）

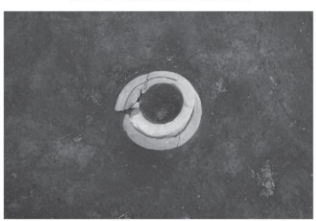
11 号住居跡完掘（南より）



12 号住居跡完掘（南より）

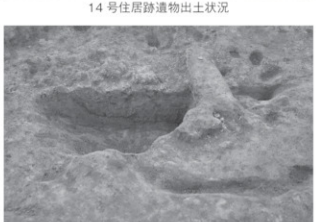
13 号住居跡貯蔵穴土器（南より）

13 号住居跡完掘（南より）



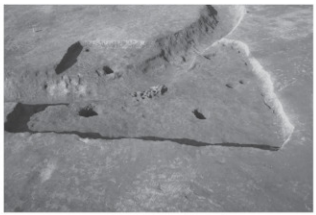
14 号住居跡遺物出土状況

14 号住居跡炉上面散布土器（南より）

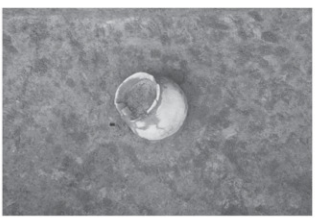


14 号住居跡炉半截（西より）

14 号住居跡完掘（南より）

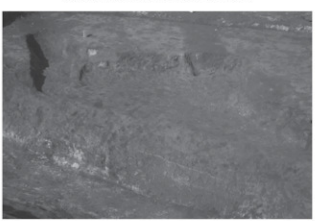


15 号住居跡完掘（東より）



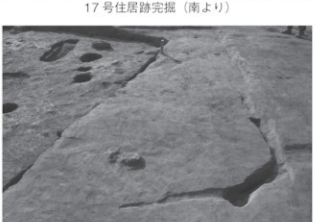
16 号住居跡遺物出土状況（西より）

16 号住居跡完掘（南より）

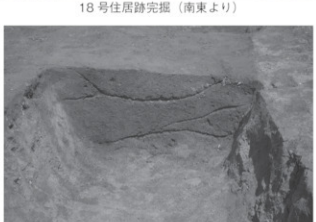


17 号住居跡完掘（南より）

18 号住居跡完掘（南東より）



20 号住居跡完掘（東より）

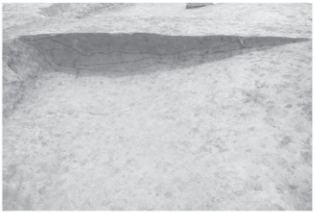


1 号周溝 SPB ～ B’ （南より）

図版6

1号周溝東部完掘（南より）

2号周溝 SPA ～ A’（南より）

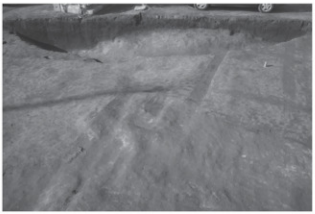


2号周溝 SPC ～ C’（南より）

2号周溝完掘（南より）

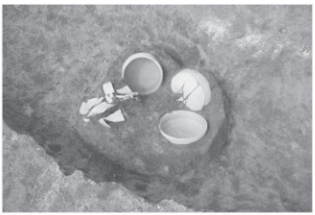
3号周溝遺物出土状況（南より）

4号周溝 SPA ～ A’（東より）



4号周溝完掘（南より）

5号周溝完掘（東より）

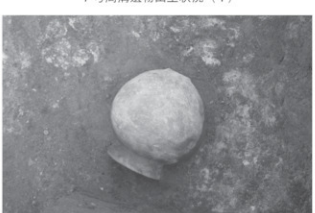


６号周溝遺物出土状況（南より）

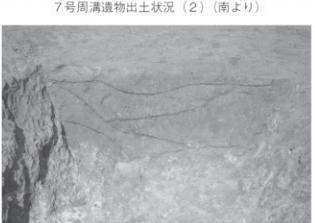
６号周溝完掘（西より）

７号周溝遺物出土状況（１）

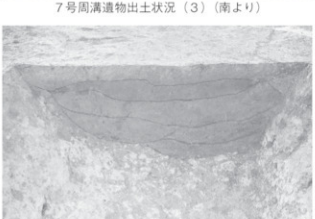
７号周溝遺物出土状況（２）（南より）



７号周溝遺物出土状況（３）（南より）



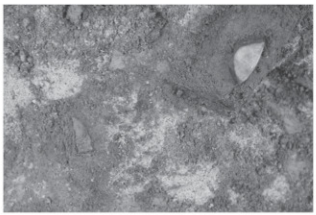
７号周溝 SPC ～ C’ （南より）



７号周溝 SPD ～ D’ （東より）

７号周溝完掘（東より）

図版８



８号周溝遺物出土状況（南より）

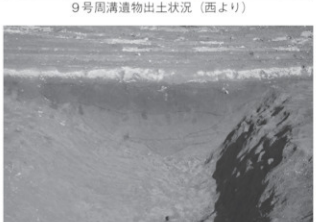
８号周溝 SPA ～ A'（北より）

８号周溝 SPC ～ C'

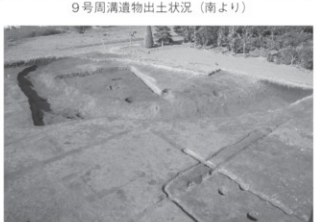
８号周溝完掘（東より）

９号周溝遺物出土状況（西より）

９号周溝遺物出土状況（南より）



９号周溝 SPA ～ A'（南より）



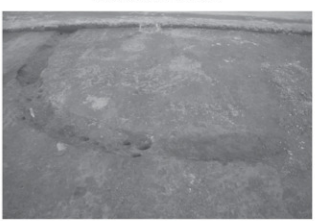
９号周溝完掘（東より）

10 号周溝 SPD ～ D' （南より）

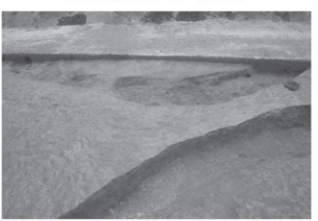
10 号周溝完掘（東より）

11 号周溝完掘（東より）

12 号周溝 SPA ～ A' （東より）



12 号周溝南部完掘（南より）

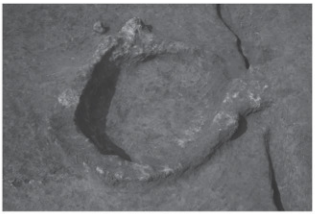


13 号周溝完掘（南東より）

14 号周溝完掘（北より）

1 号土坑完掘（南より）

図版 10



2号土坑検出状況（南より）

3号土坑完掘（南より）

8号土坑遺物出土状況

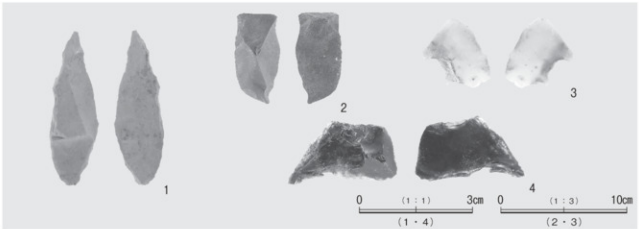
8号土坑完掘（東より）

2・3区完了（北東より）

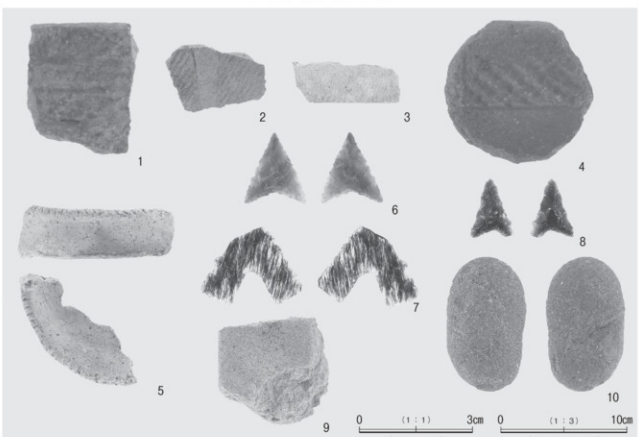
4区完了（西より）

5区完了（東より）

6区完了（東より）



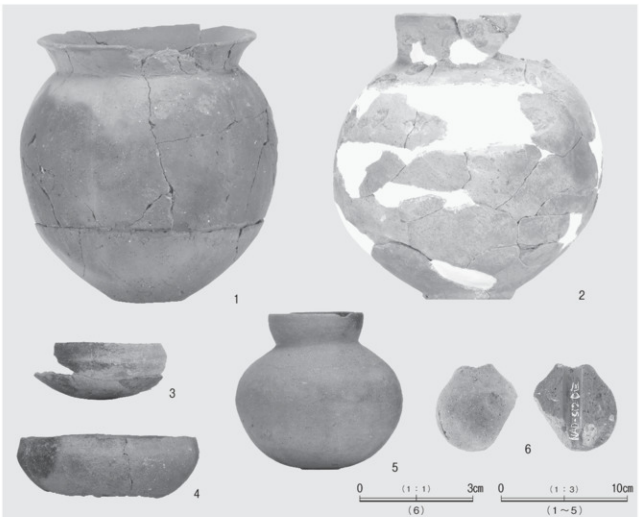
旧石器時代　出土遺物



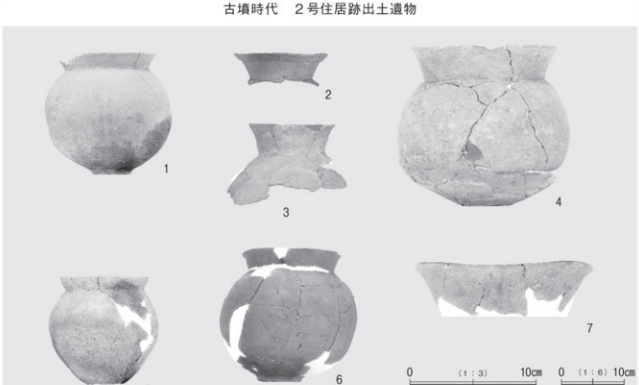
縄文時代　26号土坑出土遺物

弥生時代　8号土坑出土遺物

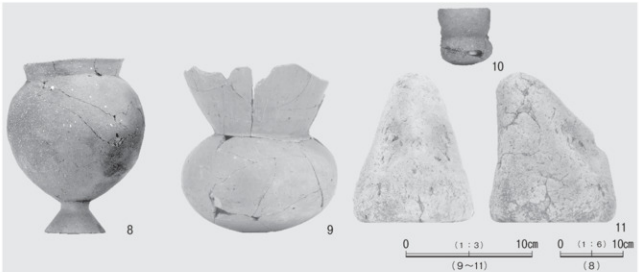
図版 12



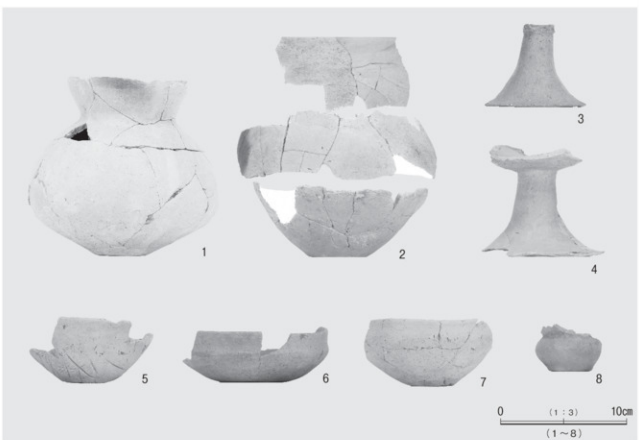
古墳時代　2号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物（1）



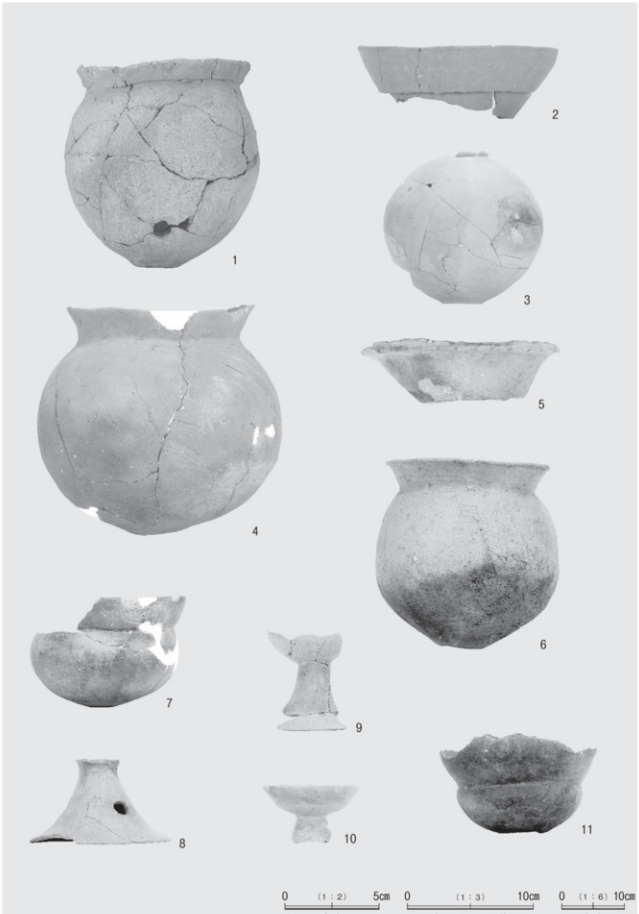
3号住居跡出土遺物（2）



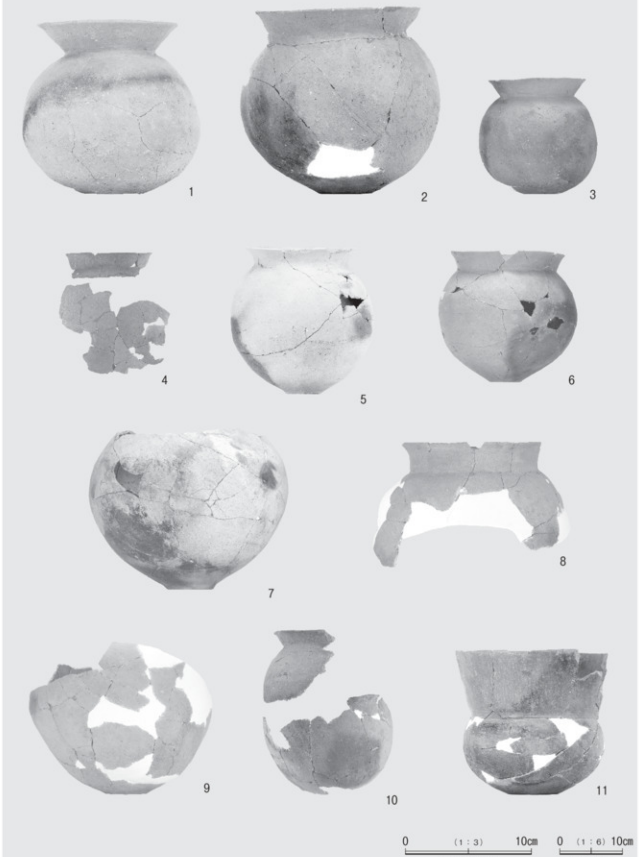
4号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物

図版 14



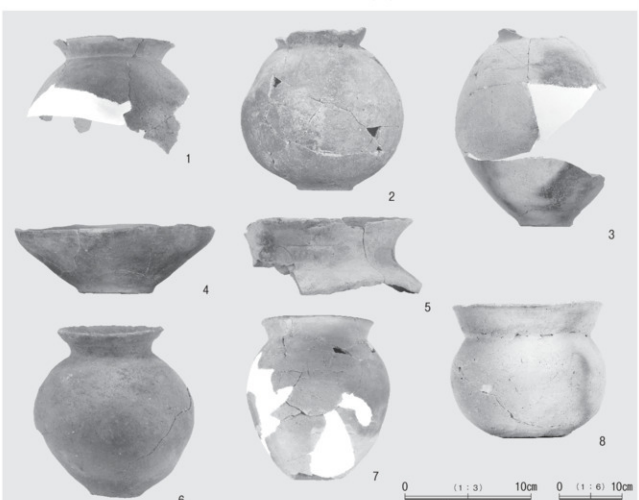
6号住居跡出土遺物



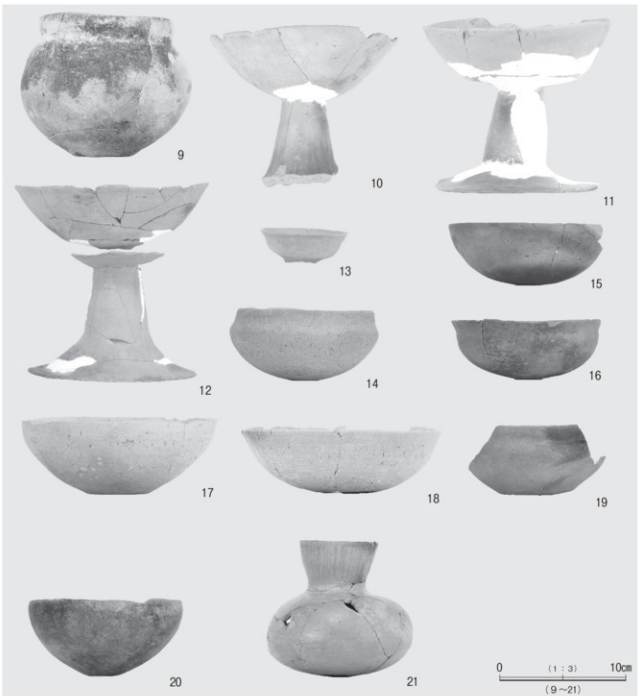
7号住居跡出土遺物（1）

図版 16

7号住居跡出土遺物（2）

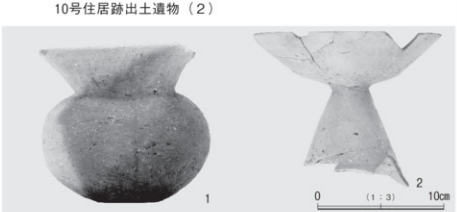


10号住居跡出土遺物（1）



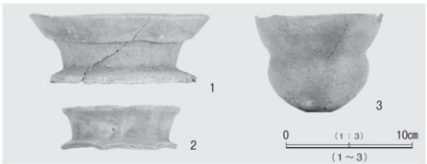
10号住居跡出土遺物（2）

12号住居跡出土遺物

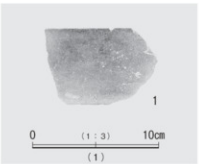


13号住居跡出土遺物

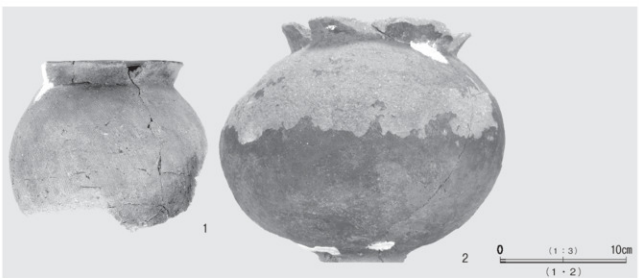
図版 18



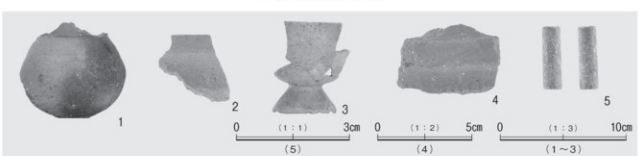
14号住居跡出土遺物



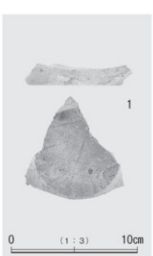
15号住居跡出土遺物



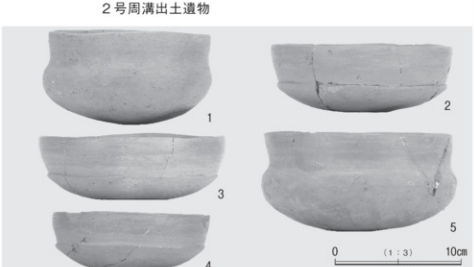
16号住居跡出土遺物



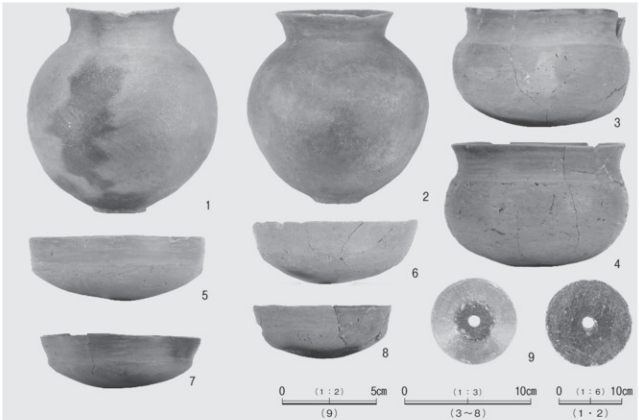
2号周溝出土遺物



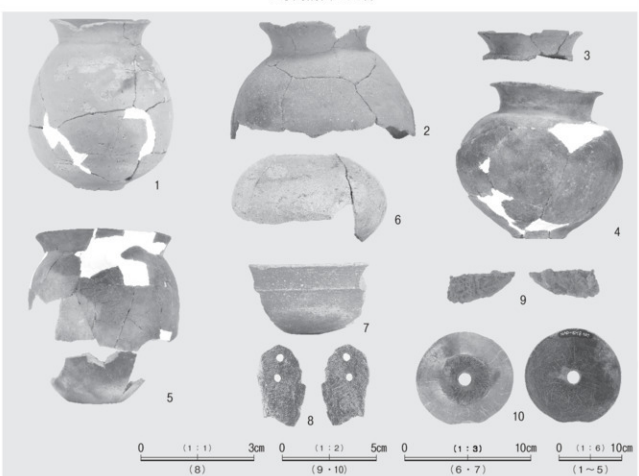
4号周溝出土遺物



6号周溝出土遺物



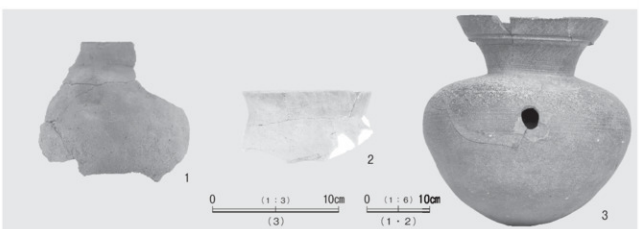
7号周溝出土遺物



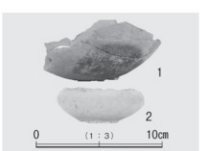
8号周溝出土遺物

図版 20

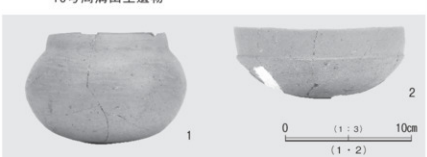
9号周溝出土遺物



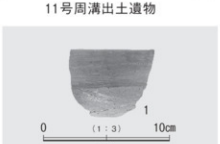
10号周溝出土遺物



11号周溝出土遺物

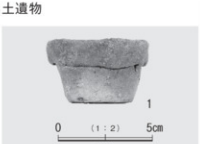


13号周溝出土遺物

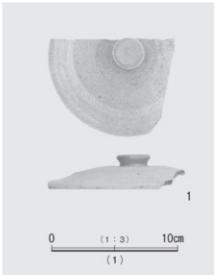


1号土坑出土遺物

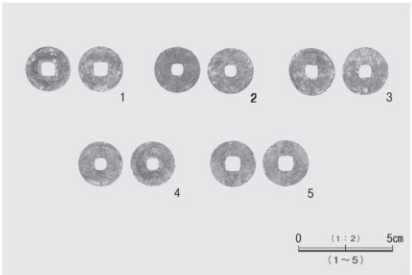
35号土坑出土遺物



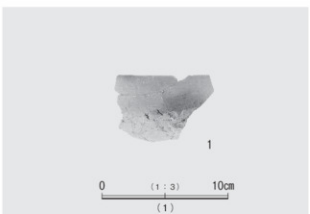
性格不明遺構1出土遺物



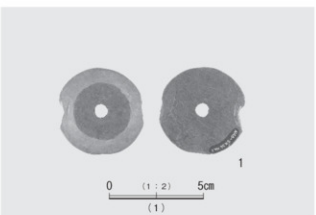
8号土坑出土遺物



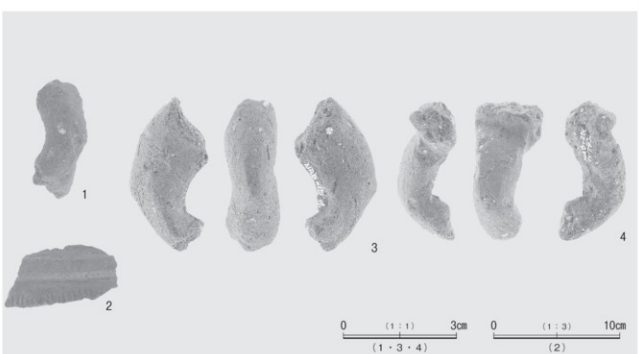
3号土坑出土遺物



15号土坑出土遺物

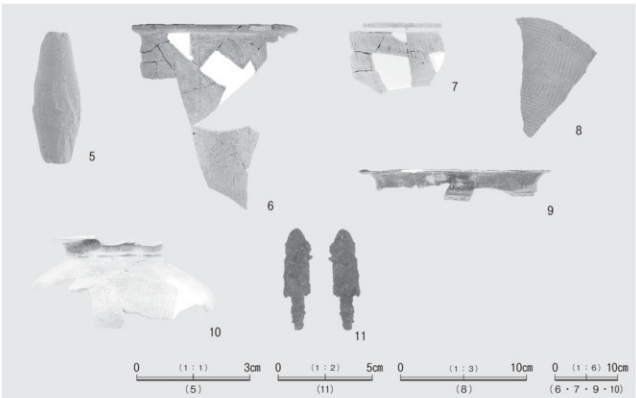


32号土坑出土遺物

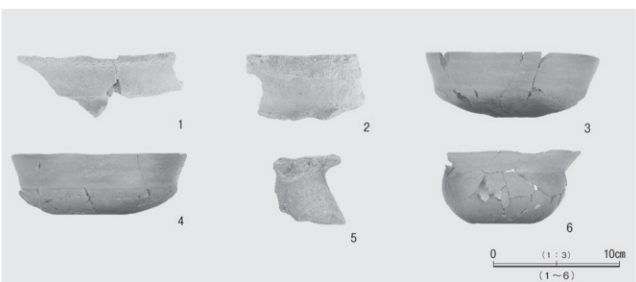


その他出土遺物（1）

図版 22



その他出土遺物（2）



試掘調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なんだいいせき
書名	南台遺跡
副書名	都市計画道路一本松・茂田線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	筑西市埋蔵文化財調査報告第８集
編集者名	渡辺久生
著者名	渡辺久生　筑西市教育委員会
編集機関	筑西市教育委員会
所在地	〒308－0031　茨城県筑西市丙360番地　☎0296－22－0183
発行年月日	2011（平成23）年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なんだいいせき 南台遺跡	ちくせいしおおあざおおつか 筑西市大塚46番地２ほか	502061	023	36° 17′ 11″	140° 00′ 32″	2010.08.11 ～ 2010.11.29	5,188㎡	都市計画道路一本松・茂田線整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南台遺跡	集落跡	旧石器時代	－	石器３点	今回の調査では、限られた調査区で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落と墓域とされた古墳時代前期の周溝（墓）ならびに古墳時代後期の円墳の周溝を確認したことで、遺跡の所在する台地上の歴史的背景を窺い知ることができた。 なかでも、住居跡（貯蔵穴）から出土した台付甕内に残された炭化米の検出と、地床炉で使用された五徳と思われる土製品の出土など古墳時代前期の生活の一端を遺物を通してより具体的に知ることができた。 さらには、古墳時代後期の円墳の周溝内（覆土中）から周溝内埋葬と考えられる意図的に配置された土器群の出土と朱の散布など当時の埋葬と信仰儀礼に対する新知見を得ることができた。
		縄文時代	土坑１	縄文土器・石器	
		弥生時代	住居跡２	弥生土器	
		古墳時代	住居跡18・古墳時代前期の周溝７・古墳時代後期の周溝７・土坑３・溝３・その他１	土師器・須恵器・鉄製品・石製品・土製品	
		奈良時代～平安時代	土坑１	須恵器	
		中・近世	土坑２・溝２	銭貨	

要約

道跡の立地を裏付けるように、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代さらには中・近世に至るまでの幅広い遺物と遺構を確認することができた。

弥生時代後期の住居跡２軒、古墳時代前期の住居跡１８軒は連続する時代の流れを示唆してくれるもので、また、集落の廃絶に合わせるかのような古墳時代前期の周溝（墓）７基の出現、さらには古墳時代後期の円墳の周溝７基を確認するなど時代の変遷については遺構を通して顕著に垣間見ることができる。報告の中では、古墳時代前期の周溝をＡ類とし、平面が円形で溝幅や深さなどどれをとっても規模が小さいものとしてまとめ、古墳時代後期の円墳の周溝をＢ類として明確に時代と規模によって振り分けられることも判明した。しかしながら、いずれも墳丘部分は削平されるなど埋葬主体を知る術はなかった。

奈良～平安時代の土坑１基と中・近世の土坑２基は、墓壙（穴）として比定できるもので、とくに中・近世の土坑からは北宋銭５枚を副葬し六道銭としていたことも判明した。そのほか、中・近世の溝２条は土地の境界を示す溝と思われる。

茨城県筑西市
筑西市埋蔵文化財調査報告書第8集
南台遺跡
－ 都市計画道路一本松・茂田線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －
印刷　平成23年3月25日
発行　平成23年3月25日

編集・発行　筑西市教育委員会
株式会社東京航業研究所

印刷　関東図書株式会社
〒336－0021　埼玉県さいたま市南区別所3－1－10
℡048－862－2901